川柳塔



No. 680

同人特集・私の一句

一月号

1984年

新春おめでとう会

大成閣

日

時

昭和59年1月15日(祝)午後一時開会

(心斎橋大丸とそごうの間を東へ約百メートル大阪市南区大宝寺町中之町二六

0 6 2 7 1 · · · · · · · · · · · · ·

挨

題

ねずみ

野

栞

紫 香選

懇親宴

各題三旬

替

五千円

柳塔社

JII

◆同人・誌友の皆さん大勢のご参加お待ち

祝甲子新春

西尾

栞

読初や菜根譚の一嚙り

のような組食のことであります。 置ま活 菜根とは読んで字の如く、菜葉や大根 菜根とは読んで字の如く、菜葉や大根 菜根とは読んで字の如く、菜葉や大根 であります。 は、中国の明の万暦年間に決自 であります。 であり。 でも。 であり。 でも。 でも。

ったのでありましょう。欲望を減じ、簡言葉があります。書名はおそらく之に依葉根を咬み得れば百事なすべし」と言うであります。宋代の学者汪信民の「常にのような粗食のことであります。譚は話のような粗食のことであります。譚は話

即ち、

いるわけです。

今年は鼠の年でありますので嚙ってのことを書いたのがあります。菜根譚に鼠

「ネズミの為に、つねに針を留め、蛾

ます。

言った、この心がけこそは、すべての生をつけぬ」という句があるが、昔の人が「鼠の為に飯を残し、蛾をあわれんで灯

ある。この心を持たない人であれば、そ命あるものを、はぐくんでいく出発点で

やりの心にこそ。

ます。正こ豊香であります。 は川柳雑誌より引き継いで六十年になり さて、今年の二月を以て我が川柳塔社

何卒奮って御参加の程、年頭に当って友の句集を刊行することになりました。この誌寿六十年を自祝して、同人・誌ます。正に還暦であります。

健勝ご多幸を祈って新春のご挨拶と致し 謹んで同人・誌友・柳友の皆さんのご お願いする次第であります。



川柳塔 月 号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

川柳塔 同人特集 ■連載 自選集 偶感..... 祝甲子新春 ■川柳太平記 誹風柳多留廿六篇研究(十四丁)...... 同人吟) 私の一 (68) 《川柳の群像》小林茗八 ………… 句 東 JII 西 西 尾 野 村 尾 大 好 栞 八 選 郎 栞 : : 36 34 31 4 2 1 38

水煙抄

秀句鑑賞

- 加煙抄

Œ

出本

水

黒

紫香

選

48

11

智

子 客

 $\widehat{66}$ $\widehat{65}$

守りの力と知らぬねねさん

偶

11-

感

JII

村

好

郎

思う。自分だけではない家族が病気になれば る。たしかにその意気功績を賞讃すべきで、 燃え上らせることによって成果が出たのであ もいとわない、よし頑張ってやろうと意欲を れることによって実現するものである。 狂ってくる。仕事にも周囲の事どもがスムー は病魔に侵されてはならないことをしみじみ 忘れてはならないのは、まず健康である。 自分自身も大いに誇り胸を張ってよい。だが 熱、会の運営協力のためならば風雨に遭うの られる方の多いのは多分各地の諸句会も同様 が発表されている。年と共に多人数になり ズに行われ協力されてこそ全出席が出来たの であろうと思う。このことは川柳に対する情 である。これは単なる川柳のためでなく総で 年でなく何年間も続けてその名を並べてい 本号には五十八年度本社句会全出席者の名 おんぶして花花と取りしたり顔 われも生き、人々によって生かさ

	私の句	春の僕ただ良寛をこころざす			編集後記	各地柳壇(佳句地10選/鈴木節子選)	本社十二月句会	柳界展望	初歩教室	「流 行」	路集「決 心」	「指定」	村上春巳君を偲ぶ	愛染帖
	牛		4		薫風				本	中	錦	/\ /\	宮宮	橘
1	尾	路			鬼				田	村ゆ	織	林孤	П	高
36	緑	郎	1		遊				本田恵二朗	中村ゆきを選	錦織文子選	小林孤呂二選	笛	薫
V	良		*		薫風・鬼遊・史好…								生	風
			1			:	:		::	:	:	:	(1	: 62
6			3		107	94	90	80	78	77	76	76	75	62

この昔の道歌を記憶しているが私は近頃く り返えして己に言い聞かせているのである。 自分の智能、手腕と苦労したことにより事業 を築きあげたにちがいないが、多くのすべて のお世話にならなければ何ひとつすることは 出来ない。お世話になっておりながらお礼を 言うことを忘れている。皆さんのおかげでと 信礼的な挨拶言葉しか出ない。

この程ある親戚の女性から手紙を頂いた。その中に「私は帝王切開によって医術と皆さんの看護とお祈りにより丈夫な女の子を授かりました。授かるということはどんなことか。この手術を受けたことによってありがたい事この手術を受けたことによってありがたい事ことなく皆さんに守られるのです。それを忘ことなく皆さんに守られるのです。それを忘れることなく、私は大切に生れた子を一生懸れることなく、私は大切に生れた子を一生懸れることなく、私は大切に生れた子を一生懸かよろしくお願い申上げます」と。

自他互に助け、助けられねばならない。 内外ともに厳しい容易ならぬ一年であろう。 水の水ともに厳しい容易ならぬ一年であろう。 水の水ともに厳しい容易ならぬし、 がいれて、 のでたく平和に五穀成の 昭和五十九年新春。 めでたく平和に五穀成

、生き方を念願している。 この名句を私なりに広く深く味読して今年 この名句を私なりに広く深く味読して今年



儿

尾

栞

選

寝屋川 市 江

お隣

0

猫

がわるさをして困る

てがすんでダイヤ

0 話

度

H

0) 家族

がみんな揃

1

出

智

子

木枯らかわい いらし いねずみに描いてやりましょう

しのポストに入れる招待状

おだてにものろう鞭にも打たれ 正直な鏡 へあかんべえをする よう

とろろ汁お人好し 待つ人のいない故郷に墓があり などほどほどに

谷

垣

史

好

桜井市 岩 本 雀踊 子.

冬の

兆し

が今年は早い蕁

麻

疹

こんにゃくの角がうまいぞ冬の

酒

こぼ n 萩過去の 女にふとふれる 遙かなる汽笛を情だなと思う ぼたん押しうまいが鉛筆削れぬ子 へそくりを出し合って行くフルムーン つじつまのあった人から帰される

コスモス見てる雑用を思いだす

借り傘 秋茄 子 0 を食べる女にあるおごり 情を妻が干している

傷口 木馬 のひろ 0 涙 がる酒 細 Vi 雨が降る E 酔っている

成 まえてる女の指が武器になる に住むプライドは持っている

ひとり暮しかと鼠も怪訝そう 端金それ 枚その他百余の年賀状 が子供の言うことか チュー

ハイはがやがやがやと飲むがよし

いもの

ねだりよ夢二の絵

0)

女

4

生返事俺には俺の思案あり なきさつはどうあれ時がきて妥協 いきさつはどうあれ時がきて妥協 大阪市 でたきものに鼠算	表理という重みを消した国ことば 夕焼の角度錦の秋の山 気がついてみたら又もや少数派 気がついてみたら又もや少数派 気がついてみたら又もや少数派	ら人形峠の秋に酔う ら人形峠の秋に酔う ら人形峠の秋に酔う ら人形峠の秋に酔う	ご無沙汰の人が下さる年賀状鈴つける役がねずみに残される貧しさにあきれてねずみ家出する正月に正月の顔どぶねずみ
Ш	野	高	高
П	田	橋	杉
<i>51</i> .	素良	操	鬼
生	身郎	子	遊
友達と残り火囲う新春囲う友達と残り火囲う新春囲う	箱開けたら愛が消れて定年春に芽れてで定年春に芽いる場が、	今日は今日の水で満そう朝の甕 私だけの月と信じている芒 匂い袋の愛に根負けしてしまう 濁り酒過去を許そうとはしない やじろべえの我慢袋に泣かされる 日満先生の計 米子市	大飼うてそれから庭の荒れたまま 満腹にすると猛犬すら吠えず よい袋くれた商魂持ち歩く
	岩	林	八
	田		木
	美	瑞	千
	代	枝	代

収賄の波紋まさかの町が揺れ鯖寿司の酢は母のもの秋祭り	結の顔でなかったデーステーステーステーステーステーステーステーステーステーステーステーステーステー	お手ョドコすこし水からフニは出しお静かにおやすみやすと錦蛇私の目届かぬ背中で年を取り	計報しきり母の終章ふと思う女或る日そむきたくなるパンの耳女可る日そむきたくなるパンの耳喜寿傘寿自分で生きる顔を持ち	ちぢんでる母の乳房に残る夢いつ来てもいいお迎えの九十五母床に就く (55歳) 吹田市	決心がついて沈んだ角砂糖 基参り故郷の風はみな他人 生涯の味方とおもう影法師 生涯の味方とおもう影法師 生涯の味方とおもう影法師
	遠	西		藤	嘉
	山	森		村	数
	可	花		d	兆
	住	村		女	代賀
年金の暮しにペンが乾き出す 玉野市	らさきの好きな女になっな風と鳴らぬ電話が憎く切りのレモンの自負に敗舌のなんと空しい日記帖	以こなろうなろうと日を坊ぐ 肉親の便りを待ってる冬の水 田歌山市	ヒロインはいつも片道切符なり晩秋にこころ許した旅吉備路働くこと好きで脱げない鬼の面ヒロインが脱いで芸術らしくなる	行き倒れオリオン星座に雨が降る 子離れの愛は血まみれ北きつね 蝶が来てわれにかえった狂い咲き	島の戸をたたいて南風の波となり 酒がまわるまでは御両家かしこまり 正装の帯は男を近づけぬ 島根県 従いてくる影もよたよた猫じゃらし 解らなくなって来ました片ちびり
小		西		宮	小
谷		Щ		西	砂
仙				3/.	4
				弥	白

秋の空楽しくゆれる万歩計降りかかる火の粉払うか逃 平凡 夫婦 丁寧に鏡を拭いてまだひとり 割 TE 春 玉 駅 年金の暮しへ雑音持ってくる スマートに老いたしうとまれてはなら 余命まで手習う事が多くなり タイミング合 を待 近所に りかかる火の粉払うか逃げようか 葱の素直 が 前 戎カラメルを買う老夫婦 n 7 にならぬ絵をまた描いて消す 0 切っ な夫婦に昼 かっ 2 音 痛む凧機嫌よく上りすぎ には黙って赦すこと多し めしに日ゼニの箸を割る ても大蛇 3 がきかなくなって年を読む 旧居ダブる瞼に迷う足 馴 0 てし た途端 足踏 座布団湯飲みも貸しましょう と寄りたくなる店がある n ぬ住 に冬の陽が弱い み軍 まえば気楽な守 わない耳にまた慌て 居で の影がない になれる大蛇 に勘をとりもどし 歌口ずさむ 聞 くゆとり 藤井寺市 備範 の子 松原市 囲 県 児 玉 堀 島 置 江 重 与. IF. 呂 1 朗 じわじ 眼差 無防 気軽さへ愚痴も悩みも埋めに来る紅葉の下で漫画をはなさない お世辞していろんなセールスくる新居 賀状書くひとりひとりを描きながら 罪 ボパ磁 石段 聞き流すそんな芸当出来ませ 目標を摑んだままで蟻 ゴキブリ 旅 業消滅 六ス猿 宴 賓 チンコはないがスナックある僻 つ家族いて幸せな大茜 中でもあげるのやろかお年玉 吹かば執着もなく散る木の 石 持 ちの しに知 備 で折りたたまれ へ税金ばかり気にかかる れ気疲 わと情けの で紫の衣の前 の次に妻子を守る猿 つ男と昏れ 果て満ち足りた寝息聞く 酔 祈る音かも滝落下 0 不運 恵の浅さをさとさ 々さんは修羅 れ新居の祝 スリッパの下に居た しみる祝 る秋の地 に臥 る影法師 地獄 60 L すみ 乗 酒 れる n 葉 h 豊中市 大阪市 大阪市 根県 地 天 津 堀 安 守 江 藤 IF 芳 寿美子 T 柳 子 梢 伸

今日生きる笑顔を鏡へ整える がラス窓ハエどうしても抜けたがり がラス窓ハエどうしても抜けたがり 酒の席なって存在わかる人 便り来ぬ亡母へせめても正信偈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ロドラマ な眠る女 と眠りふ 女	た旦や男は修羅場の明日思う 元旦や男は修羅場の明日思う 正月を哀しと思う鯛の目よ 正月を哀しと思う鯛の目よ 八尾市 病む日々にまぶしく光るりんごの朱	出る政党へ入れて出る政党へ入れて出る政党へ入れて
浦	高	高	大
野	橋	橋	路
和	千 万 子	タ	美
子	学	花	幸
七転び八起き僕はン十回で話器を置くと遠くなるニューヨーク受話器を置くと遠くなるニューヨーク要が左に寝ていてよくねむれ事がとう」を大切にして生活し「ありがとう」を大切にして生活し、「我一遇シャッターチャンスへ昂奮して転び八起き僕はン十回	年の瀬や道定まりてさだまらず 五十八年のインキはすべて使い切る 蔵末募金子のボーナスが気に懸り 藤木募金子のボーナスが気に懸り で春を待つ鳥居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	脱線はしても阿弥陀の手の中で対前の笑顔が語るデスマスクす前の笑顔が語るデスマスクまえる前にサイコロ振っている実力とは別に度胸で世を渡り避けられぬ運命線は受けて立つ伊丹市	船へ世界の風は丸く吹く の先は言わでもがなの二 の先は言わでもがなの二
江	柳	樫	垂
城	楽	谷	#
修	鶴	寿	千寿

馬

丸

史

脇役の演技へライト明かる過ぎ	百日紅ヌードを晒して秋の雲	小さくとも一善をした日の夕陽	SEXだけで無い愛情だってある	鳩乱舞待ってたように散る銀杏	京都市松	日は早しすでに初七日二七日	恩返しみな幻となりにけり	オーイ雲よ私に父はもういない	生きたくて父遺言などありはせぬ	あの時の酒取り上げて悔いとなる	こっそりと最後の煙草父は吸う	竹原市 小	自衛という名で税金が落ちて消え	ワイングラスを磨きいくさの準備する	特売の肉が入歯にそぐわない	母の顔浮かべ土壇場知恵もらう	ラッキーが重なり己れ見失ない	結納の着くさわやかな朝を掃く	鳥取市小	六十路坂まだまだ残り火が燃える	追い切れぬノルマが夫婦の会話消し	すさむ世にせめてやさしさ忘れまい	わが道を行く子に長い旅つづく	背のびした親が晴着の七五三	生きる汗心足る日とたらぬ日と
					Ш							島							林						
					杜							蘭							由多						
					的							幸							多香						
日満さんを悼む(二句)	倉吉市	君もまた塔から降りて振り向かず	日満氏を悼む	灯台の生れが僕と同じ年	日御崎灯台開設記念	わが家にも名人老妻の蠅叩き	移りゆく世相へ流されまい老軀	愚痴一つ言わず聞かずの日の空虚	大自然に呼吸貰って八十年	出雲市	ふところ手策におぼれてゆく策士	土壇場で女にペース奪われる	バカがつく正直妥協点がない	銀婚式妻への手形まだ落ちず	安全牌の妻が抱いていた謀叛	十字架の重さに耐える車椅子	美祢市	てっぺんに挽歌見つけた秋の塔	無意識に受け継いでいた父の主義	挫折しかけて六法の世話になる	転落の詩集が売れるネオン街	スピッツがあまり静かで気にかかり	SOS死語にしている父の船	竹原市	猫の眼も初対面とは思うてず
	奥									原							安平次							森	
	谷																							井	
	弘、									独							弘、							菁	

道

居

仙

朗

山脈へ熱い炎の絵を画こう砂浜に継ぐ者もなく甲羅干す砂浜に継ぐ者もなく甲羅干す	また一つ賢くなって引き下がり また一つ賢くなって引き下がり また一つ賢くなって引き下がり	十つ重ねて亡父の癖に似るから初春になる一つ重ねて亡父の癖に似るから初春になる一つ重ねて亡父の癖に似る	中でポルノに気分揺れますの 年でポルノに気分揺れますの りだけど情熱家で通り りだけど情熱家で通り 下関市 国 下関市 国	リアで比較是にが死ぬると地震
	田	Щ	弘、	
	維久	滋	半休	
	久子	雀	休門	
藁葺きの屋根の風情を旅の窓 朝霧の向うで呼んでる誰方です 自じみ舟三ツ四ツ五ツ明けの湖 島根県 これの対象を競演す	適齢へ自由の女神あわて出し、いらはらの心を語るプロフィルがの冷えアドレスブックに死去と入れいのからないでいる。カリカの心を語るプロフィルの場でして知かき命を菊人形になって短かき命を菊人形になって短かきの	有罪も無罪も仁王振りむかず 有罪も無罪も仁王振りむかず	たにまったを行っているが、たっとなだめている怒りいないとなだめている怒りでかぬ顔で逮捕されるいとながのでいる怒りがら早く来る師走を行っているが、	5. けて) 静っこ思う 人と持つ 藤井寺市を追う足はどこまででも走る
榊		仲	久	吉
原		L*	保	岡
秀		どんか	正	美

敏

房

子

ページ繰る良いも悪いも初ずくし牛歩にも一つたまわる歳の神 笑い袋堪忍袋は丸く縫う秋に生れ秋を愛する影法 老化 もう 割 折 雑 木枯らしも悟って聞けば笛 そそとして飾 ·L 社 玉 わ長 故 秋競う愛好家の菊談義 預った荷物案外重かった 冬の陽にやさしくなった影法師 ねずみ年どうだ三毛猫くやしかろ れぬ たる旅 き道 里も 一命令ならお叱りもごもっとも 一中が目出度いという〆めかざり り紙のだまし舟なら乗って見る 踏にもまれてト 祝と書くこと多き神無月 13 海は見えずともよし小さな輪 眼 現象とは哀 心がこっ で見 軒 0 に新に出 の終 並という n ちへ来いと袖を引く ば無駄にも三分の理 6 りの夜汽車 Ĺ ぬあなたよ吾 核家族 かりボ ゲが生えている 来ない飯 1 師 か 茶碗 な ル 0 寝屋川市 ペン 音 亦 大阪市 島根県 大阪市 か 紅 神 稲 錦 藤 夏磯 葉 H 織 道 冬 頂 文 留 葉 子 7 子 血圧計 運命 好転 心電 太陽 だま 大晦 八分目 独り居が好きな女でうどん好き 花言葉 和紙 噂ひらひら嬉しい否定となりそうで そんなおかめ 風ぐるまひそとあなたの風を待ち あ なべものの湯気へ五体の ボランティア春夏秋冬流れ雲 方便の嘘をつらぬく まあ聞いて下さい 音 密検査 装などしない放 なたの胸にわ っ白なこころで待っている女 線 図 L に書く三下り半は女文字 のよろこびを待つ鶴を折る を正視出来な 日ひとまず打っとく句読点 の中から聞こえてくる正 0 と採血にふりまわされる わざわざひもとくこともない 舟と知りつつ乗ってくれ お腹も口も幸せも 中に抱 すめば病名また増える 喜一憂する鼓動 も生命と決めた人がいる いている罪 たしが棲 課後 いサングラス 寒い部 腹の立 0 ネジ外 相 めず初春となる がある 一つ話 屋 和歌山 堺 大阪市 る す 0 市 市 松 大 儿 道 # 原 寿

子.

美乙女

楓

楽

ろうそくが揺れて祈りが深くなり 巣立たせて運動靴が淋しがり 船頭も川も老いゆく渡し舟 が水摩擦ひとりの朝のスタートだ この橋と決めて後ろを振り向かず この橋と決めて後ろを振り向かず	人起こされると思う老夫婦と思う老夫婦お子市株子市株子市株子市	紅葉の便り書く がラを植えて行く がラを植えて行く メチ市 楽しい秋の空 米子市	きになって蝶までつきまとい樹へ幾たび教え乞うことよ 米子市
野	青	菅	田
坂	戸	井	中
な	H	と も 子	亜
み	鹤	子	弥
人恋しリンゴの皮が長くなり言い勝って自分に負けた夜の雨言い勝って自分に負けた夜の雨血の絆沼より深き闇もあるボアイエもガルボも遠し青春夢ボアイエもガルボも遠し青春夢がアイエもガルボも遠し青春夢がアイエもガルボも遠し青春夢がアイエもガルボも遠し青春夢がアイエもガルボも遠し青春夢がアイエもガルボも遠し青春夢がアイエもガルボも遠し青春夢がアイエもガルボも遠し青春夢がある。	台の公園墓地から見えては役に立た土器に太古の息土した土器に太古の息土した土器に太古の息土の見むと亡母が甦るの見がのぬ落葉が溜る吹れ切らぬ落葉が溜る吹れ切らぬ落葉が溜る吹れ切らぬ落葉がかる。	地工三世貧しきことに触れ 大五三世貧しきことに触れ 病んでから夫が優し子がやさし 黒を着て女華麗な彩を持つ 生を着で女華麗な彩を持つ	書ひ
春	杉	藤	柳
城	浦	田	原
年	婦 美 子	泰	静
代	六 子	子	香

鳥取県	XとY軸の交点に居て平和主義 不透明時代歯ぎれも悪いお役人 不透明時代歯ぎれも悪いお役人 不透明時代歯ぎれも悪いお役人	風の音素足の爪がうずきだす 悪しく吾が子の前をたちふさぐ やがて重荷になるかも星冴える 生きざまを晒して果てぬ秋桜 のっそりと孔雀が歩くそと股で 実らない恋よ山茶花咲きはじむ	逆転劇運が手伝う流れ弾 とい悔い言わずもがなの嘘をいい をいいと始めた仕事をもてあましたやすいと始めた仕事をもてあました。 といりではかどる針仕事	道草の精子は本音を言いたがる ながれながれて終のすみかに萩こぼる ながれながれて終のすみかに萩こぼる というでは、 というでも、 といるを とった。 といると。 といるを とのななな。 とっななななななる。 とのなななる とのなななななななななななななななななななななななななななななな
鈴		小	松	伊
木		林	本	藤
村諷		孤呂二	はる	春
子	20 × 00 × 00 × 00 × 00 × 00 × 00 × 00 ×	Ξ	4	子
木枯らしに男の背が追われてる	幸せな無職で旅をして回り 旅の味朝の温泉あついなり 旅出会いそれから賀状くれる人 旅の味朝の温泉あついなり	安協する距離かんがえて風に佇 内緒にはできぬと水子繰り返す 内緒にはできぬと水子繰り返す を の食に馴れ根性を見失ない 河村日満氏逝く 合掌の瞼に残る広い胸	無しく線がきまった舞扇 真面目過ぎて初恋を取り逃し 二次会を抜けて帰宅の月の道 一次会を抜けて帰宅の月の道	を を を を を を を を を を を を を を
れてる	指で 京都市	奈良市	米子市	柳井市
れてる	詣で 京都市 都	- 10-10	光子市小	柳井市 弘
れてる	都市	奈良市	子市	が らしい ながら

17

慶

生

芽

無の勘の名の報りや猛吹雪 夕食のおかずは孫にみな取られ 女何故男の嫌う髪にする 慰返し求められてる風が冷え 園遊会陛下達者なユーモア 秋茄子を一番先に食べた嫁	での香りにも似る雪が恋の香りにも似る雪が を交く背中妥協は許さ なっていとで覚えの亡 なっていたでがす	自取県 を贈の父へ新米炊き上がり を贈の父へ新米炊き上がり であかり手を抜かれ を開め父へ新米炊き上がり	晴着晴着祇園南座四条橋芸少しできて一生を見失うま少しできて一生を見失うある不安雨の波紋を見据えてる
平	大	川 西	ij
H	Ш	崎川	I
実	٤	秋 洋	<u> </u>
男	金	女	•
全権に勝てず次点という浮目 金権に勝てず次点という浮目 を権に勝てず次点という浮目 を権に勝てず次点といが盛業つづけてる いンジよりサンマ炭火を恋しがり 玉子のカラ積んでたこ焼店を開け ジョギングの序にパン屋へ回る日々 ジョギングの序にパン屋へ回る日々	一転未練心を山に用するとこありなりの意義試験管なりの意義試験管なりの意義試験管なりの意義試験管なりの意義は験管をした。	茶断ちすることもなかった誤診とさえ似の合間に研を窘める大間が嫌いで今日も仔犬抱く人間が嫌いで今日も仔犬抱く人間が嫌いで今日も仔犬抱く	へのまで集まる遺だれの芸術へ石負け だれの芸術へ石負け
島	田	家	TP
静	軒		路
馬	太楼	代 仕 男	杖
,,,,,	14	74	17

退院を喜ぶ家人の安堵顔 参称品思った程には売れもせず 大型ゴミですてる鏡台小茶棚 大型ゴミですてる鏡台小茶棚 松江市	でッドから引きずりおろす老医法 を巻いてこんな平和を嚙みしめる 続柄に女の過去がのしかかり 口裏を合わすと焦点ぼけて来る 坂道で女は風を待っている あの人に言えぬ悩みを言付かり	母に似ぬ多才多趣味でまだ嫁かず を掘のそこに柿熟れみかん熟れ 発掘のそこに柿熟れみかん熟れ	愛らしい目の子ねずみが網の中 鶏の声で目覚めた日が恋し 元談でない一と言を妻見ぬく すタコナンキン好きで達者な亡母だっ
恒	竹林	越	た森
松	中 野	知	田
叮	綾	-	カズ
紅	珠 光	水	エ
浮浪者の方が詳しい街の地図 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	逃げ口上ふっと女が考える よく見るととても可愛い鼠の目 聴診器胸のあたりでふと止り それぞれの思想でゆれる万国旗 同居して血のつながりがふと乱れ だこ迄も独りで歩く蝸牛 どこ迄も独りで歩く蝸牛	八百万の神の足音する霙 八百万の神の足音する霙 八百万の神の足音する霙 が立る 八百万の神の足音する霙 が立る が立る が立る がいられる綴り方	老兵といわれる人で酒が好き 善人の夫と知った夜の蜘蛛 故里も住めば雪にもある温み 松江市
रंग	竹	梅	舟
合	内	本	木
茂雄	す み 子	登美也	与 根 一

ふゆ里はいいなこのままここで暮し度い	人生の旅路一人落ち二人落ち今更に人の心の怖さ知る大いなる初日拝んだ瀬戸の海	少を呼いた名所を明す五色沿倉敷市	会津盤梯山にて	一粒の米百姓の手でつまみ	根性をじっと見つめる忍の額	秋灯下我には我の城で有る	美しく無言で落ちている一円	鳥取市	平均まで生きたいという欲じゃろか	よく見れば僕の妻にもひげがある	畑売り長者番付に紳士録	古都の秋妻と歩幅あわしとき	一生の不作と妻もおもっとり	東大阪市	初恋の人に出会えば子沢山	翔び過ぎた女着物を忘れかけ	無い者に関係のない第二土曜	末っ子の内孫抱いておらが初春	元日と言っても居れずおむつ乾し	大阪市	峰越える越えた向うに峰がある	職安で仲間が出来て職がない	
63		藤						清						斉						欄			
		井						水						藤									
		春						_						三十四									
		日						保						四四						蘭			
	あたたまる一つの知恵を嫁がもつ油断した子の手風船風に逃げこれだけの酒で酔うのも三ヶ日	正月の記憶亡妻の箸僕の箸		子にひかれたまの休みに参観日	参観の親のマナーが気にかかり	その口を抑えるポスト用意する	出かかったそのひと言が言えぬ席	団欒の零囲気壊すのがひとり	大阪市	愛の炎で焼き殺したき君なりき	癌でなかったことを皆に告げ歩き	働く事の楽しさ知った寡婦の酒	紫陽花のような女に言い寄られ	蛍火の冷たさを持つ未亡人	岡山県	気の弱い男で恋を持て余す	出て行くはあんたでしょうと婿養子	みぞれの日オムツの湿りに似たふさぎ	邪魔なのが女と二人にしてくれぬ	もう泣きに行けない里の母が逝き	出雲市	後戻りしないぞ人生の曲り角	
稲			西						河						直			C			板		
田			村			×			井						原						垣		
亞			早						庸						七五						夢		
作			苗						佑						面山						酢		

明日知れぬ生命と思い形見わけ 兼六の松の雪づり冬支度 岸和田市 吉 水 照 江お互いが白髪で終った日の出会い	もう年か煎じ薬をすすめられ、小銭入れボスにおさまる五百円、小銭入れボスにおさまる五百円、平凡な倖せ願う初詣で、単和田市・島・崎・富志子・平凡な倖せ願う初詣で、単和田市・島・崎・富志子・	忘れたい人が居るから詩になる これたい人が居るから詩になる はいまれたい人が居るから詩になる はいまれたい はい	石段を上ると涅槃の温い風 和歌山市 福 浦 勝 晴空抱に終止符のないお母さん 和歌山市 福 浦 勝 晴空協せぬ男に師走のつむじ風 の人もぼけたと自分は棚に上げ あの人もぼけたと自分は棚に上げ また はんまた年一つ おおし	程にで持
参道に昔の駕籠が生きている 関大の声をうしろで聞く竜馬 四国に旅をして 岸和田市 芳 地 狸	地の下で川は泣いてる大都会夢の中亡母はやっぱり案じ性ないように祈るだけをいかりない。	学和田市 古 野 ひ色むらも手づくりの良さと言ってくれ 横しさはこんな言葉にしてしまう 淋しさはこんな言葉にしてしまう かん形の黄門さんと撮っている	世和田市 原 さ よが一トボール老いも燃している闘志 関からぬ態度列車の酔うた客 関からぬ態度列車の酔うた客 はの村も祭りか車窓に立つのぼり 出の村を開からぬ態度列車の酔うた客 はいる はいしゃ はいしゃ はいしゃ はいしゃ はいしゃ はいしゃ はいしゃ はいしゃ	岸和田市 清 野 これオンの灯流れ星など見えません であれまは今が出番と咲き誇る

村

美しい人の眉間に皺をみる	こっわいあ	五人家族一人はみ出る置きこたつ団地の灯順々に付き夜が来る野相見が金運有りと世辞を言いま相見が金運有りと世辞を言いま稼ぎ夜回ってる洗濯機	共稼ぎ女房負けない口答え 北学製品の中で割箸まだ達者 ですよと医者が釘を打ち まですよと医者が釘を打ち	老妻が空を嫌がり船車便 鶴亀に石が化けてる竹林寺 コサコイのはりまや橋に川が消え
槙	Ш		行	原
田	上		天	H
英	渓		于	明
詩	水		代	春
正月はいいな借金取りも来ず針の目が老いを素直に自認させ針の目が老いを素直に自認させまいるの赤提灯がよく目立ちないるがまぬから婦唱夫随でじっといるをしているがある。		トンビぐるぐる回る地に一つの死 ドンビぐるぐる回る地に一つの死 がックミラーに顔がうつって翁面 風に乗り蜘蛛の走るをみてしまう	粋な馬鹿になりきれそうな秋 性が萎むとやがて冬の底性が萎むとやがて冬の底 で天反響の装置あるらしく の天反響の装置あるらしく	負けられぬ男は自然薯好きと言い手の温い人が安らぐ背を持つ(倉吉市)を入れる。
浜		野	渡	渡
本		中	辺	辺
義		御	菩	独
美		前	句	歩

ヤヨッシャと聞いてやり 際だから言うておく をかいており をかいており をかいており	籍に身をおく八十路の母厳し がに出て政治家になった妻 ち読みの雑誌で世間を軽く呑み ち読みの雑誌で世間を軽く呑み	三	唐津市 東まれてシャッターを押す露天風呂 深夜風呂阿蘇の大気が忍び寄る 紅葉は耶馬の大気を吸うて冴え お天気と金と休暇が溶け合うて す子里忙中閑の放ち牛
佐	松		兵 田
野	本	部	本 口
白	忠	四	虹 六 六 7
水	三	郎	? 汀
故機 腐人婦	二二月月 とエスかか	年い い駄柱のし	水やりを頼ん 水やりを頼ん 孝式より入院 がある 大国でも世話 大国でも世話
せ コにら	払むこと まきり と妻り	張逆立ちして歩く 張逆立ちして歩く	毛性立くまいと馬を行る 毛性立くまいと馬を行る 毛性立くまいと馬を行る 毛体立くまいと馬を行る
てくる マーシャ	払い工面する おい工面する おこと考える おこと考える 高知	張逆立ちして歩く 張逆立ちして歩く	住立くまいと鳥を所る 話好き友の席も取り 話好き友の席も取り 兵庫
マーシャル 高知県	と妻に詰めよられ と妻に詰めよられ と妻に詰めよられ でこと考える 高知市	ははりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり	性立くまいと鳥を所る に強へ薬をあげ に通知がほしかった に通知がほしかった に通知がほしかった に通知がほしかった
でくる 高知県 赤	払い工面する払い工面する払い工面する	張逆立ちして歩く張逆立ちして歩く 張逆立ちして歩く	性立くまいと鳥を所る に強へ薬をあげ に通知がほしかった に通知がほしかった に通知がほしかった に通知がほしかった

注射だこ出来るころには試歩許す 塩泉見下す我が家無事にくれ 鬼瓦見下す我が家無事にくれ 鬼瓦見下す我が家無事にくれ りつしかに娘の指も世帯じみ 島根県 人譲し田舎の町へまい戻り 島根県 しな郷の自然にいたわられ 雨をきくゆとりになって友白髪	げ を そり	縁をつくづく思う霜の朝 書をすっかり取られこれでよし 客準備大根を吊り大根を埋め を準備大根を吊り大根を埋め	千本飲めば此の罪女もたしかに女丸
大	稲	Ξ	
森み	葉	宅	
孝ど	星	ろ	
華り	斗	亭	
深鉱炉二本休んでいる平和 深鉱炉二本休んでいる平和 が立がっの笑顔に本音秘めてある グンボール万円札のなれの果て 野仏のあたり緑の風をため 放されてから風船は考える 山の子がそっと貝殻見せてくれ またテレビに酸素を吸われ脳硬化	あンチ なぞ に な で ひ む で 似 ぬ	したし捧げた愛の空見猫の美貌をねたむ見猫の美貌をねたむなたたむにし捧げた愛の空	のある言葉が妥協とり
時	北	松	藤
末		高	原
-	勝	秀	鈴

峰

江

美

灯

角があり望月ならぬ総理の座	和泉市	日稼ぎの家計赤字になりたがる	勝気でもしょせんは女影法師	夢の日を叶えてくれる種袋	ウルトラCであっさり逃げた蠅たたき	隙のない男冷たい影を持ち	八尾市	くよくよとしないは呆けの前兆か	時に依り飯の茶碗に愚痴も盛る	日本語丈では所詮暮されず	カタカナの新語が僕を戸惑わせ	カレンダー気分一新してめくり	守口市	送られて帰りの路は近かった	忘れるに七十五日はかからない	さんざ世話やかせた菊のすまし顔	お化粧をしても手の皺正直な	服新調うれしいことがあるように	大阪市	共稼ぎ子宝よりも先ずお金	同居したが食事のことで又別れ	無差別に握手温い手冷たい手	黒い手が白手袋で誘いに来	役に立つ傘になりたい八十歳	仙台市
	岡						飯						野						本						Ш
	井						田						呂						間						村
	やす						悦						右						満津						映
	お						郎						近						津子						輝
姿鮨の瞳にうろたえる箸の先	朝の陽を拝んで今日をうたがわず	少女期をすぎて湯豆腐好きになり	米子市	秋の野で仲間にまじるはぐれ鳥	手ぶらでも肩抱くように迎えられ	あきらめて素足で渡る丸木橋	わだかまり溶け満天の星仰ぐ	懸崖の菊が見上げる秋の空	米子市	熱の児へなかなか明けぬ夏の夜	雨だれの音へ予定を立て直す	生きている証を針へ残す老母	白地図をうめる二人の彩がある	捨てる物まとめてみたがまた迷い	米子市	正座してスリッパの音待つ客間	スリッパが先に階段飛んで降り	半分の胃でもやっぱり酒を待ち	政界の駆け引き見てる昼の月	城跡と月の話は長くなる	米子市	防音壁で景色も見えぬバス旅行	超古米溜まった頃に不作来る	天皇杯重味つくづく開催県	盗人に花束贈るプロ野球
			寺						雑						桑						石				
			沢						賀						原						垣				
			みど						美						伊						花				
			ど里						111						都	i.					子				

大国はみんな小さい島で揉め大国はみんな小さい島で揉め大国はみんな小さい島で揉め	駅越髪け同	下司とって未式ない賞状がとびに仮名よむ児等のの座は捨てたしゆずりたんでみたい女に妻の座がんでみたい女に妻の座ががの座は捨てたしゆずりたがとびに仮名よむ児等の	背を向けた日もある父の橋渡る 間き流してくれる亡夫あり独り言 順も流してくれる亡夫あり独り言 値札見て妻も派手だと腰をあげ 転勤の紳士にあったスキャンダル 雨やどり妻のパチンコつきはじめ
	河	大 崎	奥
	原	江 山	Щ
	みのる	秋 美 月 子	山
木犀匂って案内など要らぬ ンテンポずれたプライド大切に ンテンポずれたプライド大切に がいて妻子孫まで揃う古稀(長兄の古	から悪人消えるから悪人消える	ルニンドをた もれて陽は昇 もれて陽は昇 かの山河見た を がひそん	を 素人の顔で神さま仏さま 素一つなく空しさに止めどなし 悪一つなく空しさに止めどなし 階段がおとしですねと囁いた で要中につき」へ言葉失くした枇杷の花 和歌山市
足句って案内など要らぬいて妻子孫まで揃う古稀 (長兄のいて妻子孫まで揃う古稀 (長兄のいて妻子孫まで揃う古稀 (長兄のなりの装いで酌ぐ屠蘇の味	球から悪人消えるお元日 大・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	生のハッピーエンドをただ祈り をでっ 有性してい 用が用ける おいらの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からがしまって はいっち はいい しょう はい はい しょう はい しょう はい	和歌山市 へし味で終える人生愛おしむ しいはですねと囁いた ですれと囁いた ですれと囁いた の顔で神さま仏さま 和歌山市
足句って案内など要らぬ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	球から悪人消えるお元日 大・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	生のハッピーエンドをただ祈り との彩に染まってゆく平和 からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの影に染まってゆく平和 というがき しょう はいい からが はい	和歌山市 人の顔で神さま仏さま 一つなく空しさに止めどなし 一つなく空しさに止めどなし やにつき」へ言葉失くした枇杷の花 段がおとしですねと囁いた 和歌山市
尾匂って案内など要らぬ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	球から悪人消えるお元日 大・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	生のハッピーエンドをただ祈り とのパッピーエンドをただ祈り からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる からの風に魔性がひそんでる おとって目出度い肩へかけ 糸とって目出度い肩へかけ かいいっぱーエンドをただ祈り	イし味で終える人生愛おしむ くし味で終える人生愛おしむ 大の顔で神さま仏さま 和歌山市 堀 和歌山市 堀 和歌山市 堀

今 上ひ 崖 丸 バ四寝 流 御 そつのない噂 だまされて来た靴ひものゆるみ知る 子 とび込んでくれば躊躇をしない 以がずっ と言 手する側で動じぬ十指です É 2 っぷちで未だつっぱっているひよこ 木 人には ックミラー切なくわ 1 + れ来た其 0 橋信号灯はい びれ 0 祖は変な名前よ墓 からは孫の話に胸 な幼児の勘にうろたえる 年五分で還すクラス会 好 ゲンセール女心をまつり上げ た声 」が背 傷繕う糸の細すぎて 2 た耳がピー 選んで父として笑う 他人の限度風 様 初孫 の後 飛 ときどき白 負 り重 つう重 び込んだ善 の中へ落ちてい 御 の噂拾うまい つも青 一荷を軽 1 明日 ポー が吹き を張 たしを耐えさせる 品 い知ら 追っ の道 くする 血をおもう 和歌山市 和歌山県 ていく た 岡 胸 取市 市 富 森 Ш 天 1 端 満 田 三千代 光 柳 能 代 生 7 足かせも対 逆説 ひと回 外人の 相手次第返事の変る髭騙されている太鼓判が 狭 お茶だけの男女と世評は許さない 别 ふたつの心をコートが包む秋 先 気 お 完 荒 税 人形 晴 家支える汗を日に干す妻の汗 裾 E 居して気楽でしょうと養老院 妻 |怒哀楽ベンチの 母 世の背筋氷雨 分け の法 門くぐれば同 が高 n で別の答が出 から摑んだ欲がこ 7 の酒 なる妻 H の枯れ初めて ている太鼓判がある金庫 りして来たうわさ恐く 他人の 男の顔が北にある 事 軽 本 61 . 吏員 は本音を意識する い母性を持ち合わ 通 1 妻 は四 は 顔 き の退職 带 へも立知 0 で取 願 L たまよい 隅 かい 顔 好き E 向 n 五日家を空け 10 る動気 で出 ぼれ かう りしきる 置 2 H いて立ち 落ち 3 本 聞く す 晴 時 和泉市 高石市 福岡県 京都 n 雨 市 4 Ш 儿 棤 本 尾 出 地 規不 緑 洛 雅

風

西华

風

良

好の悪い瓢簞親に似て 大で春の盛りに秋の風 をりの日本列島誰を打 をりの日本列島誰を打 がおが豚児に賭ける高 にを打る高いで表の感	人が友との寝屋	子育で、七度のショック寺っている の情けも落ちている旅路 かりそめの情けも落ちている旅路 かりそめの情けも落ちている旅路 で見しかない人生に悔いばかり を見かない人生に悔いばかり を記るを知る家に今宵も笑い声
北中	大 柴	岩
野川	原田	井
久 幸	葉 英 壬 子	本
子 一	香子	棒
架住 ジ競 今 山 し じ った ら がれ ミっら し け み がれ	し紅二初 鼠憎一夕き ん葉上日 はめ日焼り しに山の やな中けん	多 え更達上時
川辺に沿って進も きりに落ちる秋の 一しょに飲めるア て軽いめまいの中 で時どき顔をだす	に見るれるます。 はました はい顔して切手にない顔して切手にない顔して切手にない はりねずみの嫁れにしえびとの吐った とっぱりねずみの嫁れにしるびとの吐った と雪に酔い酒に	は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は
川辺に沿って進もうと で母のしぐさの音でを きりに落ちる秋の音 とりに落ちる秋の音 で軽いめまいの中を ないの香りも遠く炎も で時どき顔をだすね。	に素のれるまで、 できない 顔して切手になるねい 顔して切手になるねい 顔して切手になるねい 顔足真正面でうけ 出鴟尾真正面でうけいにしえびとの吐息あいにしえびとの吐息あいにしえびとの吐息あいにしるが	る身丈の裁ち鋏れた夫だ花持たす た悪妻かも知れず もファスナー締ま もファスナー締ま
川辺に沿って進もうよ 西宮市 林	に表のするまで、するで、するで、するで、するで、するで、するで、するになりになるねずみの嫁になりっぱりねずみの嫁になりっぱりねずみの嫁になりお選尾真正面でうけ出鴟尾真正面でうけいにしえびとの吐息ありいにしえびとの吐息ありいにしえびとの吐息ありいたしえびとの吐息ありいたしえびとの吐息ありいたしるがとの吐息ありいる。	る身丈の裁ち鋏れた夫だ花持たす もファスナー締まらないもファスナー締まらない もファスナー・ を悪妻かも知れず 松原市
川辺に沿って進もうよ 一しょに飲めるアメリカン て軽いめまいの中を翔ぶ ンの香りも遠く炎も遠く 西宮市 休 で時どき顔をだすねずみ て時どき顔をだすねずみ	に表のするまでであるりがきれいと病母が呼ぶのなり がして切手になるねずみ い顔して切手になるねずみ のぱりねずみの嫁になり と雪に酔い酒に酔い と雪に酔い酒に酔い たのと雪に酔い酒に酔い	る身丈の裁ち鋏れた夫だ花持たす もファスナー締まらない もファスナー締まらない を悪妻かも知れず 松原市 本

犯したと自首する顔の幼なすぎ というれた兄弟が吹く葦の笛 叱られた兄弟が吹く葦の笛 といって男性論は口にせず かかか かんしたと自首する顔の幼なすぎ おしたと自首する顔の幼なすぎ おしたと自首する顔の幼なすぎ かって男性論は口にせず おしたと自首する顔の幼なすぎ おしたと自首する顔の幼なすぎ おしたと自首する顔の幼なすぎ かって男性論は口にせず	婦二人心を開くワイン飲む Rな倖せでよし初詣で 凡な倖せでよし初詣で R崎市 西 村 か	秋灯下孫の毛糸へ肩がこり 西宮市 津 山 冬気を使う高齢社会風の中 西宮市 津 山 冬気を使う高齢社会風の中 西宮市 津 山 冬	年賀状可愛い名前がひとり増え 西宮市 奥 田 み頭の蠅一つ残して年を越す 西宮市 奥 田 み頭の蠅一つ残して年を越す	先祖の血通う故郷の杉木立真白の紙に日の出を描く自信
ず子	すみ	子	う子	
心機一転夢をさがしに初春の旅がであるといり、これでないのでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	びるよとうどんをだしに起るかと聞いて走らぬロバに長選候補が友の顔で来る長選候補が方の顔で来る	水割りを片手初子にほれなおし水割りを片手初子にほれなおしおしんブーム日本耐えた日を想いおしんブーム日本耐えた日を想いけるの好きな貴女の類えくぼ	大東市では、大東市では、大東市では、大東市では、大東市では、大東では、大阪が、大阪が、大阪が、大阪が、大阪が、大阪が、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では	7
奥	西	Ш	土	竹
山	JII	下	岐	内
美 智 子	景	みつる	ト ク 子	紫
4.	子	る	于	錆

大阪市 中 西 兼治郎 耐えて居る涙恩師の手が温い でき母の姿とだぶる観世音 同 窓 会 秋の風ひびきに弱い母の鈴	に は ない	出雲市 石 倉 芙佐子をおおて、六十路のパートにしぐれ降るを入ばまたあなたを困らす羽目に泣くを入ばまたあなたを困らす羽目に泣くを道橋女がまたぐ秋の風	というというとは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これで
郎	砂	子	Ž
大阪市 有り余るくらしねずみの高鼾 信まれっ子が一番に来た干支頭 であるくらしねずみの高鼾	近江八幡吟行(三句) 水郷でゆらゆら歴史と遊ぶなり 長生きを石段下から願い上げ 商も戦も都へ続く路 栗飯が済んだら話題は蟹のこと 驚きは故郷の村の文化ぶり	大阪市は、大阪市でであり、大阪市ででは、大阪市を終ると決心かたくなる。お弁当持たせることも生き甲斐にお弁当持たせることも生き甲斐にお弁当持たせることも生き甲斐における。	サイクリングロングへアーが生きてい 再婚へ髪の黒さも味方する 両手での固い握手が泣いている 自動車をにらんで渡る歩道橋 母さんの歯を考えて買う土産
杉	鈴	岡	橋る
本	木	田	元
智 慧 子	節	3.	美
子	子	4	恵

兵庫県	崩れ去る砂の館か現し身の	種のないぶどうもきっと実をつける	台風の進路はずされ慈雨もなし	PTA集会親達コンテスト	母ならば海よ牙などむくでない	境港市	初詣で走るな歩け言うみくじ	鯛の膳亡母を想うといとしゅうて	へそくりがげっそりやせた年始め	よっぽどの事か判こ屋走り出る	ひそひその話に向かぬ魚市場	大阪市	新年や戦なき世を祈るなり	略礼服喜びもまた悲しみも	おみくじを引いてる運のない男	王よりも工人の技いま光る	二千年の夢さまされた兵と馬	中国 秦・兵馬俑館 (二句)	豊中市	花の種しっかり蒔いて春を待ち	雪山のロッジで祝う雑煮碗	招福の甲子年に期待かけ	詣で昔何処かで会う	清滝の梵鐘朱塗りの橋で聞き(神護寺)
藤						細						山							田					
後						木						根							中					
実						歳						いつ							Œ					
男						栄						つを							坊					
横車押せば無気味な音がする	出雲市	好きな色着て出る街の楽しい日	嵯峨野路に食べ物だけの土産店	三千院板の間巡り足冷える	音痴を歌	逃げ道があって迷いがまだ続く	高槻市	決断を迫る話に妻も入れ	働いた話に醜いとも言われ	票になる話へ顔の艶が増え	片方の目からだんだん涙する	老齢化役職の椅子まだ空かず	岡山県	銀行の扉が固い十二月	湯けむりに送られ朝の懐手	月給の中で遊ぼう秋日和	童心がまだ残ってた秋祭	八面六臂男の顔も十二月	岡山県	双方の話五分五分して別れ	公園を回り回って万歩計	手話続く二人に嘘は通じない	て二次会つ	嘘をつく正直者の舌もつれ
	袁						田						岩						荻					
	Ш						崎						道						野					
	多賀子						あき子						博						鮫虎					

へそのゴマ数十年をためたままたらい回しの花環さがして寺に来る 兇悪犯擬装心中して逃げる 千年杉に呪いの釘を錆びつかせ 鳥取県国体に備えて習う菊作り よ取標を揃え生き甲斐満ち足りる 大安の縁起気にせぬ古稀の坂	処でどう戦うてても 遺いを孫から貰う湯 でどう戦うででも	外へ行かずに切れたパ実へ目がつむれない根冬の寺は行者の別世界	開運を祈るねずみの祝い歳 会けて勝つ事も悟ってひとり言 が深む風飄飄として山頭火 いた農に落穂は見逃せぬ いた農に落穂は見逃せぬ
金	森	土	井
Щ	田	居	上
満	布	耕	喜
春	堂	花	西华
表母の肩いたわるように羽根布団 を母の肩いたわるように羽根布団 を母の肩いたわるように羽根布団 を母の肩いたがん他人めいてくる りきみ過ぎ的がはずれたキューピック りきみ過ぎ的がはずれたキューピック でしたがんだん他人めいてくる りきみ過ぎ的がはずれたキューピック	を 関つけた場数で組 からり できゅう でき 他人まかせの共 かない はがない はがない はがない はがない は がん いん は がん は がん は がん は がん は がん は は は は	阪 〈 計	かられたしの北極星が見つからぬ その陽のうれしさ鯉も顔を出し をの陽のうれしさ鯉も顔を出し をの陽のうれしさ鯉も顔を出し
ŀ			
鍛	長谷		細 上 と
	長谷川		細 呂 木 口
鍛	谷	H	呂

度三度わからぬふりす老婆心き言を聞いてやるのも妻の役民の声というけどおれは別民の声というけどおれは別	老いの背な仏間で今日も一人言秋深く遠くで海が哭いている一人言墓参の孫が不思議がり	乗舎てた城のほとりに紅葉燃ゆ では出てドラマを一つ置いてくる ではいるいる告げてゆく	西宮市 型み紙好きになれないひとといる 関度かえてお互いをみるすきま風 中味とは別の私が歩き出し	還暦へ再出発の屠蘇をくむの方オケに心預けた十二月の方の財政をの方の財政をの方の財政をの方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の財政の方の	大阪市・
木		沢	西	藤	大
塚		田	П	村	野
素		千	かわ	宏	武
石		春	五	子	太
り向けばやた肉にはなれて、おりないでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	桁の違う話を妻のさり気なし利用価値まだあるらしく残されるさすらいの果の枯葉は地にすがる恵まれぬ人から人生教えられ	渓谷の錦は神の手織かな 場合の錦は神の手織かな 場合の錦は神の手織かな 場合の錦は神の手織かな 場合の錦は神の手織かな は回忌すませて化粧の鏡見る	寒行の法鼓炬燵で正座する 終引き母と並んだ影二つ を立たが影二つ が恋の乙女星座でデートする がある。	女って秘密つくってすぐ破る ネオン街女加速度つけて堕ち ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	和歌山市
り向けばやたら淋しい彩ばかり客見送りホッとする眩暈雨降る夜は丁寧に髪洗う雨降る夜は丁寧に髪洗う	違う話を妻のさり気なし価値まだあるらしく残さらいの果の枯葉は地にすれぬ人から人生教えられ	店舗してはならぬ寡婦の手に に道も二人ならこそ歩かれる に対すませて化粧の鏡見る	鳥翔んで来そうな初暦 の法鼓炬燵で正座する の法鼓炬燵で正座する がよった。	って秘密つくってすぐ破る 姫路十の母へ生き甲斐尋ねまい 頂の朝日へ山のファンファーレ	和歌山市 坂
り向けばやたら淋しい彩ばかり客見送りホッとする眩暈雨降る夜は丁寧に髪洗う雨降る夜は丁寧に髪洗う	違う話を妻のさり気なし価値まだあるらしく残さらいの果の枯葉は地にすれぬ人から人生教えられ	の錦は神の手織かな 島根県の の錦は神の手織かな 島ではならぬ寡婦の手に はずませて化粧の鏡見る	鳥翔んで来そうな初暦 の法鼓炬燵で正座する の法鼓炬燵で正座する がよった。	って秘密つくってすぐ破る 姫路市オン街女加速度つけて堕ち 十の母へ生き甲斐尋ねまい頂の朝日へ山のファンファーレ	歌山市
り向けばやたら淋しい彩ばかり客見送りホッとする眩暈にく波打つススキ寡黙なり	違う話を妻のさり気なし価値まだあるらしく残されるらいの果の枯葉は地にすがるれぬ人から人生教えられ	の錦は神の手織かな 島根県 木の錦は神の手織かな 高根県 木	の 一の 一の 大量座でデートする の 大量座でデートする の と か の 大量座でデートする の の の の 大量座でデートする の 	って秘密つくってすぐ破る 姫路市 松十の母へ生き甲斐尋ねまい 頂の朝日へ山のファンファーレ	歌山市 坂

秋風に誘われ年金忙しい 対炭のようにすぐおこる夫といる 七回忌祖母の重みを語り合う わしゃ何も知らんとみの虫ぶら下り おくれ毛をそっとなでつけ自動ドアー 泥舟に乗せられいやだと叫ぼうか 浪花節親分子分の手毬唄	に いってるかい青い背広のてるかい青い背広の枝雀に一刻苦れでれに笑い上戸に	行の隣の席はにぎりめの遺も乗りかえのないの遺も乗りかえのないの息広角レンズにへばの息広角レンズにへばれたといるなりを当今年も後家で無くておと刷った名刺で靴をき上がり小法師がほこき上がり小法師がほこ
行	山	中 佐 岸
吉	本	村本本
照	テ	木
路	ルミ	優裕水
こ雲有 王横神本 こ仙田 将顔さ当	いコイ日	生 親 奥 鍋 割 ゴ さ 包 容 あ か エ 院 つ で ジ 真 力
宝仙の舗装道路も温みあり 宝仙の舗装道路も温みあり ここも又小京都と呼ばるるか(津和野)	にい給仕水持で表 ラと呼んで暮し テてもチャンと 種味付次第で替	力感じ乍らも疑心抱き 真似が流れに乗れて威張 で味わう酔いも上中下 で味わう酔いも上中下 で味わう酔いも上中下 がっえなロビー足音も靴 が終くるりの山を庭に入れ ないが流れに乗れて威張 が終くるりの山を庭に入れ
も又小京都と呼ばるるかの仲人が居る隅の席 を見せると涙もろそうでを見せると涙もろそうで の前へ決死の歩が寄せる ル九州・山口旅行 ル九州・山口旅行 はて又グイ舌みの前に立つの舗装道路も温みあり	種味付次第で替わる味 でい給仕水持てノーシン	カ感じ乍らも疑心抱き 真似が流れに乗れて威張ってる ジャスなロビー足音も靴も埋め ジャスなロビー足音も靴も埋め で味わう酔いも上中下 で味わう酔いも上中下 奈良県 にぞるりの山を庭に入れ エゴ財産付きの娘を貰え なが祭太鼓に里神楽 秋祭太鼓に里神楽 兵庫県 梅
の仲人が居る隅の席を見せると涙もろそうでを見せると涙もろそうでの前へ決死の歩が寄せる大阪市北九州・山口旅行にて又グイ舌みの前に立つにて又グイ舌みの前に立つは装道路も温みありの舗装道路も温みあり	で を で を で を が の で を が の で を が の で を が の の は が ま の は が も の は が も の は が も の は が も の も の は が も の は が も の る の る の も の も の も の も の も の も の も の も の も の る の も の も の も の も の も の も の も の も の も の も の る の も の も の も の も の も の も の も の も の も の る の る の も の も の も の も の も の も の も る る の も る る る る る る る る る る る る る	力感じ乍らも疑心抱き 真似が流れに乗れて威張ってる 真似が流れに乗れて威張ってる ジャスなロビー足音も靴も埋め ジャスなロビー足音も靴も埋め で味わう酔いも上中下 奈良県 つ親子四人へ煮える音 たぐるりの山を庭に入れ エゴ財産付きの娘を貰え 水祭太鼓に里神楽 秋祭太鼓に里神楽
の仲人が居る隅の席 を見せると涙もろそうで を見せると涙もろそうで の前へ決死の歩が寄せる 大阪市 坂 北九州・山口旅行 北九州・山口旅行 北九州・山口旅行 北九州・山口旅行 北九州・山口旅行 北九州・山口旅行 大阪市 坂	い給仕水持てノーシンだラと呼んで暮した五十年すなりがまで替わる味種味付次第で替わる味枚方市東大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方大方	カ感じ乍らも疑心抱き 真似が流れに乗れて威張ってる ジャスなロビー足音も靴も埋め ジャスなロビー足音も靴も埋め で味わう酔いも上中下 で味わう酔いも上中下 奈良県 宮 で味わう酔いも上中下 奈良県 宮 で味わう酔いも上中下 奈良県 宮 で味わう酔いも上中下 奈良県 宮 が続くるりの山を庭に入れ エゴ財産付きの娘を貰え 秋祭太鼓に里神楽 秋祭太鼓に里神楽

長 としより 0 生きをす 便 な に始まる今日 Vi かい 返 洗 事 る気い えば 冗談 の爽 汚ながる食器 まぜながら まさら無理 や か は # x 金 # 文 秋 名実 攻 うううん下 撃 間 0 は 姿勢忘れ 心に 師 走 を騒 品を混 知 た檻 ぐ枇杷 3 ばて川 111 0 柳 虎 0 展 花 柳 展

п 天 子

新

別

UE

0

す

論 もや

U

12 柳

柳

43

ねそれで満足川 くな理

展 た Ш

身の

軽

10

男が十字切ってい

3

ほう

あ

0)

娘

る

ta

柳 展 寮

歌 強

唄

おじ

んはまだ若

12 4

恋に

大正

0) 後 ぶる今日

良き憶 の気が 老人

0 スを

動

作

かく

に 点

久

ボ

0

妻と老

重 立 バ

待

0

12

0

人

伍

装路

で時

代遅

n

を知っ

た下

市

場

没

食

子.

真っ 脇役

0)

止

丸顔 心 下手 対 と長 笑 0 面 気 0 くぼの底であたため 10 \Box 喉 楽 もり 顔とでご円満 カラカラに乾き切 人無 味 n 食 てい 3

3

JII 紫

黒

香

すぐにテレビが見える父の席 線少うし越えている若さ 恋はほんとにしてくれず 本 田 惠 朗

宵

月

原

明

		w.	040		~~	056	w.	****	5545	56.55	050	565	6000	3583	5855	456	×8.54	0000	وودو	neen.
白鳥来律義な冬を連れて来て	で来る	反核と反角むなしいお念仏	尼	錦鯉道頓堀の灯を泳ぐ	着られない物を片身として貰い	怖いから自分のビデオだけは見ぬ	両の手を合せた時は聞いて欲し	女ひとり世間の口が抜け切れぬ	若	泥火山 湯沼フツフツ秋深む	千人風呂ヒバの湯ぶねは混浴で	八甲田山ブナ林の秋抱いている	青森湾の風泣き止まず湯があふれ	湯治の廊下長く長く露天風呂暮れる	みちのくの湯	Œ	ひとりずつ話しながらに書く賀状	外科の女医患者を男と思うてず	人ごとの様に聞いとくフルムーン	丹前を縫う妻は亡し十二月
									柳							本				
			緑						潮							水				
			之助						花							客				
			נענ						10							п				
長男は遠くに嫁御に連れ去られ住みつらくなって蹴飛ばす石もな		大陸の戦友幻か兵馬俑	武器捨てて乾杯しよう兵馬俑	兵馬俑束の間青春甦る	兵馬俑の列を見ていた脱走者	初夢や軍歌を叫ぶ兵馬俑		音痴とはいえ念仏は澄みわたる	目が覚めてああそうだった旅の朝	年毎に妻の肩持つ娘がふえる	敷島の大和心は金が好き	日本人を見降ろしレーガン背も高		まぼろしの人肌如来微笑する	長生きは医者など知らぬ人ばかり	この世巡礼七十路にさしかかり	産婆さんの勲章だけは微笑まし	元旦やしゃんと心をきよらにす		暗算のミスに月まで欠けていた
63	山						野					63	大						1.	
	内						村士						矢						藤	
	静						太茂						+						甲	
	水						津						郎						吉	

先生は禁句教えて教えられ

只の只生きてる内から掌が合せ 名刺交換して残り火炎えてくる

藤

にほ んの運勢シグナルは黄がつく

家族の和迷わず妻の青 幸せにおごると運は逃げてくる 旌

風泣き止んでしんしんと雪が降る 暮れからの予約して来る年始客

脇役も主役もなしに老い二人

米 沢 暁

明

年ぶりです。

になりました。

同人句集は昭和四十九年発刊の「川柳塔」以来十

明 朗

JII

柳塔誌寿6年還曆記

念

井

記念して同人・誌友句集「川柳塔」を発刊すること

塔は昭和59年2月めでたく還暦を迎えます。これを

大正十三年川柳雑誌創刊から数えて六十年。

川柳

句集『川柳塔』発刊!!

Ŧ

水

粉

観光の裸おかしくないマウイ

ぶつかってみると女の方が燃え 政治家の姿勢を正すなどと嘘

口ばかり役員ああしろこうしろと

翁

昭和五十九年六月末予定 四六判・約六百頁 願い申し上げます。

左記要領により一人でも多くご参加下さるようお

★同人・誌友どなたでも参加できます。 選)ご提出下さい。これを一頁に組みます。 句は十句(自

★原稿締切は59年3月3日。

句稿と共に二冊分・五

千円を同封の上、本社会計室宛お申込み下さい。

(指定の応募用紙を使用のこと)

★冊数がふえると単価が安くなります。ご協力方お 願い申し上げます

この国

一へ生きとし生きる菊を嗅ぎ

深呼

吸

らず菊の紋

朝焼けに萌えてい

のちはみどりい

3

題に寄す

道連れの盃を乾す菊日和 さんぜんと栄枯語 菊と居る十一月の

JII 柳

塔

社

III 柳太平記 Ш 柳 0 (68)群 像

川柳人数多しといえども古川柳調の軽妙 茗

東

野

大

八

うがち・滑稽の三要素を余すところなく駆使 であろう―と今でも筆者は思うのである した川柳人は、おそらく小林茗八が第一人者 ーワイシャツの後ろへまわる長襦絆

たが、 ほかはない。明治21年4月28日足利市の生れ。 に渡り大連埠頭事務所に勤め終戦までねばっ て大いに推賞していたが、仰せの通りという 「十一歳から川柳に手を初め、このころ大連 堀口塊人は「川柳職茗八」とどこかに書い 串だんご半分からは横に引き 人間の木目を見せる指紋帖 十五夜の天文台は酒が無し ここの事務所長が大陸川柳派の重鎮高

橋月南であった。

を合わせたとき、彼はこんなことを言った。 筆者が二十歳頃、大連のカフエーで一夕顔 「わたしの本名は亀八というんだが、内地

士で、大連の花街ではめよう様の愛称で大い じ四六判20余頁色紙づくりの柳誌が出た。同 にモテモテの最中だと彼の連れが説明した。 困るので妙なフウなのを失敬してみょう八」 忘八といってバカの代名詞。これはお互いに なら柳号にぴったり。しかし満州では亀八は 大正十一年四月大連から「通」という横と この時、彼は五十余歳。美髭を蓄えた好紳

> 号は「開業広告」とあって挨拶にいわく と答えた。この通誌の編集長が茗八で、創刊

しかり下さい。電話は九六七です。是非多少 に不拘御用命願います。 に吟味致します故、お気付の点はどしく います。処でその仕入れは問屋まかせで入念 かえていますから、まずは大概の物は間にあ 何しろ大連川柳会などいろいろと大問屋をひ 通帖を発行しました。どうぞよろしく。

営業方針(註・裏表紙いっぱいに印刷

実させること。 営業科目

▽一般社会の川柳化を図って日本趣味を充

◇純川柳……提唱

= t Ŧį, ◇柳壇……改造 革句::咀嚼 柳樽…尊重 柳論:徹底 着想::非凡 誹諧··参考 柳言…医針 柳文…簡潔 修辞::巧妙

一、天才…優遇 撰者…句作 句集 柳字 :新軸 六

人は中沼若蛙、湯本白庵、

石原青竜刀、

懸賞· 売名…富岳 句会…趣向 柳辯…秋水

右営業科目は時代を先覚して変化ある事を

でしょうときくと茗八川柳職は、四通八達だ ツウとも読めるしカヨイともとれる。どちら 月南という非詩派ぞろいで固めていた。通は

前以てお断りして置きます。

発売元・大連句帖舎一同敬白

折ウサ晴しにひろげ、微苦笑を禁じ得ない。 筆者はこの通帖合本を所持しているが、時 川柳営業サタログ

けの事が判ったなら川柳業を許可す。 ない如く、真の川柳が詩でないの也。 なったら詩川柳である。即ち真の詩が川柳で 川柳が詩になったら川柳詩で、詩が川柳に これだ

る。定価四個入前金七十銭。 ―以下略 臭気甚だ強く五呂八氏千日の説法を消すに足 とも称す。尾山氏夜半密に発明したれば也。 北海名産迷句晩漬を売出す。俗に一夜づけ

く、つけかけもあるべし(註・以下見本 総理茗八入閣を断らる◇茗八式多作法近日試 ◇氷の上の五呂八砂の山の赤黎だという=略 運転◇白頭豕を白頭豚と読む流石革新川柳家 ◇濤明女護ヶ島発見方角極東◇番傘張替える 帖尻(註・これが編集後記)つけおちもあるべ ◇柳陽坊きやりを真似大連で組閣し若蛙が

魚あり、鯨左衛門若し京魚ありて残念と思わ

夫君の紹介で一歩前へ出たるなり開口一番

わたしが青竜刀の銷(さや)です

拝借十三世―其角好みの茶の十徳。鎌倉か

ば鮮魚と名乗るべし。鯨は魚にあらずなど遠

にからだも分けて半身神経痛などは至極もっ ったら寿山出かけようぜ。 ら一寸拝借申候頭巾、仕度は出来たり、よか 異句同音―頭の中を伝革に分ける。 ついで

えよ、これでセンリュウとはどうじゃ。可笑 しかったら次へ下って笑え。(註・あと八相略) て妙なり。 高級川柳=川があると思え、柳があると思

ある。したがって青竜刀の同志茗八への傾倒 非詩川柳派の同人連は溜飲三斗の想いであっ りを発揮した茗八の面白可笑しい名編集に、 廃刊するのだが、この「通」に縦横の奇才ぶ ふんだんにそのうんちくを傾けつくした観が 詩派の闘将を自任するだけに、「通」の筆では たであろう。殊に石原青竜刀は、このあと非 ぶりは大変なものがあった。 昭和十九年ごろ、北京で夫人と散策中の青 「通」は昭和三年十七号を出して倒産り

> とやられたのには一本参った。後日、 は苦笑まじりにこう言訳をした でこのサヤ事件が話題になったとき、 「青竜刀のサヤと女房にいわしめたのは、 柳人間

ありゃ小林茗八のしごとだよ」 川上三太郎は青竜刀の絶賛する茗八川柳の

という茗八を訪ね、一席土地の旅館に招待し この御両人、打そろって群馬県太田市にいる 和二十五、六年の頃で、やがてそのことから 茗八句抄をぜひ掲載したいといい出した。 を知らされて大いに感動。「川柳研究」に 海水着おんなにむだな皺は無し 昭

号で出されたのが、彼の唯一の句集であった。 のであった。「茗八二百句」が、「通」の特集 融院釈棋遷。これは大陸で親交のあった奈良 の太田市で病没した。享年七十四。法名は円 して二人は引きあげたという。 の川柳人で住職の深井凡凡が生前に授けたも 茗八はこのあとの昭和三十七年九月七日そ

竜刀と出会ったとき、筆者と初対面の夫人が ★次回は 木村半文銭

35

親爺で、もはや往年の元気は皆無、がっかり たものの、相手は今はしがない自転車預りの

誹 風 柳多留 一廿六篇研究(+图)

本 多 Œ 範 石 田 成 佳 大 屋

郎

南 木 得二 鈴 黄 H

野真 孝 多 \mathbb{H}

光

故 岡 H

221 銘(にほめて引込む冬の月

寒念仏世に捨てられた月をほめ

九 . 3

か、長屋の者が近所で出会ったか、「見ねえ 本多=寒天に皎々とさえる月を見るだけで、 のようにである。 込んで行く。まるで冬の月を誉めたのが塩時 身体をちぢこませ、てんでんに家の中へ引っ げて合槌を打ち、「それにしても、寒い」と がある。近所の連中が連れ立って帰って来た るというのも妙なものだが、そこに可笑しみ 背筋がぞくっとするものである。 それを誉め いい月だぜ」「ほんに……」など寒天を見上

> りますが、冬の月がいちばん美しく感じます。 **多田**≡賛。 定時制ですので月を仰ぎながら帰 ではないか。 々」がうまくあわず。秋の月との単なる対比 石田晋=最初夜鷹ではないかと思ったが、「銘

月見る月ハ此月のむつかしさ

岡田―礎稿、賛。

本多=『夏山雑談』に、 貫き、其穴より月を見て、 官家の女中は、八月十五日夜に芋を箸に 月々に月見る月は多けれど 月見る月は此月の月

冬の月灰汁て洗ッたよふにさへ

六 . 29

心浮き立つのであるが、実はこの月こそが苦 石田成=賛。主人公を限定する必要はなく、 というのであるが、難しいのが女郎か客かと とは明白であり、座五「むつかし」から八月十 の両方としておく。 いうと、いずれとも決しかねる。女郎と客と 労の種で、おいそれと月見も出来ない難事だ 五日の吉原の月見の紋日をよんだ句と思う。 本句は右古歌によって詠まれた句であるこ 月見る月はこの月の月」と名月の観賞に といふ歌を吟ぜらるとなり

鈴木一賛。 とおもいます。

女郎と客との両方とした方が句として面白い

うそを書きつくしたおくに月の事

然しウェイトは女郎の方ではないか。 苦労するのは女郎も客も両方であろうが、

るより、女郎の句とした方がよろし。 られるが、女郎は逃げられぬ。女郎と客とす 岡田―同。 鈴木氏のいわれる通り、客は逃げ

223 しやう根草娘をなふるうら、かさ

戸語大辞典』に、「やえむぐら 茎・葉に刺 本多=「しやう根草」はやえむぐらの事。『江 ておもしろがる、たわいない悪戯でいかにも 見て「そら、またくっついた」などとはやし 若い娘に投げつけ、着物に性根草が刺るのを 説明されているから句解の一助となろう。 毛があり、着物に打ちつけると落ちない」と のどかである。 性根草をつまみ取って、悪戯っ子が近所の

石田成=賛。野がけ道での一景かとおもいま ょう。野がけ説賛。 ですが、これは秋晴れのうららかな一日でし 大屋—赞。 性根草娘切られたやうな声 「うららか」は俳句では春の季語 四四:30

南=むしろ野遊び。

多田―賛。南説か。いつも若い男になぶられ

50 岡田―野がけ説、賛。「うららかさ」ですか ているのが、この時はというところであろう。

224 中の町外トはだかりハい、女郎

先を更に外方に向けて運ぶ歩き方。八文字に 外トはだかりは、吉原の道中で遊女の踏む外 本多=「はだかり」は、広げる、開くの意。 吉原では外八文字である は内と外があるが、新町、島原は内八文字、 八文字を言う。外八文字は一度内にむけた爪 けっこうな御下駄を蹴出す八文字

る などとあれば、外八文字であったことがわか 駒下駄を片く、外に稲光り 五六.32

禿を具して、外八文字を踏んで中の町をゆく であるとの意 のはまことに廓の花ともいうべき美なる花魁 の昼三であるから悪かろうはずはない。新造 道中をするのは当時の最上級妓、揚代三分

悪いのである。中の町だから「いい女郎」な 八木=賛。ふつう「外トはだかり」は行儀が

対があったとのこと。 うとしたところ、賢明なるご婦人方よりの反 **多田**=賛。このオイラン道中を海外で見せよ

岡田一賛

225 からし味噌娵のほめたが気に当り

気に障ってとたんにおかんむり。俗諺に「辛 く利いていること」と嫁が誉めたのが、姑の くするの意 本多=「気に当り」は、気に障る、感情を悪 姑が和えた辛子味噌を、「ほんに辛子がよ

取らず、怒った顔で辛子をかいたからと姑 子が利いている」との嫁の一言を、素直に受 子は怒った顔でかくとよく利く」と言い、「辛

九四 · 6

の面当てにとったのである。 しうとめのかいたからしで娵は泣

娵のからしをうばいとりしうとかき

娵のかく辛子がきいて姑泣き

五九・14 23

多田一賛 岡田―同

37

深政久孤入友お功か啐元 殿面 て 呼 L 12 れに 若 成づ 啄 日 逢 先 家 ぶ耐 知 2 h ī B な 吸 13 恵 う 弥 n 之 2 下 時 越 大 0 7 t す 3 12 陀 き 辞 あ 少 言 か 舞 親十 この < 書 こ私な 2 \equiv 中 わら 台 このき の子 2 れ狐 お に 3 歳 よ知数一独 汗 بح う 顔 < H 本 考にを 音 縒 り恵 の瞬 がもけ が一背 文 見把 は りほ 沁のて 0 握 消 がか 追 人 を み通 た す とじつ 11 L 戻に いに 伸 た てり花出て ば お合 3 あかのさ n n す Va

るけ下れ

同 人 特 集 私の一句

弘園吉岩水稲西竹直若 河 河西 合津山岡井粉田村中原柳井尾 多美本千豊早綾七潮庸 賀 蔭 面 雄慶子房棒翁作苗珠山花佑栞

到

紙 月寄み平貧 人振 口舟平 表人重腕 年 手 笜 耳 野 生 2 曜 せ h FL. 1 かぎ ŋ |本 0 良 _ 毎 話 太 な 彰 Vi な な < 寄 振 曳 椅 は 重 鍋 向 13 弾 鼓 Fo 着 狀 荷 かい 0 だ 許 T 3 H 巷 7 だ 4) か な 積 0 < 11 0 積 緑 他 貧 だ から h H h +F 木 泣 0 ン 窓 1 木 疃 ば 丰 世 か 7 を 後 消 妻 女 游 11 1 た カ C よ 7 7 粉 1 1 Va ち 押 6 Ž 12 h 0 房 び た 0 雪 ょ 足 t 4 2 包 飯 負 白 3 嘘 高 1 0 0 よ 17 3 7 0 妻 は 12 か 子 0 < 遠 Va 名 0 1 10 う 道 た 決 に 崩 かず 7 かい カ 考 0 な 月 < 0 な 瞳 b ż な ず 4 な 美 書 12 かい 方 80 3 生. す 言 消 写. 10 す き 主 0 ż 1º 化 笑 F. n か B ま -0 7 b 13 生 1+ 7 出 持 7 は 散 弁 お 7 13 頒 げ ま U) XD 0 b 妻 3 歩 13 1 13 ++ 0 お す 7 1) から た る 持 ち

大阪市 米子市 新宮市 唐津市 岡山 鳥取 林市 児 岩 菅 野 新 浜 久 木 田 荻 給 藤 山小川仁行 西 板 本保塚口野木井根西上部天田 岡井 島 垣 \blacksquare 出 春い雄渓四千美洛と与 夢 昭 久正素虹 鮫 村 素 呂 天 ŧ 身 仁 虎 諷 志 を々水郎代代酔子 子 酔 郎 子 於敏石汀 狼 日

P 髪 水故 12 時 青 馴 ち 私心 離 保 11 祭 人悪 浮 沙女 婚 甕 笛 0 かい 折 1 春 染 0 め 郷 護 7 牛 戯 き n 風 か n n テ 0 客 ぼ 事 歴 本 かい 13 任 n 故 は かい 沈 気 咲 + 夢 犬 あ 鱼 H を 秋 な 里 は あ は 4 飯 2 な 背 < 越 悔 2 \$ な 持 う 1 3 0 3 瞼 信 き B や 中 ż 花 呼 今 3 方 畳 に 10 き 10 石 0 n 3 3 n 0 を な T ば か 生 な To ± 0 1 に 7 T _ 0 あ 好 2 7 向 信 当 朝 き 汽 b n は 産 波 形 落 13 合 n ŧ 港 11 1+ 1 冒 ま to 斑 砂 较 は # ち な 3 3 0 車 to な 0 7 3 3 背 7 0 0 10 か 7 う す 米 が 海 F° 灯 な V 家 子 な な 3, h 城 T 狼 12 to から 平 な 出 ホ カ かき 鶴 寸寸 な 練 な 1 1 狽 見 知 あ 3 かい 和 磨 3 見 1 1 を TK 育 ま < n 寸 ż 3 + n b 3 主 (" 4 0 折 義 7 直 1+ 出 ラ 眼 3 n 如 h 82 1 T 掛

るけ

東大阪市 富田 昌田林市 鳥取県 高槻市 津 松 福 細 川小林 市野八 田 安 田 妹 欄 田 岩 浜 呂 4 木 高 本 谷 口 幡 坂 木 峆 次 中尾 場 形 田 道 本 魯弘 里 瑞 な千あ弘正春 英 弘 没 美 泰 博 食 3 朗木生風枝子み代子道坊江蘭 弥 子 緒子 友

い恍 宮母ブ 道百刑 稼 三カー大主終振仕ジ心行 花 4. 世 安 電 < 物 水 0 ラ 連 0 ン生 婦 n 舞 3 D 革 -10 腕 0 0 な 8 > n 繚 代 + な 0 0 0 向 風 ギ 進 0 刮。 4 炎 子 音 呂 風 红 守 3 0 2 + 使 巫 10 > 備 4 コ K 渡 ŧ WD K 者 な かい 7 グ かい 0 3 かい 方 Fi 円 今 3 -3 玉 T 私 賭 P 恋 呉 H 冷 内 4) 婚 夜 言 0 辛 す 緒 あ 家 父 中 楽 か 深 7 3 H 0 n 何 た な 福 時 話 0 に K 夜 ī 13 赤 車 から 0 11 気 10 か 2, 長 な た E U Ħ 0 H Vi 輪 無 7 明 Vi É 聞 * U 2 主 歩 伍 楽 服 1 林 日 1 2 言 寿 10 10 0 0 酔 12 3 辟 1) ま 馬 道 L な 軸 L 退かを 女 7 玉 院社追 た 渦 3 揺 旅が 橋 V 着 ٤ 2 Vi 80 7 t. 部 去 るな 7 六 3 10 又け 海れ 12 H 屋 n 1 + # がて 3 0 13 JU づ 好い n 锋 17 10 E 3

寝屋川 仙台市 吹田 大阪市 岡山 路 市 黒 本 正 時 北川宮 藤植 丁 増 松 萩永天井 角 西 伊 野村城藤川田本末村尾村村坪田浦原井正上 かか年春紫 惠 水一勝映 客サ 2 輝み永千喜 あ d ず 遊 ワ ね す 11 朗客灯美輝き女子子し月子楽梢酔 子み代子香

表 男 平 猫 満 枯 宿 嫁 句 久 猿 は 4 風 茶 夫 百 脇 揚 面 FI. H ち 命 起 碑の 4. 0 ま 向 0 L 姓 葉 役 だ 11 は な 石 足 ٤ き き 花 を U 海 H n n 13 舞 0 雀 1+ 忘 見 明 7 2 か n 悟 3 かい 鳥 3 が 娘 1 継 う 浦 泇 0 n 17 1+ 7 to n 主 7 き n 育 \$ 狂 茶 0 4 恕 技 陵 1 月 た 墓 3 木 To 刀口 To n 7 死. 10 0 部 子 2 1-頫 0 2 n 決 H 鱼 な 季 \$ L 花 13 x は 屋 主 伽 中 0 n 寺 我 島 夢 な 几 110 き は お K 3 12 役 0 番 B 12 見 3 な カギ 因 変 n 耐 慢 n 0 0 h 鏡 中 あ 2 ż ż 3 3 見 0 b 13 0) お 灯 to 如 3 0 1) 3 0 霜 水 あ な な 7 床 n かい 3 な 羅 指 ż 1 女 お祭 中 b n V 歳 11 0 0 誘 i隹 L か 針 ば 文 0 13 h お n 花 す かい を 3 色 3 中 7 化 1 般 L 跡 7 字 n た 1 12 論 1 8 h 主 n 呼 17 is:

岸和田市 東大阪市 島根県 鳥取県 島根県 高知市 竹 江 石 森 清 # 松 藤 玉 峆 細 石 11 岸 松 谷 11 垣田野山沢本原木田砂本岡 内川置口 垣 林 花カこ美みは鈴歳清白輝三 史 A. 3 ズ 2 3 × 九 子雀人度子エ う子里み江栄泉汀水吉 好 子 郎

遠十愚こし一嘘二 親 形信 気ガ 鏡 後 古 老 字 ば 振 楽 悔 稀 妻 痴 h た 本 U V 抜 か 12 架 た 2 to な n 0 n 2 to H 0 调 2 H -な 0 12 管 3 2 H 起 な 2 ぼ か 0 n カン 女 7 0 x す 1 7 n 花 歩 す ŧ な C カ 0 ŧ 狸 12 ま 女 牛 バ花 3 12 残 か か b É 柿 n 風 0 61 7 き な ず ば ti 1 7 あ 知 酔 船 3 6 香 7 b 0 借 燃 女 な 1 0 1) 足 n 7 す 咲 種 3 17 12 皮 之 子 な 語 n 3 か 嫉 T 祈 た 0 3 4 ち は な 12 3 0 播 3 忘 軽 妻 6 3 埶 0 せ ば 加 3 3 毌 残 # < 貴 n 5 き 界 重 n < は n 夾 帯 12 3 な か 0 b 10 す 肥 あ ま 竹 魚 う種 b 1 品 灯 な L 3 n な 7 す 5 1 す 10 3 げ 母 桃 袋 出 を 帰 3 来 3 探 0 かい 遣 3 す 節 X 3 知 10

惠

親

3

岸和田 和田田 吹田 大阪 京都市 島根県 島根県 大阪市 岡山 H 市 月 植金井 鍛山 堀 堀 津雑大 西 島 野 芳 大 本 原山川上原本江江守賀道川崎村地上路 満 柳 千 規 正 芳 柳 美 美 景 富 太狸光美 逝 五 不 Z 志 茂 津 美 風朗子伸世女子子津村代幸 子太子明助春郎里

忍紅行 辞 ラ S 3 お 妻 一 酒 ダ 人春 渡 石 7 母 0 書 樹 従 4 き な 場 0 1 かい P ル 14 は 期 3 鼻 な 姜 帰 亦 所 舟 触 15 10 8 7 0) 0 2 to は 樹 う n L 10 繰 11 3 た 曲 7 n 女 0 2 情 な 会 小 to ず 似 K 1 な 3 空 た 父 が 1) 仲 環 咨 な 記 h 人 年 手 2 古 合 た 新 気 20 あ 7 練 3 人 状 1 な 1 憶 ど 3 き 戦 カン 10 う h 春 2 h 0 線 晴 7 13 0 帽 2 は 争 廻 1K た 18 7 h S 0 + 0 0 n 5 な 中 11 明 3 子 12 笑 上 映 3 10 海 > 4 10 な 0 P 顔 n 0 春 かい P 額 12 曲 3 b Vi かい な 11 3 10 嘘 う か 0 心 観 12 to で 見 力 を 居 近 食 を 7 謀 12 彩 触 7 道 船 0 片 + 惜 1 1 3 春 0 7 1 0 反 2 恋 1 渡 12 灯 < な ち 0 0 付 か 7 7 顏 住 7 太 3 遭 吉 風 H b + 2 n 3 な 哉 17 to? う

3

す

3

なる

<

7

ヤラワ

ぐるず

3

ŧ

富田林市 漫屋川市 京都市 大阪市 大阪市 竹原市 伊丹市 鳥取市 小柳 北松 坂 西 青 11 樫 渡 和 沢 本 藤 稲 加 大 江 本出原野川口田戸 田後葉藤 島谷辺 田多矢城 静久杜 公 柳 小 智 智 田 蘭 寿 独維実冬貞千洋十修 慧 宏 久 路子子香子的子子 鶴幸馬歩子男葉山 春子郎

ウ月妥 味一ひ 共 D VI 矢 宫 花 悲言 老 喜 _ 頂 蝕 協 呣 t 稼 ボ け 面 参 言 す 12 坪 1 弄 Ł to 1 を 汁 ず 0 * 12 n 葉 目 追 C す " を 沂 3 訳 0 よ 1 7 だ 1 Ž 立 知 から は 0 お う 娘 る 0) 2 7 3 2 な 伽 生. 夢 Ŧi. 実 旅 0 0 6 M 聞 を 7 ず 噺 命 H か H 物 + 路 面 7 違 蟻 年 Ž Va 10 記 か が 輪 な 激 Ŧ 大 0 花 0 3 T C を あ あ 0 13 埋 を 屋 3 き C 知 切 波 1 風 10 悲 から 1 白 考 3 1 0 To 10 は かい 鈴 分 主 期 < 伙 ż 句 13 か n 見 恵 to n 思 笑 だ か 待 買 3 海 0 か な 守 3 0 思 to V 0 7 17 3 う 3 0 # 慕 0 な 無 201 0 13 る T 12 嘘 10 果 7 12 P 見 来 を 過 言 呆 T かい 1 12 む を 池 水 1 1) 去 3 7 鳴 3 3 舞 言 1 1 X 編 b 2 0 4 月 12 な 1) 40 10 7 35 ま 2 主 す 3 笑 2 野 0 き 认 う す 3 か h

3

To

和歌山 和歌山 羽曳野 富田 京都市 守 奈良県 今治市 浜田 高石 大阪 大阪市 Ü 市 市 4 RK 笠 堀 都 西 宮 鈴 越 中林 出 杉 松 高 榎 宮 井 浦 原原端 橋 倉 本 出 川 木 智 川 尾 原村 Ш \blacksquare 吸寿三千求吐楓古 緑静 節一幸 は 弥笑や婦 都 つ す 美 万 智 お子江子男子芽来楽路子水一絵 良歩優 子 生 女

秋お学へな老 種 111 7 落 核 眼三 奇 春 善秋格 ち 多 7 ま 0 6 0 風 期 班 帯 + 麗 0 1 1 7 き 物 播 字 U 傘 K 福 初 < 10 を を 兆 0 n 戸 7 < 0 b H 返 E 1) 3 笑 間 7 0 め 除 顔 ば 居 翌 B 起 な L ラ 妻 は を 12 13 n 堂 並 To 秋 L 3 3 点 だ 欲 た 知 E 黄 息 糸 ぼ ば ス 1 手 神 0 倖 H 7) 3 10 ラ かい 色 3 7. < お 18 7 垢 3 着 か + 枕 持 P 私 は か E 11 10 3 里 1 自 ま 物 菜 0 6 K ラ 7 織 10 我 +: 位 to 知 b 0 旗 か か 14 見 酔 7 0 0 置 な b デ 2 動 1 L 7 3 0 n 隠 に T か あ 7 0 あ づい す E 2 外 章 2 晴 2 X 7 n \$2 主 to \$ CK 初 17 春 12 8 12 7 n 洩 綾 置 1 7 \$ 毬 to Vi 計 限 るの 寒 p 行 < 6 錦 Vi 居 3 な かる T n 雪 3 椿 1 10 か す P 老 買 3 3 14 父 + 5 10 X

か

和歌山市 **漫屋川市** 和田 松原市 西宮市 歌山 歌山 大阪 大田 山県 浦 桑 佐 坂 Ш 奥 福 岩 西 柴 土 增 西 藤 西 若 内 渡 里 大 野原藤部下浦井村田田居田森田山宮芝辺 和伊藤紀み 勝 雀 芙 み 英 耕 竹 花 軒 武 登 善真と 久 つ 踊 佐つ壬 太 志 晴子女子子花馬村楼幸雄代句 子都子子る 砂金

x

啞 泊 天 子 修 薬 燃 英 石 賽味ひ人格孫貫 繕局え 雄け 銭 噌 よ形ののい ħ 下 守 7 ٤ を汁 は 泰 唄 がで n 20 花 手 平 き t な 耳 主 j. 言 7 0 to げ う は んたわ 石 今 12 白 Vi 12 3 女れ な かい 軍 别 き 3 H た 迈 心 3 17 だの b 12 宝 お 重 配 n < 0 b かい ば 术 かを 謀 つけ 11 覗 な 立 石子 前 味 to 1+ to 逃が か 母 ンた消 反 た to < 11 がの らがさ 3 4 ナジ 3 桃 Fi がいい あ n かい コ ツな男 に っ戻手 は のま す 3 40 3 13 てれをほ十 言 7 3 花 るま妻 1) 並 は申 あな洗ど一 いが 1 るいうほ世 10 なし 3 # b ど紀



III 選

働 本 荒 芳 ち 介 仙 ょ 父死んで父の重さの 妻の目 傷 何 も 早耳 うま 鬼さん 4 震度2にやれやれ東京に息子がひとり Ŧi. 11 さの に向 ス 気 坂浄 の女のなさけが鼻につく た一人にかけた女の鈴 の私を見捨てぬ影法 かも我慢の毎 X うま のうしろでい 中で枝雀に酔うてい 嘘と見抜 10 土と見えし夕 ター 画 の売値聞 いと貝割菜 0 ね 減食続ける娘を笑う 日 10 す 火消 風 7 2 かされる がある いるら は憎 7 老 師 壶 暖 鳴ら 10 8 か ない 3 0 10 尼崎市 尾 Ti 紀 丹 市 F 杉 郁 王. T

よい 大街

便 カーに

1)

聞

く片

方の

耳を持ち

向 僧衣に肩

0

て歩く亀

える日は風さえ緑に見えてくる

少く亀の足

D

.7 庭

だけはさよなら言っておく

0

池

几

臺

が居る

小い禁

か末席につく癖がつき

n

のよくきく夫で出

世せず

米子市

林

栄

のから

実が美

い線で熟れ

ひ子

かの

寝

顔

かなてい

るうちに寝て終い

熊本市

有

B

びた人生ですが妻も

おり

警察はお役所よりも温か

涙する間もなく祭壇霊

男あるうち

减

続くだろ 柩車

> 唐津 市

> 脏

安売りに

目当ての

品は買い

忘れ

の花

朝の挨拶して散歩

歩

子

男ひとり急須の口が薄汚れ 和歌山市 人間をペーパーテストで分ける罪 グラタンのこげ目しあわせ食べている 想い出が影絵となって夜のしじま 種になる迄をけなげに百日草 和歌山市	席 くなる は で を 者 で る る る る る る る る る る る る る る る る る る	っとけ、	染めてみても影法師は同じ染めてすっくと美容院を出る風呂に宝の如く児を洗う朝へ父のラッパは轟きぬ朝へ父のラッパは轟きぬ
中 後	片	7	藤
尾藤	上	塚	#
まゆ	明	五五	高
み 子	水	島	子
それ程でないが心が美人です 中の良い夫婦洗濯機でもつれ 一泊へカラオケ上手が付いて来る 万歩計つけてパートは一歩から 妻の留守こんなに小さくなるスルメ を押さえ期限の切れた世辞を聞くばつ悪い人と炬燵で差し向い だら かりピシャとどうやら女房低気圧	中流の暮らしがこれか葱きざむ中流の暮らしがこれか葱きざむいい祭りでしたと露店荷をしまいクリーニング屋の看板がうす汚れを発囃子を聞きながら	の勝りたとうの勝ります。	という文字を書いたの初言を雲はふんわり乗せてれの人踏切りの先に居る
関	平	矢	H
П	松	野	中
幸	かす	佳	晴
子	9		

向い風が好きでやたらと石を投げ ・ 本外旅行へ夫婦の夢を積み立てる ・ 海外旅行へ夫婦の夢を積み立てる ・ は皇市 市 市 市 市 で は で で で で で で で で で で で で で	里の川は愉ぞっぽ妻の	会がれてグラスのワイン喉にしむ 寝そびれてグラスのワイン喉にしむ では、 では、 では、 では、 では、 では、 でがって、 のに、 のに、 のに、 のに、 のに、 のに、 のに、 のに	小雀まで元日の朝賑やかに が受きうちも世話好き話好き 恋の熱冷めた息子の無精髭 吹田市 井	
ЛЦ	Щ	原	上	崎
魚粪	悠	風	照	ن
魚	泉	人	子	マ 子
はのくるベランダがあり今日も暮れ をみ笑いの謎に振り廻されて夜 これる乙女は満ち足りる これる乙女は満ち足りる これるこ女は満ち足りる	とばらくをとかくの噂と手をつなぐ とばらくをとかくの噂と手をつなぐ しばらくをとかくの噂と手をつなぐ 単明な記憶たどれば唇に	藤井寺市 大の愚痴聞いて我が身を良しと知る 予定表詰って母のつつがなし みの虫もミンクが欲しい冬木立	眼鏡にも鈴をつけたい物忘出品の菊は疲れて戻って来べビーホテル二人残して灯	灯は一つ原画の亡妻を愛し切るとっときの条件メロン切る話題とっときの条件メロン切る話題
けとめる ってみる 豊中市	名古屋市とつなぐ	権り がなし がなし を良しと知る 藤井寺市	物 で 灯が と もる で れ 京都市	切る高槻市
1 2 -1	を を つなぐ を つなぐ	及し なし なし を知る 藤井寺市 赤	れがぬ	高る題ぬ
め豊み 夜も暮れ			れ が ともる おおお	高槻市

なかるみの意地は綺麗な月を抱く との事だから気易く批判する 過末が一日早く来る時世 鳥取県 森 山 盛 桜 なとの事だから気易く批判する	本の女にか んちんかん かん	潮風にロマンを乗せて帆船パレード嘘をつく真実だけが宙に舞う野仏に野菊寄り添う秋の風	大阪市 萩 谷 ま さ 数知りが二人意見が一致せず物知りが二人意見が一致せずりの草を活ける花瓶が見当らず	くれんぼもう出くれんぽもう出
いつまでもハンガーにある夏の服 で田市 栗 谷き分けの良い子で母の笛を待つ 吹田市 栗 谷のまきかけの良い子で母の笛を待つ 吹田市 栗 谷	では、 本の様な川にも月が割れている 地下鉄をおりると斜に歩き出し 悪人が耳をすましているこわさ	来中花咲かせたままで退院す が中花咲かせたままで退院す が中花咲かせたままで退院す	が が が は になる花束を抱かされる になる花束を抱かされる になる花束を抱かされる になる花束を抱かされる	ボーキックを利す病凝心ボータがく背なに男の未練聞く嘘ついた小指を叱るぼたん雪
春子	裕美	まさお	武 庫 坊	昭代

不器用な似た者同士夫婦です	寝屋川市	父親の都合よい日が七五三	倉敷のコーヒーはやはり旅の味	マツタケは韓国産で満足し	お彼岸に何処の墓も菊の花	豊中市	思いきり動く胎児の機嫌とる	初恋の人がお隣クラス会	定位置に母が座っている安堵	子育てへ一服くれる子の寝息	水戸市・	燃えつきたあとは無口な影法師	こんなにも酔って忘れたい人ひとり	棄権して多数横暴せめている	花道の力士の背へちっちゃな手	和歌山市	男らの野戦りんどう夜閉じる	子を思う愛に近道などはない	袋小路に噂の好きな耳と耳	エリートは至近距離から狙われる	近江八幡市	友なくて黙って歩く秋がいい	読書三昧干しもの入れたかと夫の声	名画見た日はぼんやりコーヒのみ
	岸野					辻川					上鈴木					福井					前川			
	あ					慶					春					桂					千			
	やめ					子					枝					子					賀子			
三文判欠勤届が嘘を言う	芦屋市	改築の寺から廻る奉賀帳	のら猫は日だまりにきて丸くなり	目じり皺とるクリームを勧められ	式服の帯を夫に手伝わせ	吹田市	母さんがいるからいつも陽気です	孫を抱く娘聖母の顔になり	人恋うもフィーリングよと娘言う	程々のお酒で今夜はバラのよう	大阪市	船頭の情に弱い波と風	餞の言葉はいつも美しい	落葉寄せ虫の褥を厚くする	若水を供えて家族あらたまり	高槻市	お話と抱っこが好きなぬいぐるみ	母さんのスカート潜ってかくれんぼ	おにぎりと空気が旨いハイキング	細切れの夜をつなげて朝が来る	藤井寺市	検査値がよくなりせっせと薬飲む	母逝きし雪の夜更けを忘れかね	倶会一処炎に似たる彼岸花(酢々先生に捧
	上					茂					古					笠.					前			(
	田					見					Ш					嶋					Ш			
	佳					よ志子					美津山					恵美ス					美恵子			
	秋					4.					枝					子					1.			

仲の好さ若い夫妻のカー手入れ	豊中市	糸車カラカラ歴史こぼれ出す	迷わずに八ッ橋買うて京の旅	雨はじくフロント硝子生き生きと	目出度さの中で孤独の風に会う	鳥取市	クーラーを片づけた手でこたつ出す	指定席コーヒーの向うで笑い合い	金襴緞子締めた日もある独り言	黄昏は孤独を乗せてやって来る	高石市	嫁ぐ日は父さんきっと泣かないで	凄いことあのちょぼ口がこともなげ	海征かばの声耳朶から離れない	ふる里の水思い出す顔がある	尻崎市	手相見のあかりへ酔うた人の足	お隣も七草叩く音がする	初夢を炬燵の中で話し合う	初仕事孫のお手玉縫うてやる	尼崎市	年末のあくせく逃れ第九聴く	窓際へ来てから無口五十坂	四コーナー廻った処で馬券パー
	上田					羽津川					浅野					吉永					大江			
	登					公公					房										かか			
	志実					乃					子					伊三郎					ね子			
古都たずねゆったり歩く秋日和	尼崎市	味つけに小言言いつつ五十年	着物ショー顔はショーには入らない	どしゃ降りがきれいな虹を呼んでいる	尻崎市	ライバルが心の隙間埋めにくる	秋の暮シャネル五番を武器にする	鰯雲蝶の戦が弱くなる	羽曳野市	娘より高価な化粧品を塗る	疲れだけ残って今日は空の魚籠	香水の刺激に鼻をくすぐられ	羽曳野市	ハーレーが来るので双眼鏡を買う	外国と短波で話す愚息居り	ナポレオンの生涯ほとんど仮眠だけ	守口市	溜飲のさがる言葉で酒美味い	意気投合禁酒に酒が要る不思議	ひとり立ちもう甘えなど許されぬ	熊本県	閻魔さま娑婆がよいよと御託宣	低姿勢だけど怒れば男らしい	甲羅乾す小亀眺めて日向ぼこ
	矢				Ш				天				麻				結				大			
	萩				田				崎				野				城				Щ			
	200																							
	貞				保				只				幽				敏				幸			

公園の陽だまり犬と老夫婦流される様にミナミをゆく歩幅	大阪市	不器用な男で花の名も知らず	電卓を嫌う頑固な五つ玉	治り度い一心今朝も三里灸	兵庫県	美容院団体旅行があるらしい	自転車の小女に霧のつけまつ毛	仏飯を盛る手がやさしくなってくる	兵庫県	冬がすぐそこまできたと風の音	止り木の隅でさがした詩一つ	あつあつのまんじゅう買うた村祭り	島根県	復のない切符で義姉は白衣着る	雑草の名もない花に手をふれる	夫婦旅古都の夕暮れ鐘を聞く	出雲市	今朝も又生きていました風の音	矢印に逆らって見て悔いている	年とらぬつもりカメラに裁かれる	尻崎市	誘われるように出て来た秋日和	鹿王院紅葉見頃で秋拾う
7	松				奥				森				岩				落				野		
	本				野				脇				佐				合				瀬		
	ただ				テ				和				富				Œ				昌		
10.4	L				ル				子				子				江				子		
喋らない聖書に寒い隙間風霜覆いの松美しい過去をもち	笛吹いて街に退屈さを貰う	長岡京市	亡き母と同じ口調で子を叱る	体調の悪い日意地も悪くなる	ほんものの笑顔見つけた運動会	大阪市	孫と住む夢ばかり見て風わびし	兵馬俑歴史の証人今ここに	七五三少しすました孫の顔	伊丹市	緑と赤リンゴ園は平和だな	中庭の大輪月も覗きに来	冠雪の岩木の山に魅せられる	青森県	余生とは夢と夢との続きかも	老いらくの恋を喜劇と人は言う	終焉を飾る嘘なら美しく	兵庫県	予定表赤い活字の納税日	失投の反省がない剛球派	生活をかけて傾く父の靴	広島市	流氷を窓外に見て機内食
		木				板				樫				波				野々				望	
		本				東				谷				た								月	
		如				倫				郁				ただ				ゆう				晴	
		洲				子				子				お				也				彦	

寝屋川市 立 床 晴 風遠くからやって来るのも老舗なり 生きて居る数字私にある口座 大学へ行く人も居る定時制	川に沿い遍路の列が去って行く蟹缶を開ければ多喜二思い出し辛口の冷やで寝酒の甘き夢西宮市 草 刈 堕 駄	ねずみもう取らず恋だけしてる猫田中判決視聴率でも競い合い 大阪市 平 井 露 芳 大阪市 平 井 露 芳	学歴を団地雀に裁かれる 大阪市 今 西 静 子出合頭大きな欠伸見てしまい	手相など信じるものかと手相見る老眼鏡いやな世相が見え過ぎるあぜ道に秋がたたずむ草紅葉の上野市 田 中 隆 二	忘れずに毎年とどく菊の鉢 高槻市 上 原 逸
人 お恍けで相手の腹を透かし見る おでん屋の湯気ほんわかと招き猫 岸和田市 奥		おすとは言わない家出の子が帰り おしがっとは言わない家出の子が帰り	太閤もびっくり大阪城祭り 国鉄の貨車が身売りの隠居部屋 転船のロマンが酔わす登檣礼	アルバムをめくれば青春よみがえり 急いでる時にチャックが閉まらない ひかえめな男でひそかな闘志見え	駅長の「タマゴ」が切符切ってます一部屋を見栄に取られているピアノ
礼	岡	田半	崎 雀	崎 浪 速	宮山
子	豊	仙	声	子	久

バースデーケーキ吹く息七十三の息忘れた唄をカナリヤ思い出し	姫路市	泣いた子に架けてやりたい虹の橋	家付きの重みに耐えて細い肩	燃え初めて山を迎えた渡月橋	高槻市	ドラフトの顔ぶれに積む札の束	偶然が糸を引いてたメロドラマ	話題性一枚脱がすカメラマン	尼崎市	定退で朝寝の夫の安らかさ	明月に兎とパンダ居ると言い	月並な言葉ばかりで励まされ	米子市	サングラス位なおしゃれにふみ切れず	肩書が或る日ポロリと落ちる音	夕茜恋の想出ふと横切る	岡山県	注射針うまく入る日と入らぬ日と	鰻飯とどけてくれた娘が一人	入院で休養せよは天の声	東大阪市	ガラス玉つけても金持光ってる	命日も忘れるほどに今満ちて
	人				芦				児				大	9			山				小		
	見				田				玉				田				本				林		
	翠				静				歌				4				玉				勇		
	記				江				子				さと				恵				人		
流行の服もマネキンほどはえず浮ばれぬ寺の回りのラブホテル	酒やめる決心妻を案じさせ	大阪市	嵯峨紅葉十三参りの想い出に	流行は追わず和服で身だしなみ	傘寿来ても流行の服で若返る	西宮市	元旦の計を練ってるレモンティー	失恋へ秋の彩多すぎる	一日を狂わせているペットの死	大阪市	菊人形まだ片袖はないままに	神主の今日も持ってる竹箒	神官も背筋を伸ばす神無月	八尾市	犬ほめるコツも習って売りに来た	子に負けてまたこれきりの金を出し	ロボットの蔭で奥様糸をひき	能本市	市場篭足蹴りにしてレジを待つ	ボリュームをあげ反角のマイクゆく	ジョギングの決心にぶる憎い雨	唐津市	朴の葉に長寿と書いて祝われる
		朝				朝				松				葛				高				神	
		倉				Щ				尾								野				崎	
		利				千世				柳右				幸				宵				多称	~ 転泉
		義				子				子				子				草				称	込めど

おからぬが金賞の子の絵はめておき 横顔に惹かれ夢二の本を買い 鳥取県中部地震 鳥取県中部地震	こもり柿夕陽ぬけぬけ一人じめ 紅葉狩り神庭の滝に時もらい 出雲市 野菊咲く昔の場所へもとの彩 出雲市	十曲りトンネル抜けても杉ちつかぬ腰へ子供がぶらさばなせぬ仕事へ電話鳴りつ	、 生の代理葉書を買い走る 大生の代理葉書を買い走る 大庫県	日満さん輸入とうふに飽いて逝き四浪の長島さんに匙をなげ、米子市四浪の長島さんに匙をなげ、米子市のでは、北京では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田	
福	河	袁	円	本	坂
田	原	Щ	増	吉	根
あや	恵美	世	貞	宗宗 戦 改 め 光	流
子	子	似	子	め光	水
どんぐりを拾ってはすぐ独楽作る紫苑咲く風吹くままに右左ってとなが乱れて咲いたのを括りコスモスが乱れて咲いたのを括りまが咲く風吹くままに右左紫苑咲く風吹くままに右左っている。	さんさんと秋陽はへだてなくくれる 三文判で戸籍あっさり受付ける 三文判で戸籍あっさり受付ける 岡山県	新る。	窓の外噂話が通り過ぎ 足元にドングリーつころころと 東の間の小春日和に墓参り	指定席何やら敬遠されたよう恋をする娘不器用に芋をむくっなをする娘不器用に芋をむくった。	会長のさらばが耳の底で呼び
森	藤	高	†·	堀 松	
)1[瀬	野	井	江高	i
春	比沙	不	栄 美	百 多	
子	子	= 3	子	代子	

思って をがす を	コスモスがふるえ般若寺立冬す 萩咲いて嫁にゆく日の近づけり 石段をせばめて赤い萩の道 大阪市	偏屈は小さな世界が住み安い人垣は騙され易い顔ばかり病室の話世事とはずれて居る大阪市	妻活ける花を絵に描き趣味の時割れた壺怪我はないかと言える齢失婦だけ残って部屋の広さ知る西宮市	平和感流行語に彩られ精一杯鳴く小鳥にも教えられ精一杯鳴く小鳥にも教えられれ歌山県	私には合わぬ流行色すてる重ね着の重さに老いの影をみる山茶花は冬を知ってる蕾抱く大阪市
佐坪	権	北	松	西	山
藤田	安	山	本	村	本
美 紅代	達	悟	-	重	炉
子 葉	郎	郎	郎	彦	斉
り阪市渡部	い電話小声になった事務机 転本市 北 川転した略図も書いて来る便り	湖荒れて釣人見えず落葉舞う日記買う三日坊主といわれても 滋賀県 安 田 末水うまい村とは知らず走りぬけ	自分との約束守るいそぎ足雪コンコ下界に白い仮面つけ 島根県 岩 田 三雨垂れの妙に気になる昼下り	権道観音さまへ辿り着き 既る紅葉風もろともに人も染め 秋の夜のクシャミが一つはね返り	尖端にエサをかかげる親馬鹿さ 上わしわの乞食ルックに金かかる
	佳 一 南	志	Ξ	淑	民

大阪市 日 阪 秋	関	仲直り出来て嬉しい酒の味	米子市 宮 本 佳女	激流にいどむ若人雄々しくて	早起きで隣の門も掃いておく	大和郡山市 岡 田 すみ	昔干支今血型と時流れ	ルンルンの気分娘とコースター	愛知県 国 分 甲子	運だめし石蹴ってみる月の道	お願いの数だけ不動水浴びる	寝屋川市 堀 江 光	追憶が秘かにゆれる秋の湖	足元へ詩情をつくる草もみじ	島根県東原福	酔うててもメモ帳枕元に置き	馴れてきたセキセイ羽繕いして見せる	高知市 北 川 竹	燈心をじっと見つめている嫉妬	影にさえ疎まれそうに生きている	和歌山市 神 平 狂	決心がつかぬに駅へ来てしまい	気に入りの花瓶に菊をあふれさせ	大阪市 田 中 節 フ
子			男			h			郎			子			子			萌			虎			子
よろしくと名刺の裏が炎えている	鳥取市	失意の日鏡の曇りまだとれず	コスモスが向うを向いて泣いている	指信市	コントロールせずに見守る子の個性	あせらずに病いと仲良くおつき合い	和歌山県	宝くじ手に母親の夢がある	おばあちゃんと呼ぶ時嫁はきげんよい	西宮市	止り木の蜻蛉とばあさん話してる	好きなこと出来る雨降る日が待たれ	弘前市	お互いにいたわり合うて朝の靴	水曜の早出見送る明けの星	羽曳野市	出勤簿軽いつかれの月曜日	赤信号人の流れが気にかかり	岸和田市	灰皿を前に対立する労使	平凡な暮しに女房ついて来る	河内長野市	寒波襲来家族のセーターを総点検	翔んでいる女が棄てるハイヒール
	武			渡			Ш			飯			真			吉			藪			糸		
	田			辺			田			森			喜内			Ш			野			谷		
	帆			伊			久			泰			M			寿			ケ			春		
	雀			津志			子			世			實			美			イ子			草		

煩わしさを逃がれし旅の淋しくて マンションにお国訛りの花が咲く 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市	万感を秘めて最後の花むける(退職)里帰りしては無心を持ち帰り唐津市	海外の話食べ物に困ったと幼き日なろうた踊りの身のこなし八尾市	大声を出していたのが先に折れめし粒で手紙封じた母のくせめしねで手紙封じた母のくせいすぎた繰目を解く量下り	まつけずに記引されているさい父にされ 一覧のでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	昇給差から友情がくずれかけ 雨の街冷えた出逢いが待っていた 高知県	パチンコをはじく目玉で職に付け
塩長		椎	小	佐	曽 岸	
田谷川		尾	林	藤	我部	
新一	高	公	妻	令	脩	
郎司	明	子	子	子	裕二	
見るだけでよい妻佗し毛皮展見るだけでよい妻佗し毛皮展 京春し書留ついたのが奢り でまわり小さくなった母と逢う	散髪のハサミに妻の指を見る菊の香をよろこぶような亡母の影	万太郎の句碑しみじみと雨の中京の町長煙管など売っている	大阪市 五歳児も動かぬ意地を持ち始め どんぐりの独楽を廻せと秋が言う こ日村市	友情にすがり再起を約す彼 外交員どんな肩書あったのか 鳴門	食卓を拭き拭き箸を置いておく神詣り柄杓がないでと言いに行く神詣り柄杓がないでと言いに行くっながれた「むつ」罪人に似てるかもっながれた「むつ」罪人に似てるかもっながれた「むつ」罪人に似てるかも	八戸市
唐津市 八尾市	市	异	th th	तं तं	111 0	111
居津市 桁	走	小	堀 植		大	島
津 尾市				直 八		
津市 前 松	Ŀ	小	堀 植	直 八 木	大	島

まつたけが土産で嫁の里帰り大阪市	にぎやかにお城まつりと市長選たくましく親子で生きる旅役者	大阪市	年玉は向う三軒両となり	チュウチュウに猫は遠慮な初日の出	和歌山市	ここだけの話が回る市場籠	自販機が好きです無駄口要らぬから	兵庫県	胃カメラが二合の晩酌もって逃げ	甘い辛い文句ならべてお代りし	鳥取市	面接の社長私に合わぬ声	新しい帽子ダンプとすれ違う	益田市	かぐや姫のように娘をよそにやる	皮靴で社長は畑の菊作る	島根県	濡れ衣が晴れて乾かす冬帽子	再会へためらう傷が一つある	倉敷市	叱らねばならぬ関所にパパを据え	園児バスママが主役で並んでる
宫		野			桜			脇			若			里			田			赤		
Щ		田			井			田			林			本			中ゆき			澤		
木		君			千			米						た			きさとう			沢		
Q		枝			秀			朝			止			かし			とう			の藤		
定年のひとりになると出る本音定年へすぐ口に出る回顧談	老夫婦花を咲かせる渡り初め	穫入れが済んで空しき秋の暮	島根県	児の遊び一人が泣いて幕となる	寄付金を電話で話す腹づもり	和歌山県	顔に塗る銭なら高い方がよい	お見合に写真よりも情がわく	大阪市	染め変えが出来ぬコンビの強い杖	邪魔者がおらず気が楽旅の宿	鳥取県	決心は一直線にまっしぐら	路地の奥私の好きな女居る	大阪市	玩具でも僅かなヒントではやり出す	若夫婦水子地蔵で写真撮る	大阪市	貯えも終って蟻の冬ごもり	断崖の松は岩から水もらい	大和高田市	三日目も同じおかずで老夫婦
	西		田			森			小			松			北			Ш			岸	
	本		中						野			本			田			脇			本	
	保		ヒデ			三枝			風			4			秀			正			豊平	
	夫		チ			子			童			みさき			月			之			十次	

橘 高 薫 風 選

退屈で温めなおしている嫉妬 ときどきは人をからかう鳩時計

大阪市 小 #

7

髪染めるおいてけばりになりそうで 少うし痩せて亡母の横顔思い出す

人格浴森林浴に似てすがし なんとなく人格浴というてみた

岡山県 数

転落の詩を書く風の騒ぐ日に

Ш

遠

晒し首はぐれ鳥と対話する 銀の鈴つけても駄馬の首である 名古屋市 越

天も地も男も女も明け初むる 影法師の向うに僕と君がいる 八尾市 高

人はまばらに菊人形の寒き日よ

菊にあけ菊に暮れてる日の充てる 兵庫県

天を師に地を友に生く男なら

残り火よ新発売を考えよ 泣いて済む悩みの量もそれ位 富田林市

飲みたくなるサ村時雨が通る

青森市

Ι.

藤

甲

古

みちのくの冬と闘う面がまえ

母さんを想い出す時沈丁花 父さんを想い出す時みどりの樹 豆球にしても消しても老夫婦 五十年妻とトボトボトボトボと

岡山市

Ш

端

柳

子

泥舟に乗るのも真中辺を撰り

今治市

月

原

背

明

貝割菜ひりりと決断強いられる

岡山県

居

耕

花

耳が遠く口が達者で困るなり 孫の名も総理の名をも度忘れて

下手な字を版画であやし賀状書く

智

岡山県 岩 文 衛

兆代賀

村 枯 梢

橋 夕

花

榊 原 秀 子.

柚子一つ貰う一つのありがたさ

本 文

7

Ш 美

代

憎しみが長く続かずとろろ摺る 藤井寺市 とみえ

大養節聞きとうなった白毫寺 豊中市 H 中 īE.

坊

向日葵の中に無数の瞳持ち

台本の通りには来ぬ渡し舟

人形の愛うばうのは妹だ

老いの道時が前から後から

米子市

木

Ŧ

代

良く出来た造花で水を吸いそうな

兵庫県

仲

井

素

水

幸

戦後はるか小さくなったキリン草 米国グレナダ侵略

自由の女神が真珠をふみつぶす

幽

女

老いらくの恋う料理屋を出て別れ オモチャ箱の底でデジタル時刻み 羽曳野市 野

あやとりに記憶の糸がほぐれだす 雪解けをかかとで歩くもの思い

晴

7

義理ひとつ路傍の石になりきれず 美しい嘘かも知れぬ生きる嘘 大阪市 唐津市 高 城 多々子 修 史

病む妻に言いあてられた夕の菜 和歌山市 原 寿 子

手鏡の裏から流れてゆく想い 上天気神様何をもくろんで 藤井寺市 米子市 赤 木 荒 和 子 介

合掌の手がだんだんと重くなる

父母の庭の柿よと二個送る 伊丹市 谷 寿 馬

鳥取市 H 能 生

だまされたことにはふれず墨をする 米子市 西 雄

失言をうまく繕う蝶の舞 17

走馬灯あの日ばかりを何故照らす 名古屋市 藤 高

指宿市 渡 辺 伊津志 子

Ŀ H 影

大阪市

	島根県小砂白汀	父の日に母も明るくビール飲む	島根県木村はじめ	決心をゆさぶり見るも親心	唐津市 木 塚 素 石	吊り橋を渡ると消える影法師	長岡京市木本如洲	夜は寝るものでしたよね虫しぐれ	鳥取県 鈴 木 村諷子	アイラブユー文面よりも一歩出ず	富田林市 中 村 優	ボリュウムの過ぎる君が代雑音化	岡山県 池 田 半 仙	菊の花除けると庭のがらんどう	高知市北川竹萌		唐津市 田 口 虹 汀	善玉と悪玉三面鏡から笑う	和鬼市西岡洛酔	切り札を二枚持っていて迷う	富田林市 藤 田 泰 子	一粒の米拾ってる指のしわ	鳥取県 清 水 一 保	手作りの甘酒を待つ母も亡し	守口市 結 城 君 子	帰らねばならない時間ばかりくる	唐津市 久 保 正 敏	振袖に声も優しくなってくる	大阪市 渡 部 さと美	水郷は襖絵秋がよく似合う
和歌山市 浦 野 和 子	年金の扶持で余生が黄昏れる	高知県 山 下 登 舟		吹田市 西 岡 豊	残しとく方へ期待のある間引	今治市 矢 野 佳 雲		高槻市 田 崎 あき子	生甲斐にした恋人と行きづまり	堺市 高 橋 千万子	ウマの合う悪友の来る妻の留守	鳥取界奥谷弘朗	いも掘りの孫にもらった芋の味	大阪市 上江洌 勝 子	昼下り車中一列漫画本	尼崎市 春 城 武庫坊	ためらわず女紅ひく雪催い	寝屋川市 岸 野 あやめ	決心を促すように山に雪	太田市 藤 田 軒太楼	飲み過ぎと言えず黙ってお粥炊く	島根県 堀 江 芳 子	誰か見ていると信じて手を上げる	島根果堀江正朗	讃美歌を聞いて落葉の土となる	島根県 岩田 三 和	流れ星二人で祈る別なこと	和歌山市 福 本 英 子	青春の夢と共にある野菊	大阪市萩谷まさ
紅葉狩り松の枯木もその中に	西宮市 松 本 一 郎	公園で秋を喰ってる独り者	the	母と子の命を包む妊婦服	水戸市 上鈴木 春 枝	歩いたりスクリューだったり鴨の足		約束へあなたも踏み絵踏んで来る	近江	弱虫でいると長生き出来そうな	和歌	照れ臭い年でもないに老夫婦	 	妻の逝く遠い空で喪を守り	愛媛県 八 塚 三五島	五十年住んだ家売る淋しさよ	大阪市 竹 中 綾 珠	恍惚の父体臭はすでに枯れ	尼崎市 西村 かすみ	平謝りにゆくネクタイの柄はどれ	和歌山市 若 宮 武 雄	僕がいて森羅万象僕に在る	西宮市 草 刈 堕 駄		高槻市 上 原 逸	いる	京都市 都 倉 求 芽		豊中市 満 仲 きく子	こいさんの指定席あるお汁粉屋

会 表 1月2日(日)ラシオ第一が設	カズエ)森田	化粧品まで月紙とはおそれいり 美しい花ほど秋は淋しそう 奈良市 森	下 歌 子	黒板に「さよなら」と書く待ちぼうけ
ŧ 9	敏 夫	真 結 城	杵を持つ兎はいつも横顔で 守口市	花村	毎或しこぐつと日本はこうまでる ・大阪市 西 森
受可も 大反方東文写揚げる―3VHく(ハガキに三句以内)		H	人生の折り返し点を走ってる羽曳野市	よし津	手ぶらでもみやけ話をどっさりと
締切 1月10日			改築へ亡夫にすまぬ保険金	みさと	黒と灰脳のハッシはよく光り
課題「カレンダー」選者森中恵美子			口止めが女心へ発破かけ	宗光	また。 は、 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
44	三千代	天屬呂	コオロギのカラオケを聴く仕舞風呂	垂	いがみあう地図を星まであざ笑う米子市田中
	妻子	小林	岡山県		
橘高薫風宛(ハガキに三句宛		ならず	亡姑の影ふんで亡姑には重ならず	義美	唐津市 浜 本
投句先 〒50 豊中市中桜塚三丁目13―15	寿美	吉川	羽曳野市		
*		になる	しっぱ捨てて蜥蜴明るい朝になる	照子	吹田市 井 上
埋ずもれた天才雑用の中にいる	はつ絵	林	西宮市		花道を生かす舞台の幕を引き
枚方市 一		会い	お互いにネクタイしめた街で会い	久仁於	唐津市 浜 本
その昔極彩色の夢信じ	幸泉	小沢	高知県		浮気でもしたらと他人は無責任
寝屋川市 堀		(水)	喜べぬ日もある今日の掌を洗う	干秀	和歌山市 桜 井
脳の襞すこし伸ばして天下り	裕	佐々木	島根県		阿弥陀経木魚の音によいリズム
平田市久		酒	本心をさらけすっかり酔った酒	勝美	大阪市 北
草の波お茶目な風とたわむれる	早苗	西村	島根県		口げんか出来る相手とお茶漬で
尼崎市 春		もどる	はぐれ鳥いま母の樹に舞いもどる	かすみ	寝屋川市 平 松
私の同心円に誰を置く	田鶴	青戸	米子市		色あせた未来図なれど捨て切れず
西宮市 奥		1419	義理欠いた心が痛むキツネ雨	柳五郎	岡山市 井 上
旅だより軽いタッチの秋景色	テル	奥野	兵庫県		単身赴任汽車の汽笛の消える果て
尼崎市 伊			秋深し金木犀の中に住む	度	寝屋川市 江 口
王冠の勲章だったらもらいます	キミ	岸野	守口市		脱ぎ捨ての服寒がりの猫が盗り
京都市 松			秋の浜指から落ちる砂の色	廣幸	唐津市 前 田

一同人 吟—

秀句鑑賞

E

前月号から―

正本水客

尻尾つかまえたぞ おや胴がない

で何か歯がゆい。
そり、女子と関いている。政策には大きな顔がヌケヌケと笑っている。政策には大きな顔がヌケヌケと笑っている。政権まえた尻尾の上には胴体がなくて、そのが、近域の地域があり、

恋の中休みらし娘のピアノ

を叩いている。中休みが言い得て妙。が、思い出したようにポツンポツンとピアノが、思い出したようにポツンポツンとピアノを愛は何とかと元気に動きまわっていたの恋愛は何とかと元気に動きまわっていたの。 橋 千万子

借り傘を干す豊かさが妻にある

かさと思えるのも夫婦。 岩 本 雀踊子かさと思えるのも夫婦。

秋の山 妻もち帰るもの多し

名も知らぬ茸や赤い口を開けたアケビや小高 杉 鬼 遊

秋の山には妻の喜びが隠してある。

十二月 何する人ぞ戎橋

の句が忘れられない。
十二月の題材で作られた句は数多いが、亡十二月の題材で作られた句は数多いが、亡

病名を聞けば医学書めくりだし

眼に浮かぶ。 福本英子

伏目がちに私の秋が去ってゆく

万感がこもる。
そのでは、の句があるように句主もや妻も夫も入院される不幸が続いた。
さすがに
を妻も夫も入院される不幸が続いた。
さすがに
なり、
はり
に対するリハビリーに
。絆と
を表がたまれるに対するリハビリーに
。絆と
を表がこもる。

一日を追いかけられてる妻が良い

映さまの体調が万全でないと聞いているが 映さまの体調が万全でないと聞いているが 映さまの体調が万全でないと聞いているが 明に追いかけられて元気に動 がことである。

世の中へ地団駄踏んでいるディスコ

い出すが、この句 "世の中へ"が利いている。して、年配の者のひんしゅくをかった事を思ひとしないますものが流行ひと頃モンキーダンスとか言うものが流行りと頃モンキーダンスとか言うものが流行

相槌を打つとこちらが負けになる

腕を組んで押し黙っている緊迫した零囲気 腕を組んで押し黙っている緊迫した零囲気

内へ内へ自分を捲いて行くも秋が感じられる。

決着がついて男はのみに行く

また男である。 宝 口 笛 生

台風が腕をまくってやってくる

え撃つ準備をしなければ。言われてみると、そんな気がする。漫画に言われてみると、そんな気がする。漫画に

金持たぬ夫婦がいちばん朗らかで

が、かずくである。

変りなし めくり忘れたカレンダー

平凡こそが幸せである。 子供達は元気で学校の成績もまずまずであ

鳴き止まぬこおろぎお前も眠れぬか

おろぎというのも何か親しみが持てる。 秋の夜長を物思いにふける人。不眠症のこ 坂 部 紀久子



皮下脂肪おんな真冬をしたたかに

市場などで働く男勝りな女性像がよく現わさ 活気あるその場の情景までも想像させる。 れていて、下五が一層作品を引き締めている。 寒風吹きすさぶ早朝の浜辺か、或いは卸売

名月に領空侵犯などはなし

板東 倫子

の世相を巧みに取り入れて、月を浮き彫りに 名月の句は多くの人に詠われているが、現在 ままの気持で眺めたいと願う思いが、下五の 情勢がふとよぎる。だが月の美しさは、昔の などはなし」と否定しているところにある。 名月を観賞する作者の脳裡に、現在の政治

どの恋も風化十二月の御堂筋

いが、この路をたのしげに行き来する。 りで歩いている作者の感慨であろう。 春芽吹く頃には、また新しい幾つもの出会 銀杏が散り果てた十二月の御堂筋を、ひと

妻帰宅急にお腹が空いてくる 前田

様の存在を改めて思い直されたことであろう。 仲の好いご夫婦であろうと想像が出来る。奥 淡々と書かれているが実感の強み、きっと 肛門を看た看護婦に又出会い

う。軽いユーモアに通じる。 して、この作品を詠むことが出来たものと思 人間としての羞恥心であるが、この作者に 土居 耕花

父代り兄の大きなめし茶碗

たなら、 を早く亡くした長男の逞ましさが「大きなめ 得る世相である。どのような事情にせよ、父 し茶碗」で想像が出来る。「親代り」とされ 交通事故等、あまりにも痛ましいことが起り 今では多くても三、四人まで。それにしても の兄弟姉妹のいる家族は珍しくなかったが、 作品の中にドラマがある。昔は七、八人も 一層作品に重みが出るのではあるま 杏花

日記には無事に暮れたと書いておく

きっといいお姑さんであろうかと。 たものと思われる。少々のことは胸に納めて にして、この作品がさらりとお出来になられ お孫さんの句もお書きになられる程の作者

新しい医者へためしに妻をやり

もの。近所に新しく開業された医者に対する 夫婦の会話が聞えてくるようだ。 診される側としても信頼の出来る方をと願う お医者さんも、とやかく言われる近頃、受

昨日来たベンチで後悔しはじめる

作品のいのちであろう。 微妙に表現されている。 昨日と今日の、一人の女性の心の推移が、 「昨日来た」がこの

官舎にも住み馴れ菊も作り馴れ

ほっとしたものを感じさせる作品 作者のなりわいをさりげなく表現されて

楽天家の妻に明日の風が吹く 吐田

公

甘党でいつも円周から外れ

平凡な中の非凡な作品に心を惹かれました。

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中 山 内 静 水 方

大阪」五百号に 御支援を!

0

五十九年七月八日(日から 中ノ島中央公会堂中会議室 (兼題三十題 各題二句吐 選者三十氏只今交渉中

○記念合同句集

人十句まで

参加費(句集代及び送料を切が入り、五十九年五月末を表・既発表作品問いません。 円

敏

満

羽曳野市高鷲八丁目三十一ノ十

智 春

田林富柳会

'84 頌春

]] 阪

III

柳塔 柳岡山山狭井田西岩神玉児浜斉草同 高塩中田北 須 版 本下田間上中岡井磯置島畑藤深 人 天み佳希喜笑洛本道重与胡三酔ー つ加久 蔭 呂 十同平る志志酔風酔棒子人志蝶四升 比笑 呂

頌 春

川柳わかやま

-1984-

国天寺谷玉田垂坂坂後黒黒神片柿大大上牛浦内岩上満田口井中井部口藤田瀬平岡花越野杉尾野芝倉 光三裕信豊悦千紀公正秀登狂茂紀一武信緑和登志代代代美子太子子子子雄夫虎一女代太秋良子代

野若山山山森松松細堀福福平野西西長中中中中中外村宮田川路脇本原川端井本井村口山尾井屋山根島 一太武久克佐善庄寿稚三桂英照き忠 ミ栄好 勇正同茂雄子子子太平子代男子子子み雄幸子子夫修太博

村上春巳君を偲ぶ

宮 笛 生

巳年の春の生れで春巳が本名ならそのままで 川雑として頑張った。雅号は麻生路郎先生が は番傘系の中にあって私も川柳雑誌社で共に 川柳雑誌に投句、麻生路郎師に学んだ。奈良 を出した昭和二十七年よりの付合いだった。 私と春巳君、春巳君が奈良柳茶屋川柳会へ顔 ならない。あの元気もんの春巳君が嘘の様だ。 らなかった。もっと早く連絡してもらってい なった。十一月三日に倒れたらしいが全然知 柳の指導を受けたと聞いている。その関係で 誌社不朽洞同人の故後藤梅志さんの近くで川 たらと、死ぬ程悪かったとも知らずくやんで いいよ、と言われたのでそのまま春巳を名垂 村上春巳君が十一月十四日突然帰らぬ人と 春巳君が大阪に住んでいた頃、当時川柳雑

昭和三十三年頃、麻生路郎先生より川雑奈

なっている、と結んでいる。

った。吟行にも何回か行った。 田一三夫氏等を招いて苦労したことも多々あ 生を始め、橘高薫風氏、河合すすむ氏、不二 番傘の方々にお断りして川雑本社より路郎先 る。路郎先生より番傘の人は入れるなと言わ 毎月春巳君と指導に通ったことが思い出され 校生活三年でリーダー格が卒業してあとが続 来ていただき、はなばなしく発足したが、 に奈良支部を結成した。近所より奈良高校 れ、選者に行ってやろうと言ってくれる奈良 かず二年半の短い期間でつぶれたが、その間 春巳君と相談し路郎先生も結成式以来何回か てほしいともちかけて来たのがきっかけで 入学した内海敬太君が私に高校で川柳を教え

稲妻に浮く大仏殿の巨きさ

代社会にあって豊かな心を養う私の栄養剤と を許して話し合える人達の集りは川柳を除い たもので刷ったため見苦しい点は了承願いた 始めての私が原紙を切り謄写版も自分で作っ ってくれる人達との心のつながりは厳しい現 て他に無いことであり、句を作りそれを味わ またあとがきに、このせちがらい世の中で心 自作で発刊した。この句集は鉄筆を持つのが い、と書いている。約二百句を集めている。 昭和四十二年に春巳君が鹿という小句集を

句集の中より拾った春巳を七、八句

良支部を作れと言われ奈良高校で高校生相手

弁当へ突然鹿の顔が出る かけっこしてる僕の雲君の雲 血圧を一合過ぎたらもう忘れ 二十年添うて覚えた燗のこつ 男気を出して家計を狂わせる 大晦日時計のネジも巻いておこ 1 カーをさしたまんまの筆不精

りだったと思う。良き柳友を亡くし私もくや しくてならない。 まだ五十四歳の若さで春巳君もくやしい限

彼の冥福を祈って止まない次第である。 路郎師のもとへ春日の雲が飛び 生

課

定

指

小 狐 選

定 明 道 指 日登定 12 迫っ 私 てきたあ の教 定ら n 美恵子

指借水適百指受宮何指指芸目指指 を印定 を旨にいやな指定、れる人生な!! 利子もらう とり 定場所 植松 志只景 津士子 指指天天叙

験する子は志り 上指定をほこって 0 こそばい 立れたよう で居る老舗 指 たよう 指定席 定 n 舖 多々子 廣 右義 朗 近美子

定などするからしんどいことになる語景のもみじが映える指定席 定した場所から離れて待っている 景增 7 on L 0 7 請求指定をとり消 指 定 0 宿に確 か され 8 る 規不風 多賀子 文 子亭

指定都 市みどりひと株ずつ増える

織 文 子 選

指定席メーンイベントになって混

定した日

指

定

方が良い

赤木和子

決

心

かい

何

度

7

1

あ

3

酔

0

りも

嬉し指定

のフルムーン

浪速子

決

だん眠く

なってくる

重はつ絵

背シ指指信指因 2000年 1000年 100 H た根 大 8 う 切 n で待 譲られ僕も年 求人の るに 間 + 後 合所を出 なき空 り座が 0 枠は 指 tかいな 出ない なの旅 哺決 定 定 乳 旅店瓶

定定皇国勲 席場のもの 所 地 H 鎖 獄 妻 0 も同 阪 に指件 長駅 さは 近定と だ広い便 43 3 け過指は ぎ定無指 泳 (-る席い定

宝 0 指 定 て ta す かく 近 n 古

王

席 か た < 守 てきた 夫婦 天

指

定

生

かい

指 定 をさ 1 3 側 ば か n 本蔭棒 彦

素身郎 歩すお島 勝明与寿 文勝明 П 止 住 平 い程握ってくれた手でう逢わぬ別れはうしろ振り向 心をにぶらす不況良 犬 の 決 心長 民犬の決心をにぶらず いごみ捨て を 程 す 握 のの付帯決 握っ どうあ け かは 時 た ないままに持つないままに持つ 元てる決心に一度は日 と男 尊 が未 いかが 1 12 練 は 1 いの 況 ものにさいる曲り 心 0 裏 母 付きかね く締 だけ靴 かず 靴め れ角 1 12

多々子 んきり をうないをつけ それかられ 明逢 を付 男 H 3 * ぎ寛容をさかぬ男の がす か決 0) ら心 美 て女は 役 学嘘をさ 点る VD に白 を背 < 0 香にのせる 育負わされ 橋渡る 歌切らぬ 歌切らぬ 間が降る の雨が降る りかい は 質 の 間が降る せら H 意 Va す 書幕れ 直 す 0) 3 3 裏 1 3 枯ガ正悟玉三梢エ坊郎恵和 代仕男 婦美子 軒太楼 与明静晓木道武ひ綾四正久笑 岩水子明魚子水で珠郎敏於風 一山 朗 風

集

決

心

決

i

路 決

il

決

流

中 村 ゆ きを 選

口孫閉鎖 拾に っ子 た流行 行行 語 語 3 玉三利

孫真流

ら先の

のに、子校

か っ感

なる流

恵代義

7のビタミンロッ余る平和に流りもりのよう

流

ロル

ツク

E

売

和の

行る娘

う

娘

流

行

着

よう

K

婚

増えてくる

赤木 規不風亦木和子

投句

先

< 3

流あ 行り

退産立金決決 む候魚心心 をしようと 決補ゆがが のら 心 崩 つい WD 6 n いて女はもないの男の顔がなり、 たり もう泣 ぶでく ラックス に なせ 唄割 か 3 か r) 3 達みえ住 型 住 学校のコータえ 流行を世郎 立ち止るが流行を追う 流行が簞笥の流行が似合わなが フ流流流流立流学流八三年 を年 かい おしんおし < 部 流 裏 n 品 表側 かんで暮 行 0) 服 行 追摇 n われ模風れ る 索 3 ゆ茂雄か雅午津 う一する風郎子 流歲寝流古 行甲卷行代 きに 12 合 b 遠 B b 無 1 流 なくい流 日 畑 行 あ打 妻 行 りつ と母 00 0 知る入院はでいる 設 い計 線図 森脇和子 与呂志 珠

3

好き他

流

行

明

古

增

壁に見る

蕗の心折 L 首は た を 変 洗ら過 つぬ さ決心しな家裁の堅から前進す か たい 3 さ啖椅決 れ呵子心 寿秀

あ石こ決挫 やの 明る 決 心 遮 断 機 促 n 多賀子 WD ずう也 ネカテス ファ

27

3

ンの

感

覚違う京阪

神

本蔭棒

を娘

を

尻目

12

花

節

幸 星

流

行

を

に唸る浪

過去は語り

ションを着る日の鼻が高くなるへ 女 心 が う ず き 出 すに似合わなくても似合っても

合わなくても

底

から掘り 1

され

どんたく

1

流

行

あ

3

5

地

2

h

to

新

流流流墓流

行行行石行

先 もい

端

がの

人会場に居

誌へてと

か移一聞

らり出住がされたな持

む 3

可虹た宗住汀し光

素 可 虹 射郎 住 汀

老

風郎

笑

似合っ

シに

後

1

は 変 女 0 ず 業 行 を 乏 神 掘 n) 返 40 す 3 文 雄 子 17

> タイ 風の

が又

流

行の

な

n

悟不

流

てから留守

勝ちになる

邪

用

心

深

0

かい

秀

7

流

行

ガ貰い

優

10 は とう に 7 10 る 花 時 計 重

1

縁 0

な

h

母

髪

流

ŧ たにぶら # る 0 寝 息

流行をは流行を追している。 流行を関 行行行行 ののををは の尖端だと言 ヘカート 後からいつもつ. 近えばサラ金追はけばやっぱり!!! 人で 歩きつづけ 切った 切 たり 着 の 束 ねい せて 0 せて病 6) 靴 Vi ば 7 かか したり 鳴る 行け

む

3 女

枯さま明道妻ひ悟 梢美津水子子で郎

超 定える 気 持 11 持 0 7 10 3 重

人

0 反 話 逆 1= L 野 な 良 かい 6 0 染 手 め を 6 休 12 do 3 洛 泰 酔 子

行 行 を 女 2 う L 0 腿 7 眺 80 WD ききを

夜 市 Ш 柳 募 集

八回 時 橘 高 風 選

第

T 593 月31

市 内天笑方 堀上緑 町一 堺 九 柳 会

不步数室

題 — 燃える —

田恵二朗

(不道徳をあざ笑うように野火走る (親が来て子供の喧嘩に灯油かけ 野火走る道徳心を捨てた罰 (葦焼けば春のいぶきがもえ上る (増田嬢異国で燃える意地を見せ (出番待つ力士だんだん燃えてくる 子の喧嘩親が入って余計燃え 章焼きの燃える炎が春を呼ぶ 護摩の火に仏の姿燃え映り 燃えあがる護摩の火に仏の姿 自負心を燃え上らせる夜学の灯 夜学の灯自負心もえにもえさせる 燃えている心は見せず涼しい目 女子マラソン走る異国にもえる意地 ボーナス日燃える女房に啞を決め 夜学の灯に燃えた自負を持ちつづけ 燃えつくす老いが笑顔を絶やさない もえるもの持つ人の目のおだやかに 出番待ち燃える力士の口の線 高 ひろ子 さと美 [11] īi 田田 (もえ残る大山のもみじ雪が呑み 京の秋もみじで山がもえるよう (もえている掛布へ風がそっぽ向き (応援へこたえる眸もえている (長かった一生はかなくもえつきる (秋雨がもえろもえろとけしかける (若人の血汐が聖火となって燃え もえてる二人へ水など差すまいぞ もえている掛布に風は味方せず 青春をもえず稼いだ明治の人 燃え残る火種に無情な雪が散る チロチロと燃える火種へ雪化粧 もえさかる戦火に飢の涙雨 応援をされてもえてる瞳で応え 肩書を捨て脱サラへもえはじめ もえていた過去に未練を残すまい 秋雨がもえる私に言い聞かす もえさせて涙抱かせた渡り鳥 大山のもえた紅葉を雪が消し もえている恋へ遮断機降すまい (挑む目が負けるものかと燃えている) 負けてたまるか挑んでる目がランラン (もみじ燃え街の詩人の心染め 詩情いまもえるもみじに染められる 祥月の夫と語ろう燃えた日を 燃えつきる一生長くも短かくも 緋に赤に思いそれぞれ燃ゆ紅葉 若人の血が燃えさかる聖火台 八十の手習い残り火もえさかる 春 久子 サツ子 同 [1] [II] n 子 柱 枝 燃えかすの中から五十円助けだし わが青春花火のように燃えて散り) 備前焼もえる炎が艶創る |闘志ばかりもえて足腰ままならず) (腹割って見せたいほどに血が燃える) 「京の山もみじが燃えて秋作る」 口紅を真赤に女もえてます 燃えかすの中から捨う五十円 青春は花火ともえてパッと散り 火ともえる心おさえて愛ゆずり 備前焼燃える炎に色と艶 ペダル踏む東の空が燃えてくる 足腰がままならぬのに闘志もえ 胸裂いて見せたや紅くもえる血を 昭 勝 志 同 [1]

美

燃えつくす女の業か曼珠沙華 先輩について行きたい心燃え 選手よりファンの方が燃え盛り もう一度燃えて見せよう髪を染め もえつきた女ごころに残る傷 燃えるもの帛紗捌きにそっと秘め (余命わずかもみじ必死に燃えている) 燃えつきて家裁の門でさようなら (親身なアドバイスへファイト燃え上る) 燃えた日は返らず遠い物語 がむしゃらに燃えた初心の勇み足 いまに見ろ雑魚にも燃える意地がある まだもえることが出来ると髪を染め お帛紗を捌き静かに燃えている 曼珠沙華ほどには燃えぬ片思い まだ燃える血汐がじっとしていない 散るまでの命を必死にもみじ燃え 燃えるネタ無くなったわと離婚沙汰 久し振り燃えて一と言喋り過ぎ 燃えつきた過去いさぎよく焼き捨てる 燃え上るファイトに親身のアドバイス 保 燃えるもの失ってからの妥協癖 趣味の火を燃やそう残り火かきたてる) 残り火をかき立て燃やし趣味にかけ もえ上る想い押える日の孤独 職ひいて趣味と取組むあすへもえ 職引いて明日にもえる趣味に生き ゲート通すその目に燃える色を見せ 燃えた過去は遠い遠い物語 軒太楼 柳五郎 Ш みつる 司 īī 司 īi 子 水

> 秋の風北の方からもえて来る 三八銃持って青春もえ損ね 翔んでます夜も燃えます火食い鳥 火遊びで燃やす気のないとこが焦げ 受験期の開講セミナー燃えたぎる 帆船へ燃える男のロマンあり 燃えた日の日記へ挟む楓の葉 燃える血が土俵を狭いものにする 枯野にもまだ燃えるもの抱き続け あきらめたつもり瞳が燃えてくる 老いてなお燃える何かを持っている 燃えた日もあった青春の一ページ 燃え上る愛がドラマを描きたがる ケーブルの窓一ぱいにもえる秋 燃えている上司を部下は煙たがる 手応えがあって燃えたつ選挙戦 茜雲燃えて詩情を散りばめる ボクシング燃えたつ拳握りしめ 柳右子 武水 忠広 ち. よ よ志子 兼次郎 同 同 [ii] 同 同 同 同 [ii]

III 柳塔社常任理事会(12月1日)

天笑・凡九郎・敏・笛生・史好 紫香・潮花・太茂津・鬼遊・与呂志・重人・ 出席者=栞・薫風・形水・水客・柳宏子

議題並に報告事項

★鳥取県川柳作家協会会長河村日満氏死去に 日の告別式には栞主幹、薫風、鬼遊、 ★村上春巳氏(奈良県)が11月14日死去、16 お別れをした。(笛生氏より報告

> 毛糸コロコローと目一と目へ指もえる 燃えつきて悔いなく逝った紅椿 手鏡の裏でひたすら愛燃やす ライバルの賞へじっくり燃えてくる 因縁の巨人相手で獅子燃える 燃えてるな漲る力筆先に ほどほどに燃えて狡さも知っている 解散と聞いて与野党ともに燃え 燃え上った恨みの蜂はたじろがず 紀久子 $[\overline{n}]$ [ii]

恵二朗短信

た。ご支援の温さへ心から感謝しております。 この欄をお借りしてお礼申し上げます。 拙著『川柳談話室』がすっかり売切れまし

題―溢れる―1月20日締切(3月号発表 岡山県倉敷市下津井一一九一三四 本田恵二朗

伴い、新会長に小林由多香氏が就任された。

(薫風氏より報告)

に決まる 選者として出席、薫風氏が柳話をされること 8日)に本社から栞・紫香・鬼遊・雀踊子が ★むらくも川柳会35周年記念川柳大会 (4月

★田中正坊氏(豊中市)の編集部入り承諾 ★川柳塔還曆記念句集の見積りを天笑氏より 、別稿の如く決定

■1月の常任理事会は休会です。

柳 界 展 望 **\Q** 0 0

また逢あう

耕花

妻と

あったら

▽お便り△

■第14回唐津市文化実行委

化会館にて開催され市民に 月25日より27日まで唐津文 大好評のうちに終りました。 員会主催の川柳展示会が11 新岡回天子)

が開催され柳人多数参加。 れ11月20日表彰受賞祝賀会 事長野文庫氏(今治)が十 顕著な功績により川柳塔参 ■地域文化の振興に尽力し 一月文部大臣表彰を受けら ませんが、寒い冬になりそ

第2回川柳没句供養大会 (越智一水)

うです。きゃらぼくの忘年

られます。

(小西富士子)

重味も価値もあり尊く感じ

が12月11日主催・国鉄ふう 笹岡公会堂の庭に建

参加、 川柳作家協会により鳥取駅 もん川柳会、後援・鳥取県 にて開催、 前鳥取市共済会館「白砂荘」 森田布堂氏の読経に 県内外より多数

ます。 より盛り上がりのある大会 だ積るというほどではあり ■雪が降り出しました。ま と建碑を終りほっとして居 でした。 ■皆々様の御祝福にてやっ (両川洋々) (土居耕花)

迎えていい句会になりまし 会に三鈷さんや雄々さんを

ままになりません。 だけは進みますが、 ■今春私も八十四歳。年齢 滝の道 (八木千代)

次の世が

つ句碑と

ています。 を持ち、開業したいと思っ 験に合格、近日中に事務所 っと社会保険労務士国家試 ■挑戦して五回目64歳でや (傍島静馬

ます。 はり生命ある間の句集には えられる事が多い中にもや されて」を読み、色々と教 きました機会でもあります 御支援のほどお願いいたし ので何かの折にはよろしく すので小生同人にさせて頂 ■尼緑之助様の句集「生か ■近江八幡吟行時の女性の 人が勉強を始めたようで 合格へ内助の功よ有難う (吐田公一) (大江秋月)

加

加

両

うみなり川

神さまにやっぱり逢えた 作句は

土居耕花氏

北 大 野 塚 天 鳥取市相生町三丁目二〇四 1 生. 小 中 林 森

葉士人

由多香

藤 藤 田 III 雄 貞 洋 熊 1 Ш 生 17 原 H 有 ± 肥 中 田 \mathbb{H} 希満 富美湖 とし江 芳 泉 子

本 静 生 ほか会員 īi

岸

岸

本

無

1

森

H

華

7.

80

森

りぜひたのみます。 さいと初枝女史から連絡あ ち出すため、ぜひ御参加下 に薫風氏選で清新の気を打

■今春3月柳宴30周年大会

材を詠んだもの。 句として家庭内の身近な顕 け継ぎ、わが娘にも伝える しるべ」は、母親の心を受 月19日倉敷市の小野克枝さ んが川柳部門で受賞された。 ■岡山県文学選奨受賞を11 小野克枝さんの川柳「道

> るべ よく笑う母に貰った道し

にらめっこ 白く干す引っ張って干す どうしても勝てない母の

重ねています。新春からは やさしさがこめられている。 など根底に母の思いやりと ■川柳塔へも不義理ばかり 女の手 (朝日新聞記事より)

雨洩りの部屋にもあった 十一月三日に次女の裕美も 結婚致しまして夫婦二人き

はげましだと思います。 りの生活です。岡山県文学 選奨も「ガンバレ」と言う

★訂正とお詫び

△11月号柳界展望66頁同人

上一米を二米と訂正させて 頂きます。 消息の東野大八氏被災記事 信濃川を木曽川に、床

兼題・「若い」「楽しい」

投句できるよう頑張ります。 賞」不器用な男に貸した膝 りでした。深くお詫び致し 前山美恵子(藤井寺)の誤 枕―堀江光子とありますが

■南大阪川柳会 ▽句会案内△

時・1月19日午後6時

大洲市

*

沢

暁

明

新

事

紹

介

所·寺田町高松会館 一十」「練習 兼題・「来訪」「利口」「ル

新

同

人紹

介

+

居

花

■菜の花句会

所·西鄉会館(八尾神社境 兼題・「日銭」「基地」「用 時・1月10日火午後6時

文衛・薫風・栞推薦

意」「片手間 ■駒つなぎ句会

所·高松会館 時・1月23日月午後6時 兼題・「進歩」「鍋」「凍る

所・市立社会教育センター 時・1月28日出午後6時 ■川柳東大阪句会

所・南海会館ビル南海電鉄 時・1月19日休午後6時 本社地下食堂 ■南海電鉄川柳句会 「声明」「酔心地」

△12月号「水煙抄・秀句鑑

兼題・「人出」「寒」「えと」 所·西宫中央公民館 時・1月9日月午後 ■西宮北口川柳句会 球場前踏切りを渡ってすぐ 神戸線西宮北口駅下車西宮 兼題・「上品」「テレビ」 一十日戏」「自由吟」

本 十二月句会

会場 なにわ会館 後 六時

と結ばれた。 暖房の入った会場はシャツ姿でも快適だ。 倫理選挙ではないが、川柳界も倫理を大切に なく慌しい。ここ数日あたたかい日が続き 火線となった。盗作問題をとりあげ、年末の 58年棹尾のおはなしは栞主幹。 "自分が導 十二月に入ると街のたたずまいは、どこと

初出席は春城武庫坊氏 今月の月間賞は河内月子さんが獲得 (尼崎市)。

進行・柳宏子・天笑 一射月芳・健司 与呂志・重人

悦郎・白兎・狸村・重人・律子・恵美子・み 洋敏・三男・川狂子・武庫坊・年代・英子・ 寿馬・凡九郎・太茂津・滋雀・兼治郎・紫香 《女・水客・潮花・三十四・トメ子・柳影・ 出席者―与呂志・寿美・静歩・只士・白水

妻黙るてこより強くなってくる

敏・英比古・吸江・雀踊子・萬楽・天笑・月 子・智子・弘生・一二三・岳人・栞・小路 規不風・鬼遊・度・風童・春蘭・健司・頂留 泰子・美智子・鎮彦・射月芳・楓楽・景子・ 萬的・春江・はつ絵・いわゑ・たつお・幸生 子・勝晴・史好・山久・柳伸・浩一郎・寿子 つ子・幸・喜風・勝美・カズエ・冬葉・柳宏

高 橋 白 兎

島の子にてこの原理はすぐわかる てこなどはなくても動く父の椅子 シーソーのてこも感じた春の音 毎朝をやんわり起こす妻のてこ その裏をめくればテコが置いてある てこでもうごかぬ商談決めてやる 機械化ヘテコと人夫と欠伸する 古釘を抜くのに大きなてこがいる 休日の重たい尻にてこが要り てこ入れに大物の名を借りてくる テコ入れをされて苦しさ倍になり 下心あっててこ入れしてるらし 札束がすんなりテコのかわりする てこにするほどの言葉が見あたらぬ てこ入れに噂の風が戸を叩く 美人秘書買収というテコもある てこよりも情に弱い柳の木 一本のてこ独走をくいとめる みつ子 美智子 凡九郎 柳宏子 三十四 柳宏子 与呂志 健 笑 楽 的

58年月間賞杯永久保持者 正本水客氏に決る

が規定により58年永久保持者と決りまし 7月=水客、 4月=勝、5月=雀踊子、 58年本社句会月間賞は 位獲得数の最も多い(5回)正本水客氏 10月—光代、 1月—楓楽、 12名各1回ずつ同点ですが、兼席題天 2月=綾珠、 8月=英比古、 11月—智子、 12月||月子 3月=柳宏子 6月=史好、 9月 = 泰子

てこ入れの話と知らぬ黒田節 お喋りな女をてこ入れにはしない 輪の外でテコのチャンスを待っている てこ入れをいつでも思うりんごの樹 てこのあるしっぺ返しを考える てこ入れの右も左も大切に どじな男がてこでも動かない師走 途中下車転轍器の音冷えてくる てこの力をずるい男が借りにくる 北風にてこずる鬼が聞く童話 あの男動かすテコを借したろか てこ入れた船出はいつも向い風 てこ入れてやろうと思う父の貨車 徹の意地はてこにも負けてない 枚の風にてこずる母の櫛

> 太茂津 恵美子

美智子

恵美子 英比古 与呂志

記憶ではてこで動いた転轍器 妻という何とやさしく強いてこ てこ入れをしても見込みのない 男

> 白 英比古

兎

大臣はケチだと思う老夫婦

ケチだからケチと仲良くなどしな

規不風

Ш

森中 恵美子

浪費家とケチの夫婦へ陽が昇る けちな事言うなと相槌打っておく ケチケチと生きても同じ火葬場に 天国か地獄かケチに徹しよう 愛情をケチる男のもがり笛 ブルジョアが徹するケチは喜劇です 酒吞みはけちな飲み屋に寄りつかぬ ケチな男に貢ぎ通して路地に住み 花屋から春の顔してけちも出る ケチですと言われて耳がかゆくなる ケチな男とても冷たい風に逢う たつお 美智子 律 水 悦白 客

簡単にケチにはなれぬパンの耳 ケチが行く後から風が追いかける

変動のレールに馴染めぬ父の貨車

の中でたこ焼きよく売れる

雀踊子

ケチんぼもほっかほか飯食っている 十二月ケチな夫婦になっておく 美しいけちをいとはんから学ぶ ケチンボと浪速言葉にあるぬくみ くどくどとけちな男のけちな酒 師走の街へケチが誘いに来てくれる 今日のケチ見抜かれている箸袋 合理主義ケチとは言って下さるな ケチんぼが去んで空気が入れ替り 髭だけは何時も剃ってるケチ男 ケチだから旨い話に騙される

はつ絵 智 英比古

けちなことしてからきつい下り 嫁はんがケチになる本買うてるぞ ものすごいケチでとっても憶病で 半分に切ってパイプで吸っている 結婚をしないわたしはケチだろう 素晴らしい夢を持ってるケチになる けちに徹しけちに徹して父達者 薄情でケチで女にやさしくて ケチな女を安心して愛す 十二月ケチが悪酔いしています デートの日女に出させありがとう 佐渡おけさケチな男と海渡る 缶詰の缶まで食べる気のケチで 消しゴムは他人のを使うようにする カネ出来てケチの気持がようわかり 恵美子 英比古 浩一郎 浩一郎 規不風 天 健 萬 岳景柳 伸

兎. 楽

英比古 太茂津 白 楓

那 須 鎮 彦 選

柳宏子

雀踊子

変動をあやつる男に顔がない 変動を望まぬ母の席がある 変動期無駄でなかった廻り道 変動期女の化粧厚くなる 変動へ鬼と言われた男の死 すき焼きが急に茶漬になる変動 変動へ泰然自若野の仏 変動もするさ地球も廻ってる

兎

子伸

郎

変動の地価スーパーが建つうわさ 変動へ自重しているかたつむり 変動があろうと空は澄み渡り 太平に居て変動にも備え 変動に火種をつける核の傘 知ったかぶりで変動相場を聞いている 風あたり強い変動かもしれぬ 住所録に変動があり冬の音 変動の読みが外れたコップ酒 変動を孕らむ夫婦の冬が来る 緑側で変動をみる庭の四季 売りもせぬ株の変動気を使い 変動について行けない父の椅子 地殼変動神の怒りかも知れぬ 票でサテ変動がさぐれるか へ早耳筋はもつ動き

58年本社句会全出席

黒川紫香・谷垣史好・岩本雀踊子・長谷 守柳伸・江口度 トメ子・林はつ絵・妹尾春江 若柳潮花・藤田頂留子・稲葉冬葉・小林 川春蘭・正本水客・吉川寿美・板尾岳人 橘高薫風・内海幸生・西尾栞・玉置重人 治郎・桑原喜風・山本規不風・高杉鬼遊 宮園射月芳・飯田悦郎・北勝美・中西兼 楓楽・神谷凡九郎・西田柳宏子・津 ·松原寿子

(30名)

赤木和

たつお

佑

射月芳 凡九郎 たつお 太茂津

幸せが地殼変動する出会い 変動に動ぜぬ男の太い首 変動の波が大人にさせて行く 変動は下ってばかり端株持つ 変動の物価に疲れている財 変動も家中稼ぎ恙なし ちいさな変動を知っているのは吊 為替変動俺の金歯の値が下がる 柿 郎

変動に気付かず笛を吹いている 棒グラフ男ノルマに流される へうとい男の下駄の音 浩一郎 頂留子

変動の裁きに遠い作業服 関白の地位も変動相場制 変動 へ仁王の足に憧れる へすぐに傾く父の舟 変動が来ても崩れぬ二重橋

射月芳

中 JII 滋 雀 選

呉竹で諸行無常を知る写経 呼吸していそう師の筆になる墨絵赤木和

釣上げた自慢魚拓の墨を摺る

墨を引く大工の腕は信じたい 顔中に墨を塗られるカモになり 片減りのくせそのままに亡父の思 せめてもの墨の色なとほめておき 履歴書の墨のくろさを信じよう 神棚で墨とダルマが待っている 敏 秋 絵馬堂に母の祈りの墨の色

白墨だらけの先生の手は温かった

こってりと書いたまねきの墨のいろ

すこしずつ墨絵になってゆく夫婦

禁物は承知でのぞく娘の日記 勝負師に涙は見せぬ妻の意地 禁物の話誰もが知りたがり 白い手袋に禁物の派閥名 幸せはまだ余白あり墨と筆 ゆっくりゆっくり遺言の墨をすり 寿と書く墨の色あたためる 必勝を期して片目に墨を入れ 墨の香も新た書初め筆弾む 肩の荷が下りた受書の墨を磨る 大観の墨絵の富士へ陽が昇る 端渓の硯と墨が知っている

墨すってぐさり刺す字を考える おめでたい言葉を溜めた墨のいろ 墨を選るたのしみもある奈良のまち 苛立ちを押さえる墨を磨っている うす墨の悲しさに遭う冬の果て 愛はうたかた墨の深さに闇がある

美しい墨絵で塔がたそがれる 溥墨をする悲しみの筆の先 万葉の道は墨絵に昏れ残 短冊の白さへ匂う墨の跡

悪筆でよし命名の墨を摺る 体調がよい墨色になっている 署名する一揆の墨をすっている 朱の墨も鮮やか寿の賀状 墨をする明日のことは気にしな 悲しみの墨は淡く淡くする Vi

墨少し濃くして焦りから逃げる 墨を摺る落葉の音を聞きながら ふつふつとたぎるものあり墨をする みつ子 智 小鎮

ガン病棟禁句がたんとたんとある

英比古

吸 江女女

太茂津

発行所

太茂津 英比古

美智子 太茂津 いわる 智 7

振替口座

松江

六一四七一八

(〇八五三) 二二-

四六九八

ずも川柳

会

添削の朱墨に深い恩がしむ

美智子

司

たつお

山に馴れ山の怖さをバカにする 泥棒の手帳には油断禁物と 禅寺に禁物でない般若湯 禁物のぼやき癖出る酒の量 禁物の言葉のとげを抜く弔辞 いみ嫌う言葉気にする迷い風 阿 萬 萬 的

どんたく 伸

たつお

尼緑 之助川 『生かされて』 柳句文集

■見返し装禎 西尾 尼 栞 祐子 ■跋 津川紫吻

□定価二、○○○円(送料二五○円) □B6判上製本 二月から送料を負担して頂きます。 三三四頁

出雲市松寄下町六一九 社

雀

92

禁物な一線がある北の空 禁物を犯し椿は地に落ちる 禁物が薄味になる回復期 禁物にとり囲まれた闘病記 タブーとは知りつつ挑む天邪鬼 病名はタブーで言 涙は禁物ライバルの眼が光り 禁物のバラへちょっかい出したがり 影武者は禁物に耐え冬が棲む 泣かせると禁物妻が強くなる 風に耐え火に耐え口を閉じている 冬の女に禁物が多すぎる 今ここで責めてはならぬ反抗期 禁物のグラスへ堕ちてみるゆとり 病人にゼニの話は聞かすまじ また医者に叱られそうな物を喰べ 禁物を知らぬ少女の好奇心 約束は禁物小指が疼くだけ 禁物は女と知っているほくる 寝不足は禁物ですと鏡言う てんかんをおこしたことは伏せておく たわ言を造花へ向けるのはよそう 禁物の愛に殉じた埴輪の瞳 ぬるま湯は禁物ネジが弛みだす 涙もろい涙に溺れてはならめ 禁物のことばは姉がみな拾う 口出しは無用と本音伏せている 箸箱のタブー冒さぬ夫婦ばし 常識とやらで禁物押えられ 葉見失う 浩一郎 美智子 柳宏子 恵美子 みつ子 与呂志 雀踊子 恵美子 柳宏子 英比古 雀踊子 幸

> 油断禁物マスコミの眼が光ってる 病人の抜毛だまっていてやろう

)1| 紫

萬三十四

手術の日人生の幕かとも思う 幕張ると議員の花輪すぐにくる

カ春悦只 エ江郎士

香

父の顔幕の向うに消えた日よ 幕降りて美男に御座す馬の足 呱々の声を聞く父の重荷の幕を引く 乗り出してその一幕をまだ喋 赤木和

あどけない手も添えている句碑除幕 渡り鳥とってもきれいに幕を引く 花道の途中で幕が降りてくる 勝ちっ放しの幕内力士の肌のつや 煙幕で先手を打っている無心 木枯しに菊人形の幕たたむ

幕つなぐ役へ男を賭けてみる 幕内にあと一番の星がいる もう度胸決めるしかない幕があく 幕あいに見捨てた人と逢うロビー 武庫坊

紅白の幕でマンション売れ残り 感慨にふける小さな除幕式 どの案も金がそっぽを向いて幕

村芝居幕の下から足が見え 脇役にカーテンコールはないけれど サムライの潮時がある幕をひく 顔見世の幕間女の彩となる

幕切れは今年も「第九」聴きに行く 幔幕のなかは同志の吐く気炎 恙なく今日の幕引く仕舞風呂 モンパリー青春の幕甦えり 恵美子 太茂津 47

黒幕が逝って人形喋り出す いい芝居でしたと幕が下りてから

数え唄終ってからの幕があく 見得切っているのに幕が閉まらない 幕が開くのを知っている福寿草 幕あがり黒子は石になっている 幕の中こそこそ動く音がする 雑兵のくらしへ下ろす幕がない 幕引いて男に淋しさだけ残る 幕下りて急にビールがほしくなり 出る幕がないので自信持て余す 鯨幕ハタハタ嫁の荷がとどく 終章は自作の劇で幕にする 出る幕でないと自分に言い聞かせ 吉日の幕はめでたい色になる

童

・ 楓楽)

暗

龍、 失名)は中村優氏の句でした。 12月号70頁「さいころを振ると絵になる昇 「香水を変えて童話を追う女」

93



作品は雅号も含めて20字まで。締切毎月末。必ず原稿用紙使用 必ず原稿用紙使用のこと。

整理・板尾岳人

リーで習った嫁と溝 倉吉川柳会 が出来 渡辺

自販機は留守の稼ぎをまかせられ

親を見て子が習う身を省みる 死角から大安吉日みて通る 習ったがこぼれるように忘れ去り 留守宅へお留守ですかと怒鳴ってる 習うより摑めと板前そっ気なし ゲートボール習って古稀の血を燃やし 大安があって賑わう神もある へ下見に行った留守と知り しづ江々 かつみ

鉢の底に鍵をあずけて留守にする 横顔ばかりみせ主役になれぬ人 大物に成ると居留守を使い分け 脱穀機うなって村はみんな留守 いらぬ事習わせぬこと先ず覚え とめ子 千弘満瑞柳秋秋寿 子秋朗春枝風女 朗

習わずに子豚乳房を間違えず

大安の縁起気にせぬ古稀の坂 留守ひとり壁に呟く設計図 お師匠を投げ謝恩の相撲界

信じてた人の横顔見て哀し

横顔のここで整形金が切れ 大安に事を始める迷信家 大安を父は虚しく 前の小僧習わずして英語 前と本音上司から習う 酒をく

明日の網繕う漁港の昼下り 空港へ降りたとたんに記者囲み エトランゼ港に雨の降る夕べ 下りる鞄僕が持つうちが持つ YFC柳壇

陽の目見る句も見ない句も私の子 タラップを下りる思い思いの足の音 エアポートの文字が浮いてる春の闇 川柳塔からつ 浜本 美報 絹 栞

海荒れて港にロマンス又生まれ 通り雨港の町に咲いた恋

翠房 たず子

情熱を購って取引認可する 三度四度乾杯をする同期会 茶筅刷く古式のままの人となり スランプを知らぬ役所の鳩時計 決心を阻む女房の牽制球 但書つけて田舎の席を呉れ

久仁於

敏

ストレスをのんで中堅やせている 歯が抜けて言葉も洩れて翔べないな E 渓水報 金 義愛 ち 良

III

研修旅行女の肌も嗅いでくる

柳しんぐう

他人の句に勉強不足思い知る 曳き山の絵から囃子の音が響き

転校生男をなげく娘の未熟

多広

中堅の留り場になる止り木で 中堅の口は悲鳴で満ちている

> 親は子に愛の胡椒を振りかける 夕暮れの渚に素足いたわられ さざんかの宿止り木に十時聞き 掌にもったいなくも酒を受け 奇麗ごとばかり新婦は腹がへり 天平の温みを抱いた古瓦

菩 独 洋

何 步

三姉妹それぞれ母の水加減

々に母に似てくる三姉妹

中堅を支える基盤が出来て 中堅の采配見事守りたてる

いる

翠記報 たき子 よし津 忍

判決四年七年がかりで言い 宿下駄へ脱線さそう旅の風 脱線へ妻の牽制くるわな 脱線の言い訳に買う上にぎり 脱線のアリバイ悪友引きつける 無罪判決草葉の陰で聞いて 兀総理有罪判決ポーズ消え 出し値 いる

有罪へ勝手な事を言う他人 三審の判決までは白と言う

脚色をされて人生風にのる 天地無窮滔々と落つ滝の音 紛争の火種を女抱いている 妥協せぬ男に辛い過去がある ひざ枕男冥利にしばし借り 来る人が来て乾杯の音頭とる 川柳化粧櫓 植村客遊子報

多々子

たずらの出来る子供に育てあげ 昭さとる 礎秋紅白葉 月月李香詩山鷹 石

まさ子 武 三千代 登志代 登紀夫 道 正公 富 郎雄 輪

脱線はしても阿弥陀の掌の中で

一姉妹心の中で競い合い

一姉妹男まさりが

一人いる

一姉妹同時に縁談持ち込まれ

天高く私のウエスト太くなり 霜の朝 嵯峨紅葉十三参りを懐しむ 居酒屋を出れば叱ってくれる星 香水の匂いが付いている懐紙 振り出しに戻って老後の歩を合す ウインクを意識して来た厚化粧 群雀山里捨てて街に住む ギャル二人手話でとっても楽しそう 病人へ朝のプランを流しとく 年金が入りもひとつ齢をとり 願い石にまるき影あり車折 家元も茶筅捧げた芸能社 万葉を偲んで歩いている嵯峨野 風邪に臥し些細なことで腹が立ち 否みもせず喫いもせず食べたはる 活気性もつかってると肌で知 宮趾のロマンを覆う霜光る 朝霜の窓辺に妻は米をトギ 野の仏化粧に見せる霜を載 木洩れ陽に白い蝶ひとつ鹿王院 せかされて未練残して鹿王院 木守り柿一つ残した嵯峨のみち 扁額に歴史の重み鹿王院 車折牛車のきしむ音を聞 渡月橋今日ルンルンの四十人 いえが背なから抜ける霜の道 京都塔の会 え仮面をつけて霜の道 からは汽車の走らぬ駅に霜 に霜柱踏む白い足袋 未完の詩を書き続け 杜的報 サワ子 い千和美 む子友穂 花代子

武庫 加 自渓子 かすみ章 萬幽 きよ子 君 静 子郎江代 人間国宝坐っただけで芸になる ロボットの芸は区切りをつけてする ドラマいくつ芸能神社の石畳 芸術の名で許される顔をする 寝転べばピカソの芸がわかりかけ 割勘で誘えば逃げるいやな奴 割勘で結婚までのおつき合い 割勘で顔をきかせた後のつけ 割勘に序列つけたい飲みっぷ ミングの妻に自作の曲 の女損せぬ程に飲 の友と気安く交す酒

二次会でおだてに乗ってる隠し芸 芸のない男を立てて京女 間をはずす寛美の見せる芸の冴え 芸達者何をやっても賞をとる 清純を捨ててから出る芸の幅 芸一筋別れた子には触れずお 孫の芸みんな囲んで秋の夜 魅せられて芸の樹海へ消えた鬼 おおらかに笑うてみせる芸達者

みつ栄子

伊三郎

美求冬笑満杜笛良飛 代 子芽子女乃的珠征鳥 与呂志 あき子 BB 花 貞

丸木橋渡って蝶々ついてくる 歩道橋せかせか渡る冬の風 渡し舟橋のおかげで払い箱

渡り初め晴のモーニングは杖をつ 生真面目を武器に世間の隅渡る 永

輝み雷

田畑まで人手: 枕木の霜と到ぎ

畑まで人手に渡る子の学費

着列車待つ

旅の秋湖国ゆたかに風渡る

向う岸に赤線があった渡し舟

菊野報 春紫春水 草弘竹千千登広 江香 風生萌息鶴舟風 子客

出があり

2

鍋物がそろそろ恋しい秋の夜 なべの底をみがき女が枯れてゆく 秋の夜は二人に甘い虫しぐれ 残飯もない割勘の後始末 割勘に遠慮してない大ジョッ 人が来て話が長い秋の夜 毛糸玉ころころ転ぶ秋の夜 こおろぎや寡婦にセンチな秋の夜 菜の花句会 三松菊朱嘉 風野坊代果風泉 枝

割勘という安心についてくる

世話焼きの風が運んできた噂

黒 大阪府知事 草

老いぼけ

ほどほどにぼけぬ老人嫌われる すんなりとぼけぬ老人世にすねる 老いぼけの筈がますます冴えてくる

亭王とはかかわりもなき身だしなみ 齢三つ若くいう癖いまもなお 文も稼がず優雅な旅が好き

自画像

矩を越えるおそれないのにままならず 碁会所で自信つけたりなくしたり 日記ふと三日書いてはまた忘れ

> 銭湯で又良い下駄とはき違え 吹きだまり今日は変えてる風の向き 祭日の国旗に少し風がいり とげのある言葉で一人だけ帰り 裏切りの風は下から吹いてくる どこかが違うあんた狂っていませんか 手作りの花札が舞う捕虜幕舎 爽やかな風に告白してしまう またしても秋刀魚の煙風に乗り 宝石の方へ傾く女独楽 出囃子に楽屋と違う顔 満開のばらにとげ持つ人嫌 ゲのある言葉に耐えた坐りダコ をの t

風向きが変わり四ッ辻だとわかり 乗り換えの駅で次発にしたうどん とげ抜けぬまんまとび乗る発車べ 宝石はきらいと妻が言うてくれ 風の日は風に詩あり寂光院 宝石を知らずに生きた母の指 焼鳥や素通りさせぬ風が吹く 違和感をさとらせぬままつわの花 噂から噂が走る向い風 ウインドのダイヤ悲しい眼とで合う 自惚れて背の違いに気付かな 12

旅のロマン呼んでるような露の宿 梅が散りうぐいす山へ去りました 小砂 白汀報 朝

里芋の葉っぱの露は真珠だね

わかあゆ川柳会

鬼

いもの葉におく露は夏の色

気休めも迂闊に言えぬ災害地 トラブルの渦にまかれた民間機

まだ母に内緒で逢いに行く化粧 もう一度逢いたい人の手のぬくみ 満月とゆっくり逢うている芒 ダムの底村が沈んでいる青さ

底をつく日の妻には艶がない

雀踊子 武庫坊 伸 露の萩月の泪のおきどころ 露ポトリ松露となりて安らぎぬ 自画自賛露まろやかに生きてい 境界のトラブル一鍬だけ動き 萩の露風を頼りて粧いぬ 気休めに叩いたドラムに養われ 気休めのはずの注射が土用越し トラブルも吞んで三代屋根の下 気休めのお茶一服のありがたさ

恵美子

ヒデ子

低成長主婦専業で切り抜ける 主婦三日病んで家族のマーチ聞く 主婦の座を見切り家裁の門叩く 川柳塔まつえ

シマ子 柳宏子

隣村かしこい主婦が多すぎる 事あれば主婦の力をかき集め 暇がある主婦に悪魔の笛が呼ぶ

司

頂留子 みつる 射月芳 はじき出すコンピューターで底を読む 寡婦一人孤独の底で米を研ぐ 変化球おぼえて主婦が位置につく 主婦の座がぐらつき始めた三年目

初対面心の底が見えはじめ 痴れ果てた時間が残る壜の底 貧しさがおひつの底にこびりつき みやげ物上げ底をして派手に見せ 胸底をえぐる悲しい北の風

叮紅報 多賀子 与根一 孤呂二 登満正正 美 也江江朗 きみえ 昭 白は歳清鈴美 万美栄泉江栄 春 雄 童雄和枝児 17

- 96

悪友と道草をして忘れ物 血圧が今日の私を支配する 逢う度に一線だんだんぼけて来る 風に逢い風に送られ独り旅 最終の電車で逢いに行く 君に逢えた日から埋 圧が飛び出しそうな震度四 女と逢う めてゆ 自記 叮 みどり 芳壮鶴 枝樹 紅

一的くらしが狭い部屋にする 柳ささやま 河原みのる報 II]

追い剝ぎが出た峠だとあとで聞き 峠道挫折は出来ぬ朝がある 楢山がチラチラ見えて来る峠 峠まで行きつくまでの息が切れ 越えてゆく峠おしんにまだ続き 自我一つ矯めてみんなの輪に入り 解決は一つあんたの我が憎い 議論湧き満座一つにケリがつき 狭い部屋顔見りゃよしと父帰宅 (円) 貞 宗・珠也 和静 ひか平 百合子 子珠

さよならの言葉を探す卑怯者 卑怯もの僕の影まで猫背です 特集へ私のロマンふたを開け 転勤地まだ方言に馴染めない 共感が心に響く津軽三味 まじないが効いたか夫は 駒つなぎ川柳会 一直線 小路報 柳右子 頂留子 覚然坊

ちちんぷい母のまじない好きでした

富柳会(壺坂寺吟行)

藤田

泰子報

内緒ごとすこうし持ってるいい夫婦

美津枝

もつ

度立場を変えてみるゆとり

ゆとりある人の歩幅は狂わない

ライバルを卑怯と思う日の失意 味特集信濃のそばも仲間入り 負けん気が生活に響く無理をす まじないの糸が揺れてる夫婦凧 卑怯者有利な方へのりかえる 方言しかしゃべれぬつらい日 見えすいた嘘で響くのは何 17 の汗 3

反響を受け止めていた日のだるま 朗らかな嫁で方言憚らず 特集に全盛の顔よみがえる すぐ向きを変える卑怯な風見鶏 方言に昔の恋がよみがえる 風になる男を卑怯者という 特集の長寿は欲のない笑顔 赤ちゃんの大という字に明日がある 反響に驚かされた仕掛人 戻らない記憶にしとく卑怯な目 ほら貝が響いて俗塵から逃げる 重律 凡九郎 射月芳 雀踊子 規不風 風真善信 小 Ħ

明日嫁ぐ荷物へ狭く母娘寝る 落ちる程狭い掟の蟻地獄

千代子

サングラス下に卑怯な顔がある 響きあう土鈴一つをふところに 北の方言南の方言釜ヶ崎 甘んじて卑怯者にもなる大志 夏バテヘサラダの特集などいかが 美しい響きをもった母の独楽 中流です奥様特集読んでます 宅急便ほどいて方言ころげ出す 寡黙なる意見が肚にまで響く 千代三 智

柳宏子 郎 好 明

マラソンに自信をかける子を信じ

マラソンへ読み書きに無い意気を見せ マラソンが好きでひやひやさせる父

久

越

佳 句 地 10選 前月号から 木節子

選

遠くから来た石仏の艶めかし

本 友 種を播くやさしい土があるかぎり浦野和子 また今日も同じ台詞で朝を出る きれいごとばかり 十歳 し草 ろも 心 情 が を 居 は 0 3 つなぎとめてる丸い T 0 匂 が渦巻いている空地 冬には冬の 鏡にいのち深くなる え いが残 ぬ 悲 L が並ぶ指定席 る人の背な い九官 花咲か 舌 す 森脇和子 頂留子 満津子 民 幽 IE.

悲しみも筆のゆとりで詩になり 母の旅ゆとりをとった時刻表考えるゆとりが出来てから虚 ひとときのゆとりで女まりをつく 大きさに驚き見上げる石観音 絵封筒の遠い指紋をあたためる 百になり手直しをする辞世の句 毛糸玉ころころ母となる心 手毬唄遠い国から逃げて来る この服はゆとりあり過ぎ身に付 遠くから聞こえて来るのは母 ピカソの目遠いところを見ている目 汚職には遠い暮らしで無事な日 の笛 かず

郎

子砂信

勇

維久子 緒房人 代梢子子

洗濯に秋を運んできたトンボ 大時化に島を見つけた渡り鳥 冬来たるせめて心は熱くする 夕焼を凍りつかせてビルの窓 踏んで来た花道けわし舞う紅葉 冬の日に神経細き子の微熱 計算に自信があって喧嘩せず もう人が歩いたらしい雪の朝 旅人を許してくれる円い月 さりげない情にあったおとし穴 狂言の女ハンカチ利用する 安心と思えどこわい発表日 冬眠の蛙は知らず冬景色 足跡は消えても残るこの一句 火葬場で灰の軽さを知りました 許し合うこころの窓に灯がともり 夜遊びか顔も見せない寝待月 水色のハンカチはかない恋を秘め 許す気になってきびしい貌となる ゴキブリを叩く殺生ゆるされる ハンカチを膝に炒り豆むく女 おぼろげな記憶で辿る遠い罪 わが生に足跡はあり十七字 に父の下駄女世帯の守り神 、ンカチを五枚も入れている孤独 枚のせんべい二人で分ける仲 枚の舌を切られた親雀 枚の一揆の旗が風に揺れ 尼崎いくしま川柳会 一へ行く足跡は残らない 角野かず子報 中西兼治郎報

子之

いみ光 つる子子 あき子 薰 登志美 兼治郎 草の穂に触る女のやさしい目 恋いくつ数えたことのない老女 悔い残る刺の言葉の軽はずみ 倖せを生活の死角に置き忘れ さらさらと枯葉に虫もさびしくて 孫遠足朝の食事をざわつかせ 紙一枚左と書けば左向く ハンカチに名前を書いて園児です 老い先のわからぬままに毛糸編む 浮浪者が被爆手帖を持っている 物さしが違っただけの罪ゆるす 枚の自画像そっとかくし持つ の隊列乱れなし

君

笑風報 重 X

川柳大阪

清水静堕定かす 大声江駄人み 保か郁礼かずる

村

WD

な

美しい噂は途中で消えるかも 古希近く許す心を広くする 飛行機はやっぱりやめとこフルムーン 地下鉄の風もお彼岸らしくなり 朝焼けの地球へ測る今日の脚 目を細め餌づけしてやる孫の竿 住み込みの娘案じて寝ぬ夜も 霊山に恩響越えた墓碑に苔 土笛も空の青さに吸い込まれ 蓮花への下りは雨にいびられて 甘えぐせまだ直らない年の頃 山ごぼう風味豊かな飛驒の味 大阪博すらり並べた喰い倒れ 由緒ある古寺へ会釈の登山帽 の葉ずし母の在所の味がする 与呂志 三十四 雅謙笑洛釣 本族棒 三干雄 君 枝 風醉醉

美代子 美智子

傘お供変り易いは秋の空

心ない妻の笑顔へ逆らえず

あけましておめでとうございます

あすなろ川 柳 会

柴

夜の蝶寝たばこで見る昼の雨 雨傘が日傘で戻る秋の空 雨か日傘で戻る秋の空 雨か日傘で戻る秋の空 あじさいの愛は一と雨ごとに炎え雨止んで待ってたように虫の声雨合羽嫁に譲って子守唄 赤とんぼ山から秋を持ってくる見ぬふりと聞かぬふりして貝に 約束の小指信じていた不賞 金がないから別れずに済みました 雨が好き相合傘で行けるから雨の音見つつ偲ぶは難聴者 約束は手をにぎっただけやのに 天神のおみこしギャルがかっさらう 掌の温み消えぬまま別れ 握手だけ男の別れそれで良し 夕立ちが来そう家まで駈けくらべ 遠い耳干し物濡らす通り需 花の泣く雨にわたしも泣けそうで 水害を思えばうっかり雨乞いも 真夜中の雨は母さんだけが知り かぶりつくリンゴに秋の甘味ある 遠い耳夜の大雷雨見ずに済む の日は踊り人形のネジを巻く に耐えて育てる夢がある ふたり嬉しい 女は背伸びしたくなる ふりして貝になり 傘が雨をゆく 是作報 比弘天道金キ 志生平子太ミ 三柳一双民鉄承鼓た早 代 子花晄夢栄火平草み苗 一 双 民 鉄 承 鼓 た 早 た か 晄 夢 栄 火 平 草 み 苗 お みつる だるま 千代女 鉄 敏

包んでもゆかしい人柄にじみ出る 灰色の包みのいつか噴く火の粉 どん欲に大ぶろしきを持ち歩き新築祝多少はねたみも包んでる しばらくはそっとして置く思いやり 飛鳥路はしばらくさめぬ壁画熱 しばらくは夢を見ていた貝割菜 頼りない意志を買われている疲 意志持たぬ男に冬の風ばかり 爪だけが意志あるように伸びてくる あまりにも意志が強くて角が立ち 内職の灯りへ映る妻の意志 あこや貝女の見栄を包みこむ ゲンマンに幼い意志が口結ぶ ふろふき大根老母を少うしよろこばす 大根めし甘さが記憶の底にあり 心の傷はしばらく待てば癒えるだろう しばらくと顔で笑って探り合い 南大阪川柳会 鈴木 n 滋雀報 節智い楓勝 子子の楽子 頂ハ千洋智寿 妙 芙 留ル 子子里子子 美子女 いく子 藤

暴君になる夢を見る台所 社長さんに親父と呼んだ無礼講 無礼講音痴食べ食べ手をたたき 無礼講正直すぎたかなと思う 世話好きな処が美点で欠点で けち臭い或る日の男に見た美点 取り柄ない妻だが達者だけ 暴れても孫なら嬉し三ヶ日 暴れても父の両手の幅の中 暴言を悔いているなとグラス知る 暴君が無口になって来た怖さ 別居する話に見合の腹をきめ 単身赴任気ままな幕しが落ちた罠 別居して明日の夢を画き直す 別居中右と左を向いたまま 単身赴任逢う日の妻が新鮮で 無礼講人の心の裏が出る 長という人を帰して無礼講 無礼講やはり社長も男なり 養老院に入って小言のない食事 善律滋恒雀踊子 智慧 郎治 頂留子 伸 砂

肥えている女でおおらかそうに見え 手紙には手紙できっちり言うてくる 読むのではなかった娘に来た手紙 よく肥えた地へ容赦ないアスファルト 言いにくい事を手紙で書いてくる 百博千雅聖 合 子泉夢洋 Hh 泉夢洋地成

梯子酒みやげの紐がのびてくる

本のひも犯罪のカギとなる

正直なだけが美点で倉庫番 目の位置をずらすと美点見えてくる

いとこがあって別れもせずにいる

場なれした趣味が酒席に買って出る 役割がいつも廻って来る場なれ 場なれしてそろそろ初心忘れかけ

風

うっかりと誘うた女に紐がいる

プロのめし十年喰ってふてぶてし

場なれして笑顔を返すゆとり出る

オーエスケー川柳会

形水報

有頂天場なれに恐い落し穴

和やかな読書に親子夢のせて 読書するゆとり見つける老眼鏡 このムードこわしたくない酔心地 菊見酒追加の理由つけてのむ 文豪の名作老いも若返る 幸せはめがねいらずの本を読み 読書から人の幸せ教えられ 老境を生き抜く趣味の菊作り 読書から広く豊かな知恵もらう 寝れぬ夜は読書で眠気誘い出し 晩秋の小菊かわいく生けてみる 熟年層集い楽しむ読書会 菊生けて今日のお客を待つゆとり 隣にも親 回覧を持って隣で長話 楽しみと苦労が実る菊花展 丹精の菊はれ晴れと文化の日 花嫁へ隣近所が押しよせる 隣にも声かけて出る独り者 入賞で苦労ふっとぶ菊花展 エリートにされてムードのない男 爽快なムードへ若さ丸出しに 温泉の甘えて見たくなるムード 夏の汗いまは金賞菊花展 Vサイン出そう見合いはいいムード 名幹事ジョークも入れて盛るムード 手朝 一輪匂う心のあたたかく ぶれがなつかし老いの写真帳 紙での頼み電話で念を押す 寒にいやな予感の手紙くる むらくも句会 しさ忘れる共稼ぎ 明朗報 はる代 よし子 ヤス子 ゆき子 みどり マサコ 百 幸 克峰蚊清 福 文孝 形入 子 声祥 子子華 郎 水仙 老母を頼むひと筆家族へ忘れない 茶番劇ここらで幕を降ろそうよ 幕切れは言うまい生きる日々新た まだ幕は引けぬ私のドラマ画 感動の幕切れ夕日燃えている 余韻醒めやらず幕間を酔うている 内幕をすっかり聞いた貝の口 明日からの俺に男の幕を引く 幕引いておんなは貝になると言う 幕間の私語は聞きもらしてならぬ 謹んで賞の重さに耐えている 何となく年功序列の軽い賞 受賞者が出て職場冷えている 賞ねらう意地がまだあるやせ蛙 波瀾万丈潜った私へ賞をやる 最終の履歴書賞罰なしと書く 穏健な父にあげたい平和賞 助演賞あげたい母の丸い背 幕開いて人形熱い血が通う 声かけて誘い合わせる両隣 ママだから一等賞にあこがれる 賞からは縁が遠いが日々平和 賞状へ過去の試練が生きてくる だんだんとその気になってきてる顔 家族だからいっしょに転ぶ坂の道 北風へ菊も名残りの美を競 上品な方にひかれるうしろ影 ふとん干す陽ざし隣も窓があ 隣にも分けて楽しむ花の苗 川柳わかやま 他人の口がうるさすぎ 堀端

紀久子

紀美女

太茂津

正凡緑桂

博太良

健康の幸せ病んで身にしみる 初孫に心いそいそおもちゃ買う 特賞へ天狗が鼻を磨いてる 又余震命ちぢまる音で来る 白髪抜く鏡にしわがうす笑い 満腹のごろ寝で飢えのニュース見る 若嫁へ今は家紋の枷が消え 宝石に女心がふと乱れ 井戸端の会議に邪魔なのが帰り 脱サラへ風の匂いが素晴らしい 頑是ない孫が家族の和をかもす 孫の振るタクトでテンポ合う 食卓に家族の膳と猫の 手招きで家族を呼んだ聴診器 たとう紙に女系家族が生きて 人柄が家族ムードで和ませる 励ましてくれる家族のいる限 打吹川柳会 したはずが生きてる家族主義 家族 60

登志代

善正和

三男報

裕三庄

男

平子

代

明小さえ

さくら

武勇忠

雄

年下の主人を持って姉気分年下の主人を持って姉気分年下の夫に妻が振るタクトうとまれて世話をやきたい母心母死んでそれから里が遠くなり米を研ぐ女であるを言い聞かす小娘がピエロのような化粧をし古里の屋根見るだけで気がなごみ減反の寂しさいやす穂の重さ当局は善処しますでうまく逃げ川柳ねやがわ 高田 死ぬまでに亀一流になるだろう

柳宏子

千寿子

栄美子

白光子

孝康亮ゆ高節い忠梅吉志文寿柳川一規俊 朝 美子二子代子子男朗朗子子湖風楽心仔子

100

好狂凡天 夫虎郎彦

後継ぎのない一流を寂しがる 湖底から聞こえる村の鎮魂歌 馬鹿になった扉で言う事聞かん音 捨て仔猫愛を信じて寄って来る 湖に月が二つありだまってる 考えることが苦手な九官鳥 水はけが欲しいと思う河口湖 流れ星湖上で見てる遠い夢 道問えば女は彼岸花を指す 銀行の扉が固い朝の顔 他人に傷負わせすらすら走るペン 満ち足りた形で着てる妊婦服 とびらさんひらいてとじていそがしそ かぜひいてねこんでころんですっとんとん 海女何を考えてるかまた潜り 湖が眠ると悪魔石を投げ 借金の人にもサッと自動ドア 蚊がひとつ寝てる空母を攻めてくる サラ金のドアに地獄と書いてない 満足な顔産院のドアを出る 管理下に生きる自分を考える 酒を注ぎゆっくりせよと夜長の灯 ノックする扉は二十一世紀 秋風にそろそろ鈍行動き出し 金の椅子王様麦茶が欲しくなる 入ったら出れぬ扉は叩かれぬ 流の顔の裏には見栄があり 流を目ざせと無理な事を言う つのまに決めたか子供の敷くレー 焼く匂いへ星が降ってくる つ拾って地球美しく V ル 小学生 小学生 かすみ子歩 弘あやめ 覚然坊 まさお よしひろ 春 Ш

秋の天水打って石睡らせる 遅咲きの花がもってる新鮮味 定年を考え過ぎて痩せてい 撫で声で女の扉あけに来る 考えたぶんだけ結果悪く 3

小麗入

路水仙泉

右近報 柳宏子

恋文を出したい家が近すぎる

近道にコワイ関所が一つあり

仙吉郎

御近所へ参りましたと顔を売り 商いも戦も都へつづく路 出稼ぎに家路が遠い歳の暮

離婚した妻傍聴席の前に居 飛行機雲男は帰路を考えず

千星 利午 茂泰世子 斗義郎樹世 テルミ 義郎樹世和郎

批評家のくさした歌が良くはやり 結婚は自分で選ぶと娘の決心

ファッションの感覚違う京阪神

流行を一寸入れたい服のひだ 決心を促す役を背負わされ 決心がつかず歩幅が乱れ勝ち 決心はついたが先立つ物が無 決心がつき直線の道を行く

病める身は何を決心すれば良い

悟すみれ 茂一郎

朝起きの決心みのり健康に

人垣は騙され易い顔ばかり

子の決心次は百点取ると言う 松茸が威張る悲しい秋ですね 嵯峨訪うて秋の詩嚢が満ちて来る

小企業もワープロ時代に突き進む

路地裏に住んで論語を愛読 栄転も別れがつらい駅の風長考の一打に決まる石の音

> 近江路の夕陽は戦語らない決心へまだ迷うてる朝の靴 病い去り鏡の顔に紅をさす 流行品がバーゲンに落ちて行く もう逢わぬ別れは後ろ振り向 流行に遠く制服着て凜々し へ歯止めがかかるもう不惑 しリンゴの皮が長 かず 井上柳五郎報

桃太郎も武蔵も翔けた岡 Ш

飽食の夢を貫く核を貯め 貫いた鬼には夏と冬ばかり あじわいのある忠告にふと目覚め ローカルであじわう旅の愛一つ 割勘であじわう酔いも上中下 あじわいの小まめなぬか漬母の フリー切符の味が効いてる岡山路 弥次喜多の足をとめさす岡山路 岡山路白桃みやげにエンヤラヤ

七光りの舞台裏方木偶に見る 嫁が来て家の裏方入れ替り 裏方が造り出してる名舞台 清掃日奉仕に先立つ老夫婦 惜しみない奉仕の心を母は分け 裏方の妻裏方の裏に座し

予定表奉仕の汗を惜しまない

奉仕する仲間も同じ傷を持つ 帯きりり寡婦で貫く意地を見 信念を貫き左遷地へ向い

++

ーゲンの奉仕に買わぬ気でのぞき 元典恒吟 IE

三十四 佐津乃 スギエ 佐加恵 たけ志風 玉柳五 白 風彦

悲しいから話題を変えて涙ふく 提灯と格子の家並み京の彩 過疎に居て自己満足の深呼吸 生かされて修羅の巷に冬が来る 人哀し田舎の町へまい戻り 欲ばって結局一も二も取れず 衛兵がオモチャの様に並んでる 支払いをするのにこんなに並ばされ 並ぶものない業界の立志伝 並んでる順に出て行く靴の数 印象は歯並びの美しいひとだった 旅すれば藁屋が並ぶ過疎の町 となりの子並ぶ成績ライバルだ 漫画本並べて置いて子等ねむる コレクション並べて思いはかけめぐり 孫も娘もつやつや七五三 何くその負けず魂が良いテスト テストにはいろいろ苦労をするよねえ 矢印を行けばあほうと書いてある 矢印は無いが蝸牛は歩き スタンプの スタンプが馴染めぬ明治は筆を持ち スタンプに乱れた文字の年質状 矢印をつけた女が逃げてゆ やかな筆跡わからぬ墨光る 枚の紙で人間テストされ 回のテストできまる我が運命 にた川柳会 を心に定めて修業積 つ言わず 嘆き頭を叩かれる 聞かずの日のさみし 西村 広井すえお報 小四彦 小6 早苗報 登美也 凡 摂いづ大 きみえ 独 悦東 **圭雅山** 覚然坊 すえお 健 桃 春 華 仙 風子柳 月夫友 妻病みて水の冷たい朝を知る 背な掻かせあの世でもこの妻がよし まだ生きていたかと遠慮のない仲間 くどくどと礼を言われてくたびれる 星の夜は星の童話に窓ひらく 亡母と思う星へ今宵も窓を開け 陽溜りの窓辺祖母にもある仕事 物さしに絹の手ざわりいつくしむ 無意無欲なんと優しい仏の目 絵を描けばこんなに巧い知慧おくれ 絵日記に太陽燃やして子が伸びる 雲の絵をあかず眺めて野良も秋 日記書く窓へ満月忍びこむ 窓口が多くて庶民うろたえる 老い佗びし欲一つ捨て二つ捨て まだ海を見ない子の絵がただ青い ひびの手をいたわる朝の雪少し 街の噂聞いて来たのは右の耳 女房がいたい所に針を刺し 可も不可もない自画像へ汗を積む そこばくの旅情コケシの顔をよる 柚子香る最上稲荷の階上る ある事をふり切りたくて秋の旅 ワンダフルねばりのうまい山 お百度の足煩悩とすれ違い カラオケでお詣り誘う秋祭り 賽銭の割に大きく鈴を振る いみじくも桐の一葉に哀しい計 ラーメン屋背広で株屋の客でいる ひざの猫ひとり言聞く日 川柳大原 白岩 の芋 文衛報 いさむ 早雀弘雄》 苗子朗々女 寛はるみ 文克正みみ睦元巴天 さづ 衛巳巳ええ子江子信 政直寬 かずこ 寿美子 宗 多賀子 光 散りいそぐ紅葉が思慕をかきたてる 紅葉狩りつるべ落としに歩を早め 西宮北口川柳会 妹尾 観世音ひときわ慈顔めく紅葉 大空の下で叫んだアイ・ラブ・ユー プロポーズうけて嬉しさ溢れ落ち よい子感するとおやじはくじを買 金出来てからの迷いが深くなる 大輪を咲かせてほっと菊奴 秋夜長鰻上りの電話代 老人の挨拶無理をしなはんな 着陸のショックで終った長い旅 屋上に都会の広い顔がある 薄皮を剝けば吹き出る恋の血よ 気がかりの中で女の意地を見る 小荷物に秋の味覚をつめる母 さりげなく本が届いた誕生日 甘柿の噂蟻から知らされる 定期券さらば定年今終る 菊人形妻の太さが目立たない ミス河内言葉遣いを審査せず 中流の意識多税を我慢する チリチリチンさっそう若妻出勤す もひとりの私に聞かす 五十年妻とトボトボトボトボと かあちゃんと大先生も妻を呼び 人寝のテレビが子守唄になり 両家の接点に住む新家庭 の凝りだけが残った体育祭 柳はびきの 独りごと

一昭和

与呂志

美恵子

隔谷義

一屯子

111

7

石橋義一 良絵

吐胡伴

春江報

敏

きよ子

宏

塩満

敏

ゆきお

他人事と泣いてすませるメロドラマ チャンネル権取ったドラマに欠伸する 海へ向く墓はドラマがありそうな 気紛れな女が筋を変えたがる テレビドラマ有閑マダムに謀叛ふと 夏休み孫の掬った金魚の死 子猫抱くもはや少女でない乳房 刃こぼれの庖丁ながらきざむ幸 恰好よく乗る母さんのミニバイク 買いたてのバイクに大きな署名する 人生の起伏病舎にあるドラマ 舞台裏そこにも一つあるドラマ 試験管の手を借りドラマ誕生し 黒を着て秋晴れをゆく長寿の喪 運動会美人先生写すパパ 空澄んでなんだかんだと妻太る 雑学の知恵で投げ縄すり抜ける 夢判断ぴたり当たって掏摸に会い 葬列に除行しているミニバイク 警察も本気で叱るミニバイク ミニバイクミニスカートは困ります 俄雨待つのが嫌いなミニバイク ミニバイク悠々婦人科の門に消え ミニバイクルール違反が多すぎる 大男に押しつぶれそうなミニバイク セットした日には乗らないミニバイク シルクロード幾多のドラマ秘めし路 隅で小さなドラマ温める 下の隣の花に水をやり の石一つにもあるドラマ のほとりに紅葉燃ゆ よ志子 半はつ絵 キミ すみれ 婦美子 しげお 敏杜春眉 かすみ 幽静堕 右照郁 世子 夫的江

> 年寄りの指の先から冬になり 握りしめた小石をそっと草に置く ペンダコの指で机をなぜて去る 花売れてしまえば花屋小さく見え 遠景に火の壺を置く冬の影 ななかまどどうにもならぬ子の非行 みつ子 幸花伊笑

今の地位支えているは影の人 面影も頑固もいつか親に似 マンションは板のぬくみのない住い 尾浜川柳会 黒川 男

曲り釘叩き直すがまた曲り 老妻はボケた写真がお気に入り 板塀の相合傘に居る私 花嫁を泣かすスピーチ母も泣く

い新義光清を吉男重大

昌 寅之助 義牧佳

陰干しが似合う私と箱鰒と

岸和田偶作

長生きをしてとばあちゃんの肩をもみ たいようがてらすとちきゅうきれいだな 菊の香り一ぱい抱いて逝っちゃった 新聞のバイクの音に起こされる 美しく老いてもやはり欲がある 弘夢之助 居報 亜貴子 昭

脚光を浴びて松茸人工化

柳たけはら

河豚食って来たと男は威張るなり 提灯にされても河豚の目のやさし

野仏に蓑を貸したや秋冷雨 宅急便母の匂いに包まれて 金メダル立ち台に男匂いけり 隣から包うスキヤキ冬を知る 野良大と野良大冬の話する 野良大にサインを送るうちの大 くくられた大を野良大馬鹿にする 野良大に人間のエゴ教えられ 赤トンボ何処を飛んでも世は平

極楽はこの世にあった鰒の味 ひれ酒の情けに出遇う昼の月 **鳍酒の酔いか毒舌冴えている** 喜多八を出ると鼻毛が長くなり 河豚提灯ふぐは涙をこぼさぬか ひれ酒に浮く金箔を目出たがり

私になやみなどないなぜ聞くの

去恵

太茂津 史 武 操

針持つと亡母に似て来る妻の背よ 外人と話せてちょっとうぬぼれる 水滴の一つひとつにあるいのち・ にんげんの値打ちを自問自答する 無愛想商売の顔別に持ち 知らぬ間に開いた距離が縮まらぬ 秋風の誘いにわくら葉のってゆく 修学旅行の前に峠が一つある 六年になると勉強ばかりふえ **公仁**

留守番は本が一冊あればよい 敬老の日体育の日老人になり ある出会いそれからドラマ始まりぬ 鏡台を磨くと青春よみがえる マイペース崩して消えたシャボン玉 切れず 節のばら シゲヨ 淑 子路

ひれ酒に酔えば酔う程うまい河豚 花を持つおとこに男の夢を聞く すやすやと仏と遊んでいる微笑 勿体ないお乳どっさり授けられ 太八 洋静房 之祐水子

河豚食べる作法へ河豚の顔になる ひれ酒の酔に岸和田よいところ 喜太八の河豚なら妻もついてくる 助代 夢好子

白光子

募 集。

課 水 JII ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。 ÉП 耳 題 煙 象 吟 帖 抄 塔 (10句) (各題5句以内 (3句 10 句 藤 新 橘 里 西 高 Ш 尾

三月号発表

1月

15

締

切

栞

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 谷 素 笑 小身郎 女 痴 選 選 選

★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

選 選 選

似 武 ★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず 題 柳 四 器 月号発表 会 3 塔 吟 (各題5句以 (3句 10 句 句 福 野 両 橘 黒 西 (2月15 Ш 本 高 尾 英 洋 右 薰 締

重

風

選 選 選

愛 課

風

選 選 選

栞

水 JII

1月の常任理事会は休会

昭昭 〒545 和和 定 年分 大阪市阿倍野区三明町二-一〇-印発福 Ti. Ti. 発行所 刷行集 振替口座大阪8-三三二六八番 ウエムラ第2ビル202号室 九八年年 所人粮 六 Ξ 電話 (BZ) なデー六九 五 JII 藤 中 千千 百 月月 Ξ 円 原島 柳 百 百 送料50 童 蓬 円円 日発行制 心太 送料共 一送料共 社郎

本社1月句会

題

点 おはなし

滅

じわじわ

頭

尾垣口

史 弥

栞好度生

選選選選風

会席

費題

五百円題

当日

口発表

各題三句以内厳守

숲 B 時

Ŧ

月 七 日 会 寺 土 X

★58年度月間賞杯授与と全出席 ★短冊交換会(一人三点以内 06.772.1 西谷江宮橘 高

地下鉄谷町九丁目·近鉄上本町下車 石 -後六時 4 进 町 4 19 4 1 東 12

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円 同封のこと。

> JII 柳 塔 汁

面」 「すんなり」 2月の兼題 断

2月の本社句会は7日(火)

電話投句を午前九時から受付けます。 課題 NHK総合テレビ生放送 おとことおんな 夫婦・職場・恋愛など)

どしどしご応募下さい。 TEL 06 · 941

990 Ŏ

よめやうたえや川 柳 天国

11

月

日午前十一

時から五十分間

Mil 集

組前テレビ 柳元日、石田子 天国 ピで 省 時 をかの昨 な 放映のあえ かます 十分間のいと同様、 うね N 8 かたえやの年 H K

ゴ卵雀 さればい お願 致し しい歴 重ねる番 総合 ŧ 10.40 れる総選挙 200 また、 課題 の加の 掲載 たところ、 柳 数 聞の句も、みどり句 というのがあった の「目」の作品に、 作 新

みおがうに 昨願、ベ当 大は 川 板 大 北 和 雑 5本本 催 大方の 選を b. 社はこの記念す 刊号は二月十五 相元紋太、 申しま 十六才であっ 、有意義な企画を行はこの記念すべき年十六才であった。 麻 します 絶大なご協力を 路郎、 取期 発表致します 一月十九日、 林俱 3 本田渓花坊 岸本水 楽部で 類 は想と 発

応募版 が作品が 毎 を選 品を 7 読売新 エツ 3

来

たことを深

湖山

し上げ

の重

みつ

よる意

ME

日の作品とが酷気の作品と、別紙の 国民の 傘みどり 出と、別紙の十十一月二十八 を経ずして同 何だ。 酷似 わし テ ことば

会お通の会が朝 筆かし一の、の おかしいことに思えた。通した点も、偶然とは言えの一字の違いだけという共の一字の違いだけという共会の句も、「の」と「が」

行 選をする立場にあるものの暗合や盗作を見分けること時合や盗作を見分けること時の出来る場合、出来ぬ場合は とは 業に思える。

味 あ

映 11 徹子 でする詩 部屋

のこかの つつつつつつ から聞 ことば ことば ことばで むもっ 秋田 そ お仲暗 たというこ れぞれに さる住 100 儀 れる

あ けたい。 111

意義

滐

創立

柳大会

囲の何も、

手、読み手の差異にもよる。 も話し手、 る話し言葉も川 ながら同じ to to, それ の違いであ 九 書き手と、 は思 20 九 ない 17 枷 1) ようで でう書 聞き 老 100 力 りふれた姓をとになろう。 1 いわれ ばり 台昭 むことだろう。 おしん、 れたら、これは文句なおしん、田中、「気くおしん、田中、「気くおしん、田中、「気くおしん、田中、「気くおしん、田中、「気くおしん、田中、「気くおした」というこ 和 た人物 を三人選べ

やの や多 一様性など、 4 かしく、 胀 知に史 密も一 は売 つお ると いはそ 古ん からつ 大成功 辺にある 言わ商 るのわ商か私れ品

治さ ようだ。 かしきの因 苦しんでいる。 ことばで苦しみ、 打 ば識るほどむつ もこの川 川柳のむつ 辺にある が全国二十歳

を語 と の で と の で に 吊りさば ズである。 げ のは、 たキ F ぎょうざで有 多 I ヤック コン店が壁 妻には愛 F

付っていて、よ

て、大三

174

四%

することばにこれ 柳には こはお のおもいを表現れもいを《とつ私はこの後に

したという。

を見ない人の

仕事や家事 間帯に家に

年に最も話題 き ろによると、九八人 しん」を知っていて 気にないたという。 で「おしん」を見た したという。 でしい人だが、 のだしい人だが、 のドラマは好きでへ のドラマは好きでんが一二%。 けだ。(私もそのッヘソ曲 に拒否反応を示しているわ 五百人の内、七人が積極的 5 け 一人 一%いる。干さでない。上 ″この種

11

中は新潟、鈴木田身地、おしんのも皮肉だが、 間を 騒が 木ん はは 世 山形、田の三人の 東京。 ☆さて か日本 か日本 ると、 1 ダと思えてくる。 柳界はどう 社会は、 作 一本人という まだまだ 類にな

るよう n 30 を言 つわ べで、野はより で、野球新地皮世

棚

0

だりり

た沙

性に俟たね

n

判をする者それぞれ

あ

作者と選

华も、

なおしばらく

さり

とられたり、深い思げない軽いことばが

思い

題

がくすぶることで

のを浅く解釈

釈

れたりす

よくあ

ることで、 370

言え

11

と調

人が

優

るよう

なことだけ

新

投稿欄案内

短 歌

選

信 木曜日

はがき一枚に三句(首)以内。

投稿随時·自由課題

大阪市北区中之島三 二

電波新聞大阪本社学芸部あて

川柳・俳句・短歌を明示

(朝日新聞ビル内

投稿規定〉

要優秀何には掲載紙をお送り致

掲載

H 佐.

排

俳 句

選

者

小

寺

IE.

毎週火・金曜日

柳

H 橘 毎週水・土曜日 高 薫

厘

(朝日新聞ビル内)

大阪市北区中ノ大阪本社

電 東京本社 波

東京都品川 1X 新 反田 丁月 聞

社

ュームたっぷり スタ ミナ満点!!

焼売 焼餃子

